

---

# 異なる世界で

のぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異なる世界で

### 【Nコード】

N0585X

### 【作者名】

のぶ

### 【あらすじ】

買い物してたらいつの間にか砂漠にいた！

異世界トリップという、いかにも王道な設定です。

やや腹黒い主人公が異なる地で、力強く生きていくお話をご覧ください。

## 蒸発（前書き）

作者の趣味全開です。笑

文才はありませんが、ガンバルのでひとつよろしく。  
というところで、とじろぞ。

## 蒸発

『どこですかーっ、ここは?!』

私は混乱していた。だから叫んだって訳ではないんだけど。

叫んだその声は砂に吸収されて、だだっ広そうなの地には響かなかった。

そう、今、私は、

…砂漠の真ん中にいる。

真ん中って表現が合ってるか分からないけど、四方を見渡す限り、砂、砂、砂！木も、ましてや砂漠定番のサボテンもない。そして八方を見渡しても、人っ子一人、虫一匹たりとも視界には入ってくれなかった。

事の背景を言おう。簡単に言っちゃえば、気が付いたら“ここ”にいた。ここってのはもちろん今立っている、砂漠。

てゆうか暑い。途方もなく。

寒いからと着こんでいた上着を脱ぎ、ロンTになる。それから額と首を流れる汗を拭いた。

何でこんなことになったのか、とりあえず整理しなくちゃ。

三日後に大学の入学式を控えた私、榊原 寧 サカキバラ ネイ  
は今日引越しを終え、無事一人暮らしを始めようとしていた。

なのに、なのに！一体どんな状況だったの。

こんな砂漠、知らないし。いや、サバクってむしろ何ですかって  
話ですよ。しかも買物袋を二つ下げて、結構間抜けな凶。

中の生もの腐っちゃいそうだなあ。

『って、今はそれどころじゃない！』

混乱は混乱を呼ぶだけ。だから、落ち着かなきゃ。

そう分かっても、混乱しないはず、ない。整理どころか余計分  
からなくなっただけだった。

「わーお、でっかい声だね」

『ウルサイツ！今はそれどころじゃ…ナ、イ？』

え…今どっかから声が聞こえた気が、したんだけど。気の所為か。  
あまりの暑さに頭イカシたのかも。

一人首を傾げる。だって、もう一度周りを見渡しても、やっぱり  
誰もいなかったから。

「どうして疑問形？」

…ん？やっぱり声が聞こえたみたい。そうか、ここは天国なのか。天国って花畑じゃないの？三途の川だって渡ってないのに。

いや、川はきつとこの暑さで干上がったんだな。花畑だなんて嘘言ったの誰だよ。こんな暑苦しい砂の世界じゃ天国じゃないじゃん。やっぱり死んでみないと分からない事実ってことなんだね。

「もしも〜し？何で黙ってんの。」

…空耳じゃない！確かに声が聞こえた。でも、どこから？

キヨロキヨロと辺りを見渡す。でもやっぱり砂漠には私以外何もなかった。

「あつ、ひよつとして僕を探してるんだね。状況把握力はなかなか悪くない。

ただし、詰めが甘いね。」

何の詰めだよ。

間延びした喋り方にイライラしてきた。だっていつの間にかこんなところに立ってて、幻聴みたいに誰もいないところで声が聞こえてくるってのに、何が状況把握力は悪くない、だよ。

ツッコミどころ万歳過ぎて、そんな気が失せるって。

「おーい、大丈夫？」

大丈夫もクソもあるか！頭の配線おかしくなりそうだったのに。

「アハハ 混乱しちゃってるんだネ！」

いちいち頭にくる言い方すんな。いくら寛容な私でも、そろそろキレたい。

「ヒントをあげよう。」

語尾を伸ばすな！そして最後にちよつとだけ発音するな！

会話なんてしたくない、って訳ではないんだけど。今は会話できるような人物がこの人しかいない。

ただ、姿の見えないこの声の人物はものすごく面倒臭い人だって分かるから、ツツコミはあえて心の中でしておいた。

「周りにはいない。下は砂だからいるはずもない。あと残るは？」

…まさか。あるはずない、そんなこと。

そう思いながらも、半信半疑の中ゆっくりと上を見上げた。

『… … ツ？！』

「アハハ 驚いてるねえ。」

“驚いてる”の域じゃないからーっ！どつやって浮いてるの！？

てゆーか何なの、そのマヌケ過ぎる画は！

その声は見事に上から聞こえていた。

頭イカしてんのはこの人だよ。さつきは自分かと思っただけけど、この目に見えてる状況はどうやっても真実以外の何物でもない。

…三輪車？

あろうことか空飛ぶ三輪車に乗っていたまさかのイケメンは、姿形こそギリシャ神話から飛び出して来たような神々しさなのに、見事なほどまでに残念だった。

金の髪、碧い目、纏う白い衣装。彫刻から飛び出してきたみたい。

『…あなたは誰？何で三輪車に乗ってるの？』

おずおず聞いた。声は絞り出されたように固く、低い。身体が強張ってるのが、自分でも容易く分かった。

だって頭おかしい人だったら怖いんだもん。世の中何かと物騒だしね。用心するのも当たり前。

でも、この状況でできることはこの人の話を聞くことくらいしかない。それに関しては至極残念だ。

「これは三輪車って言うのかい？小さな子供が乗っていて楽しそうだったから、ちょっと拝借してきたんだよー。この乗り心地はサイ



コ―だね。

それにしても、キミは何でそんなに熱烈な視線を向けてくるんだい？あつ、もしかしてこれを狙ってるんだなあ。そんなに見たってこの三輪車はあげないよ！」

『いらんっ！』

何この人。会話が一向に成立しないんですけど。

私は頭に手をあてて、お手上げのポーズをとるしかなかった。

てゆーか、拝借って言いつつも、子供から盗んできたってことじやん！サラツと言っただけど、れっきとした泥棒だって。マジ、面倒臭い。

『ああ、そーか。これは夢なのか。夢なんだな。もう十分満喫したから早く目を覚ませー。』

買い物袋を片手に持って、空いた手で頬を抓って見ると。

…痛かった。

「何を言ってるんだ。現実逃避は恥ずかしいから止めなよ。」

『あんたのそのカツコの方が百万倍も恥ずかしいわっ！』

屈辱的。大人になって楽しそうに三輪車に乗ってるやつだけには恥ずかしいなんて、言われたくないっての。

ああ、全身の力が抜けてきた。死ぬのかな、私。

もう何でもいいからこの状況から逃げたかった。

「おっと、僕の許可なしに寝ようとするなんて、いい度胸じゃないか。」

知らないって。力が入らないんだもん。とりあえず、喉、乾いた。

…水。そうか、水買ったんだった。ガサガサ音を立てながらビール袋を漁る。

あ、みつけた。

「ほー、無視するあげくに飲み物って。君、思いやりがないね。」

あんたに言われたくないわ！

じとーっと睨みつけながら、ゴクゴク喉を鳴らして一気に飲んだ。

『ぶはーッ。生き返るー。』

上から“おっさんかよ”なんて聞こえたけど、私、ぴちぴちの18歳ですから。さて、喉も潤ったことですし。

『アナタハダレデスカ？』

質問タイムと行きましょう。

「なんでカタコトなの？まあ、いいか。僕は“神”！」

What? 今何とおっしゃられた？

『か、み…さま？』

「イエス、ザッツライト」

やっぱり、天国だったのか…うん、意識が朦朧としてきたし、そうなんだよ。

私は完全に体を砂の上に放り出した。

「ちょっと、ちょっと！まだ話は終わってないぞ。」

『神様、ちょっと、ごめん…くらくらしてきたし、目が掠れてよく見えないんだ。』

実際、もう、太陽の光が眩し過ぎるくらいしか見えない。あとは輪郭が全部ぼやけてる。

「ああっ、しょうがない。人来ちゃったし、あとでまた会おう。僕の名前は“ジュノワール”。

いいか、“ジュノワール”だぞ。」

ほら、繰り返して、と言われて小さく呟く。

なんとも言い難いカタカナだな。とか、失礼な事を考えてみただけ、何だか焦ってるその人は、早口でまくし立てた。

「そう、OK！そう口に出して呼びさえすればすぐ行くからね。じ

「や！」

あ、三輪車が去っていく。

ものすごい勢いで漕いでいる。だけど、それよりも遙かに速いスピードで進んでいた。

あれ、浮いてるし、漕ぐ意味無いよね…

力無く砂の上に放り出した身体。右手の方へと三輪車で去っていく白いものは、霞んだ目には、すでにはつきり見えていない。そして、霞んだ視界から物体らしきものが気えっ去った。

そして、私の意識も…

## 目覚め

『んっ…』

「おい、大丈夫か？」

あー、ダルイ。私、何してたんだっけ？

…ああ。神様とか名乗るイケメンが現れたんだっけ。三輪車とか、浮いてるとか、奇妙な事があった気が…

変な夢だった。目を覚ましたら、きつと！

きつと…？

『じじ、ぶじじ？』

視界に入っていたそこは、白い部屋だった。

病院、とか？いや、ひらひらがいっぱい。お姫様みたいなベッドに横たわっている。

日本人には滅多にないと言う、天板付きのベッド。なんでそんなところに寝てるんだろ？

状況を把握するために、部屋を一望しようとゆっくりと体を起こした。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

横からする声。感情の浮き沈みは無く、ただ淡々としている。

でも、少し待ってほしい。理解するには…ちよつとキャパオーバーかも。容量の少ない私の脳には、かなり厳しい状況だった。

何が、どうなってるんだ？

さつきまで砂漠で三輪車に乗ったウザい神と話した夢を見て、その後は知らないベッドの上で寝てる、と。

…あり得ない。どんな状況だよ。

私が押し黙っていると、小さく“記憶喪失か？”と零す人が一人。

『てゆうか、あなた、誰？』

寝起き特有の掠れた声。相当寝てたみたい。そういえば、酷く喉が渇く。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リツキンデル・シェパードだ。」

…今日はイケメン祭？何、この格好良い人。

さっきのアホみたいな感じで夢に出てきた神様は僂げで、綺麗な感じだったけど、この人は、亜麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整っていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。

てゆうか、外国人？日本語喋ってる？上手すぎやしないか？

「おい、大丈夫か？」

ちっ、近い！

顔に一気に熱が集まってきた。

あれか、外国人特有の、スキンシップってやつか？！

私には今まで関係ないことだったから、実際にされると戸惑うて。

そう思ったのがいけなかったんだろうね。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

“だす”って、みごとに噛んだ。

余計に恥ずかしくなって俯くしかできない。

今までにないイケメンに会ったんだよ？そりゃ、少しくらいは猫を被って、女の子らしく淑やかにしておきたいものだったけど。無念の一言に過ぎる。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったみたいに流された。けど、有り難いから私も何もなかった体で答える。

『榊原寧。』

「サカキバラ・ネイ？どっちが名前なんだ？」

……？どっちも何もありません。何を言ってるんだ、このイケメン。

いや、待てよ。目の前にいるイケメンさんは見るからに外人っぽい顔つき。外国だと反対になるんだっけ？

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっとのことでそう言うと、クーンは優しげな笑みを零した。

と、思ったらまた眉間にしわ。元の真剣な顔つきはどこか厳しそうだった。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

至極真剣な趣。私は自分が一筋縄ではいかない状況にいるんだと思っしかなかった。

とりあえず、目の前の人は信頼できる人間だと思う。勘、だけど。だから正直に話そう。



『…今から言うこと、信じてくれますか？頭がおかしいヤツだと思われることを、きつと今から言います。だけど、真実だから。』

鼻がつーんってしてきた。

混乱のせいで、普段はありえないこと、泣くなんて行為に及ぼうとしてる。

だめ、泣くな。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

顔は見えてないはずなのに、優しくかかる声。それは、涙をもつと誘うものだった。

頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしてここに居るのか、とか、目の前の人がどうなのか、とか、もっともつと疑問は頭に浮かぶ。でも、とりあえず、話してみよう。そう思った。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

そうか。私、助けられたんだ。

あのアホ神（真実か分からないけど）が無理矢理話を聞かせようとして、炎天下の中に放りっぱなしにするからこんなことになった

んだよ。

あやうく神様に殺されるとこだった。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”と首を傾げる。

やっぱり。私は全然知らない土地にいる。だって、さっき言われた国の名前なんて聞いたことないもん。それは自分が無知な所為かもだけど。

それにしても、どうして言葉が通じてるんだろう？私、日本語喋ってると思うんだけど。さっきも思ったけど、ホントに上手な日本語話してるんだよね。

…とりあえず、話を先に進めよう。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。』

あそこでジユ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

あー、事実なのに、自分でここまで喋っというて、何言ってるんだこいつって思ってるんだけど。ってことはもちろん目の前の彼は…

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

真剣な顔して悩まないでください。私だって訳わかんないんだか

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

イエス、ザツツライト。神様の部分は割愛されちゃってるけど。

何度も小刻みに首を縦に振った。

信じてもらえなくても、事実は事実だもん。嘘はついてない。

隣から大きく深いため息が聞こえてきた。

わかるよ。私はどう考えても頭がおかしい厄介者だもんね。

「ニホンに、神様、ねえ。」

うん、その渋い顔、期待通りの反応だね。私だって訳分かってないもん。

『あ、買い物袋がない……』

いまさらそんな心配をしてみた。だけど、その返事はすぐに返される。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

あ、ホントだ！私の食材ちゃんたち！

日本人だって証拠が欲しくて、早いとこ自分が正常だって思った

くて。必死に力が入らない身体を動かそうとした。

けど、無理なことは無理だ。

『きゃっ…!』

「危ない。」

ベッドから転がり落ちそうなところをクーンに抱きとめられた。

うわっ。筋肉すっかりついてるよ。現代男子には少数派な肉体だ！って感動してる場合かーい。

『じ、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

すぐに言い訳を試みた。けど、すぐに頭の中では、小さな疑問が浮かぶ。

自分で言っというてなんだけど、服が違つような気が？

視線を自分の方へ持つていくと、まさかの白いワンピースのようなものを着ていた。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろっっ。」

中世のヨーロッパか！何て突っ込みたいのに、言葉は出て来てくれなかった。

『あの、これを私に着せたのって…?』

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

待て待て待て。早乙女？

辞書で引いた早乙女という意味に違いない。でも、それにしても若く見られ過ぎてる気がする。

この人、私を幾つだと思ってるんだ？

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

「14くらいだろう？」

ちゅ、中学生?!確かにアジア人は若く見られるって言うけど、あと二年で成人ですけど。

『私、18です。』

そう言うと、あからさまに驚かれた。あんな綺麗な顔の表情が変わってくれるのは嬉しいけど、ちょっと複雑。

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思っただ。」

うん、ストレートに言ってくれてありがとう。だけど、ちょっと傷ついたよ。

けど、笑顔を崩すことなく、気になる情報だけを聞いて行く。

『「ここでは何歳で成人ですか？」』

「15だ。」

なるほど。私はここではとっくに大人になってるってわけか。

『あなたはいくつですか？』

そう尋ねると、24歳だとすぐに返事が来た。

随分と大人っぽくいらつしやる。身長も180以上ありそうだし、そんな人から言ったら、160？もない私は子供に見えるんだろうね。なんか、嫌だけど納得。

ぐー。

突然の大音響。その出どころは私のお腹だ。恥ずかしいにもほどがあるって。

「食事を運ばせよう。」

「ごめんなさい。深く反省しておりますとも。けど、腹が減っては戦はできぬ、とも申しますし。」

「ここはひとつ腹ごしらえと行きませう。」

その人にお願いをすると、私はだるい身体をベッドに戻した。

「大丈夫か？」

気だるそうにしていたのが気になったのか、顔を覗き込んでくる。心配そうなその目は子犬をも想像させるほど、キラキラしていた。

…ちよつと可愛いじゃないですか。

なんて思っていると、ドアがノックされた。と、続々とメイドさんたちが入ってくる。すぐに食事の用意がテーブルに用意されると、メイドさんたちは出ていった。

早業っ！板についた仕事って感じ。

それに感動していると、大きく、少しかさついてる手が差し伸べられた。

「さあ、腹が減っているんだらう？食べよう。」

その言葉に嬉々として頷くと、伸ばされたクーンの手を借りてベッドから降りた。席についてから疑問が一つ。食事のセットが3つ。今ここにいるのは私と彼の二人。

どゆこと？

何て考え込んでいると、その様子で私が何を考えているのかわかったのか、答えを教えてくれた。

「もう一人、ここにくるヤツがいる。ネイの話を聞きたがっているから、あとで紹介するよ。ほら、待つてなくていいから食べる。」

促されはしたけど、先に食べるのはどうも気が引ける。私が厄介

になってるものだって言うのに、我が物顔で一人先に食べてたら失礼でしょ。

だから、待つことにした。



## 目覚め その2

「すみません。遅れました！」

…どうやらイケメン祭は現在進行形で続行中らしい。

しばらくしてやってきたのは綺麗な男の人。銀髪で青の瞳。線が細く色が白いその人は、クーンとは正反対の性質みたい。どこか中性的な感じがした。

「遅い。ネイが腹を空かせていると言うのに、いつまで待たせるつもりだ。さっさと席につけ。」

厳しいお言葉ッすね。

なんて勝手に私が待つことにしたくせに。やってきた人は私に“すみません”ともう一度言つと、席についた。

「ネイ、食べる。腹が減ってるんだろっ？」

そう言われて頷くと。

『いただきます。』

手を合わせてそう言って食べ始めた。

うーん、味薄くないですか？いや、食べさせてもらっというて言っ

ちやあなんだが、現代っ子は舌が肥えてると言いますか。

ほぼ味が薄い料理の数々は、正直言っていくらお腹が空いてるか  
らと言っても、食べ続けるには厳しいものがあった。

「ネイ、さっきの挨拶のようなものはなんだ？」

不慣れな手つきでフォークとナイフを使う私をずっと見ていたの  
か、クーンは手を動かした様子もない。さっきの言葉、つまりは“  
いただきます”が随分と気になつてる様子。だから説明した。

「私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。  
人間の他にも生き物はたくさんいます。そういうものたちの命を奪  
つて人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になつて私たちに力を与えてくれるものたちに感謝  
の意をこめて、あなたたちの命を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。

□

そう言うと、クーンはいただきます、と口にしてから食べ始めた。  
もう一人の人は私を微笑みながら見つめている。視線に気になりつ  
つも、口に運ぶフォークは止めなかった。

味気ないけど、お腹は空いてるんでね。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようにです。」

さいでっか。てゆうか、誰なんだろう？

疑問に思いながらも、味の薄さに幻滅していた。これじゃあ、食べたくても食べられないよ。うーん。少し考えてから箸をとめた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

いや、それはもう恥ずかしいから掘り返さないでください。今からでも穴を掘って入りたいですから。てゆーか、せつかく用意してくれたのに残すのは失礼だよなあ。でも味が：

………！思いついた！

私は買い物袋をとってきて、中を漁る。突然の行動に、二人は固まっていた。

「ネイ？」

不思議そうに見つめてくる。けど、私は構うことなく自分の作業に没頭した。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

訝しげな表情。

そりやそーだ。見たこともないものが並んでるんだから。

私は嬉々として説明を始めた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、

醤油に味噌です。』

ここに来たのが買い物帰りで良かった。何にもなかったから、必要な物をまとめて買って買った。できれば普通に自分の生活の中で使いたかったけどね。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

言い訳ですけどね。味が薄いから、なんて正直に言ったら失礼極まりない。

興味深そうに見ている二人に説明しながら、使ってみることにした。

まずは…スープか。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、自分のスープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなった液体。それを口に運んで、少し嬉しい気分になった。思わず笑みが零れる。

でもやっぱり二人は不思議そうだった。

私は構うことなく、サラダにはマヨネーズをかけ、バターで和えたポテトのようなものにケチャップをかける。口に運んでみると、どれもじっくりきた。

『…食べてみます?』

あんまりにも強い視線に耐えられなくなってそう言った。すると二人はすぐに頷く。

どうやらイケメン二人は、好奇心旺盛なようだ…と心のメモに書き込んでから、行動に移す。

私はスプーンでスープを掬うと、中性的な人に差し出した。

少し困ったような表情。

あ、マナー違反?でも差し出しちゃったし。いまさら引っ込められないって。

差し出したままにしていると、ゆっくりとスプーンに口を寄せきて、飲んでくれた。

それを確認すると、今度はもう一人の方にサラダを差し出す。さつき見ていたからか、気にすることなく口に運んでくれたので、腕は疲れずに済んだ。

あれ、反応なし?

二人を交互に見る。すると、少し止まっていた。

あらら、お口に合いませんでしたか?そう心配しているよ。

」「おいしー…」「」

『そうですか。それは良かった。』

そーでしょーとも。

私は満足げに笑みを零すと、残りの物を胃袋に納めに掛かった。

二人が物珍しそうな顔をしてたから、私は尋ねてから同じように調味料をかけてあげる。

すると、嬉しそうに食べ始めたから、一足先に食べ終わった私はその食べっぷりをのんびりと眺めていた。

「「ご馳走さまでした。」」

食べ始めと同じように私の真似をして挨拶をすると、メイドさんをお茶でお茶を淹れてもらっていた。お茶くらい私にだって淹れられるのに。

不躰なのだろうがじーっと観察していると、お茶を淹れて空いたお皿を手にとると、早々と去って行ってしまった。

「ネイ、本題に移らせてもらおうぞ。」

改まった態度に私もキュツと体を縮こまらせて、二人を見据えた。

…イケメンに視線を向けられるのって、居心地悪い。こっちが見つめて目の保養にする分にはいくらでもいいのに。

「こっちは神官のレークサイド・マカリアスだ。」

一時間近くもずっと一緒にいて、しかも食事を共にしたのにも拘らず、漸く名前を知ることができた。

それにしても、こう、何て言うんだろう…神々しい、よね。さっきのあほ神様よりも神様っぽいし。クーンって人と並んでも見劣りしないその姿に、圧倒された。

なんか、私、ふつーだよな。

ちょっと淋しく悲しい気分になっていると、何事もないかのようには話は進められていた。

「砂漠で倒れていたネイを回収したのは私だが、砂漠にいるのを視たのはレークだ。」

“私”？さっきまで俺って言ったのに。俺って言った方が、見た目に合ってたからなんか勿体ない。

でもよく分かんないけど偉い立場にいるみたいなお雰囲気だし、なんかしきたりとかがあるのかもしれない。

レークって言うからその人に目を向けると、ばっちり視線が合ってしまった。

につこりと笑われると、俯くことしかできない。直視できません！

「私が盆の前に立っていると、誰もいない砂漠に倒れている貴女が

視えました。知らないと思いますが、あの砂漠は誰も通らないんです。」

「…そうだったんだ。誰もいないところに倒れてるなんて、死んでたっておかしくない。」

「助けていただいて、本当に有難う御座いました。」

頭を深々と下げる。状況が飲み込めなかったとはいえ、もっと早くにお礼を言うべきだった。

失礼極まりないよね。

「ネイさん、とお呼びしても構いませんか？」

そう尋ねてからレークさんは話し始めた。

「本来ならあの盆には滅多に一人の人間だけが映し出されることはありません。使えるのが私だけなので周りの人間にはバレていませんが、これが知れ渡ると大変なことになります。」

「…なんかよく分からんが、大変な事に巻き込まれた？そんな感じは否めない。」

二人の顔を見ても、冗談だ、とは言ってくれなさそうだった。

「鏡盆には本来、たくさん人間の人間が映し出されて、国や世界の状況を知らせることしかできない。」

眉間にしわを寄せていうクーンさんの表情からして、深刻な事態



なのが良く分かった。

もし何かあったら、あのアホ神、何をして詫びてくれようか。ただじゃ済まさん。

「この国の言い伝えでは、鏡盆に映った人間は、神からの声を届ける預言者だと言われている。」

もしや…？

少し俯いた状態から、目線だけを二人に持っていく。

っ！やっぱり！

「察しの通り。預言者はつまり貴方ということになります。そうなった以上、貴女が映し出された鏡盆は、最初の神の啓示があるまで使用できません。」

砂漠に倒れているところを保護していることにするので、まだ上の人間には話していません。しかし、知れ渡ってしまうのも時間の問題でしょうね。」

明るい笑顔で言わないでください。まじ、厄介すぎるから。イケメンだから直視できないとか、もう関係ない。

私なんて、この前まで単なる一女子高生だったんだよ？

それが急にこんな見知らぬ土地にやってきて、おまけに神の声を伝える預言者だなんて言われて。脳内の考え事する部分の容量不足。はい、きゃばおーばー。脳みそぐるぐる。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。」

ネイ、疲れているようだから、もう寝ろ。」

その心遣いに、涙が出そうになった。

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークさんに視線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。

おー、強引だな。

なんて他人事みたいに思っていると、また手を貸してくれ、ベッドに戻してくれた。

「…眠れそうか？」

あー、心配してくれる姿も様になってますねえ。漸く見慣れてきた私は、少しだけ笑顔を浮かべて。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

そう言った。

「ネイが混乱しているのは分かったのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

慈愛に満ちた様なその微笑みにどこかを掴まれた気がしたのは無理もない。

イケメン祭はこれにて終了としていただきたいですね。これ以上何かがあると、心臓が持ちそうもないもん。

そんなことをぼーっとして考えていると、クーンさんは手を伸ばして頭を撫でてきた。

くっ……っ！格好良いじゃないですか。微笑みながら、頭撫で撫で、って反則でしょ。

顔に一気に熱が集まってきた。だから、顔を隠すために俯く。

本当は布団に潜り込みたかったけど、クーンさんの手がまだ私の頭を撫でていたから堪えた。

「くっ、絡まっているな。少し待ってる。」

何の事かと思って、赤くなった顔を隠しつつ、その行動を横目で追う。近くの化粧台まで言っって櫛を持ってきたクーンさんは、ベッドの上に座り、私の髪を丁寧梳き始めた。

もちろん私はされるがままになり、身体を強張らせる。

「…綺麗な髪だな。」

髪を梳き終わったらしく、もう一度頭を撫でると、お休みと言って出て行った。

『 ……っ！』

声にならない叫びをあげると、今度こそベッドに潜り込み、布団に包まる。心臓は壊れそうなほど強く、早く脈打っていた。

## 妖精

「おはようございますー！」

目を覚ましたら、ベッドの傍らに女の子が立っていた。

『おはよ、ございます…?』

その元気のいいこと。にっこりとした満面の笑みに圧倒された。

「もう日も上がっています。そろそろ起きても良い頃合いですよ。」

指差された窓の向こうには青空が広がっている。差し込む光から、太陽が大分高い位置にあることが分かった。

それにしても、まずは…

『あの…どちら様でしょうか?』

生憎昨日の状況は目が覚めるまで、夢だっと思ってた。結局この部屋にいることが分かったから、ちょっと落胆。で、起きた途端に知らない人。

混乱、混乱。ってなわけで。早速質問しました。

「失礼いたしました。」

きゅっと唇を結び、真剣な表情になる。そんなに畏まらないでほしいんだけどネ。こっちも緊張しちゃうから。

「今日付けでネイ様のお抱えとなりました、お世話役を務めさせていただきます、女官のミリアと申します。」

丁寧に挨拶をされ、思わずつられて頭を下げる。そんな私の行動にびっくりしたのか、ミリアは焦っていた。

必死な言葉に驚きながら、私は頭をあげる。そこにあるミリアの顔は随分と困っていた。

でも仕方ない。

こんなに丁寧に挨拶されたことないもん。そりゃ、同じように返すつてのが、道理でしょう。

それに、聞きました？私がメイドさんを抱えるとか言ってましたよ！？…って誰に話しかけてんだか。なんてノリツツコミみたいなことしてみたり。

「さあ、ネイ様。お着替えいたしましょう。」

『ネイって呼んでください。私、様付けで呼ばれるような人間じゃないですから。』

さっきから齒痒かった。私、偉い人でも何でもないし。

でも、ミリアは了承してくれなかった。

「分は弁えなければなりません。」

どうかお許してください、と言ったミアリアは、今度は頭を下げる立場になつていた。

そんなにこだわることなのかなあ。きっと、この世界には階級制度があるんだろーな。

私はそんなものがある日常にいなかったから、それがどんなものかなんて分からない。でも、ミアリアのこの行動にそれが垣間見えた気がした。

『…わかりました。』

こつこつ言うしかなかった。

だって、この所為でミアリアが何か言われたら嫌だもん。これからもつと打ち解けられたらいいなあ。

「さ、着替えましょう。」

そこからが地獄だった。

どれにしますか、と言われて開けられたクローゼットの中にはまさかのドレス。

こんなの着たことないし！てゆうか、是非パーカとジーパンで！なんてのはムリみたいで。

ミアリアの恰好を見ても、足が見えていないくらい長いスカートをはいている。この世界の恰好は厄介そうだ。

「きつとその白い肌には何でも似合いますよ。」

えっ？なんか嬉しそう？とか思った私が馬鹿だった。

ミリアの性格はちょっと厄介。（すみません、でも事実。）純粹に楽しんでいるから、止めてとは言えなかった。

でも、着せ替え人形みたいになってる間に、いろんなことを話せたからまだマシかな。

ミリアは20歳らしい。大人っぽいのに、行動に幼さが見えるのはそういうことか。それにしたって胸あるし、色気が半端ない。

世の中って不公平だ。平たいわけではないのに、ミリアよりも少々淋しい自分の胸元が空しい。…目を逸らす事にしよう。

結局、争った結果、私の主張に負けたらしく、スカートが膝下くらいのもを選んだ。

本来は女性が足を出すことはないらしい。でも、あんなの着てたら動けないじゃん。私が大人しくしてられる訳がない。

…自慢げに言うことじゃないけど。

白いワンピースを着せられ、今度は化粧をさせられた。ふわふわなスカートはバレエみたいだなあと思ったけど、口に出したら不思議な顔をされてすぐに口を噤む。

どうやらこの世界にバレエはないらしい。だから、踊りみたいなもの、と言ってごまかした。



「最後に髪を結いましょう。」

この国では長い髪を結わないのは礼儀に反するらしい。じゃあ、髪が短い人はどうするんだろう、って思うけど、髪が短い人は基本的にはないんだって。変なの。

髪を梳かれながらポーっとしていると、後ろから唸り声が聞こえてきた。

『…どうしたの?』

「いや、この綺麗な髪を結ってしまうのは勿体ないと思ひまして。編み込むと跡が付いてしまいそうで。」

気にすることでもないのに…そういうえば。

『昨日、クーンさんも言ってた。』

鏡に映っているミアは目を丸くしていた。

なんか変な事言った?

『どうしたの、ミア?』

不安になって声をかける。ミアは驚いた顔をしたまま口を開いた。

「…クーン魔道師さまはネイ様の髪に触れたのですか?」

『うん、どつして?』

ミリアはやっぱり驚いた顔をしていた。

クーンさんはなんかユウメイジン、みたい?それに、年ごろの女性に男性が触れることは、めったにないと言う。それって、現代日本じゃ考えられない事だよな。

「クーン魔道師さまは女性に触れることは滅多にありません。舞踏会では断れない時のみ、夜会に至っては義務でない限り出席いたしません。」

生理的現象の解消の時のみ、女性に触れると有名ですね。女性たちはクーン魔道師さまが誰と結婚するのか気にしています。

人気がありますから、女性たちは競って気に入られようとしているのが現状です。」

ほ……あの容姿じゃ当たり前だよな。

それにしてもミリア。

『一気に喋ったね。』

当たり前です、と言って、得意げに続けた。褒めた訳じゃなかったんだけどねえ。

「女中内でも有名なお話ですもの。女の人たちはみんな噂話が大好きですから、嫌でも耳に入ってきます。」

そうなんだあ。まあ、女の人の性ってとこだよね。

それにしても気になることが一つ。

『生理的現象の解消”ってナニ?』

理解できなかったことを尋ねると、ミリアは渋い顔をしていた。

なんだあ、その顔は?

そう思っていると、大きなため息を一つ零した。

「: ネイ様はまだ知らなくてよいことです。」

そう言われちゃえばもう何も聞くことはできなくて。髪をどう結うかという問題にまた論点が向けられた。

『ポニーテールにしていいい?』

そう問うと、返事を聞かないままてっぺん付近で縛った。

「うーん。」

ちょっと悩ましげ。ダメ、だったのかな。

「それはそれでネイ様の差見の艶やかさを引き出しておりますけど、髪は全てきつちりまとめてしまうのが当たり前ですし。」

そっか。なんかいろいろあるんだね。服装は妥協してもらったんだもん。ここは従っておくべきだよな。

そう思った私はそのままお団子にしていく。ミリアはピンで固定するのを手伝ってくれた。

「よくお似合いです。」

…褒められると、どんな反応していいか分かんない。

社交辞令だつてのは分かっているんだけど、照れくさかった。

「失礼します。」

ノックの音と共にドアが開いた。

居候の立場で何だが、ドアは返事の後に開けて欲しい。

もし着替えの最中だったらドーすんの。私、仮にも一応女の子だよ？とは言えない。

「おはようございます、ネイさん。よく眠れましたか？」

朝から眩しいほどの笑顔。随分とご機嫌な感じがした。

『おはようございます、レークさん。』

私を見てから頷き、支度は終わったようですね、と言った。

「朝食を運ばせましょう。クーン殿も早朝会議が終わったらこつちへ来るそうです。その後の予定は、私が管理させていただきますね。」

「

なるへそ。そう言えば、昨日私に聞きたいことがいっぱいあるって言ってた気がする。自分の研究がどう、とか。

その時間がやってくるってことで、レークさんは目に見えて生き生きしてるみたいだ。どうやら私は貴重な研究材料らしい。

妖精 その2 (前書き)

明日提出の課題が終わっていない・・・  
しかしこっちはサクサク進む。笑

では、続きをどうぞ。

## 妖精 その2

「悪い、遅くなった。」

嫌な思考を遮るかのように、今度はノックもなくドアが開いた。

お前もか！と言つつツッコミはもちろん言えるわけもなく。私はおはようございます、と朝の挨拶をするだけだった。

そんな姿を見かねたのか、ここまで口を閉ざしていたミアアが口を挟む。

「お二方とも、女性の部屋を訪れるのはいけないことはありませんが、ノックと返事を聞いてから扉を開けることを忘れないで下さいまし。」

もし着替えの最中だったらどうするおつもりですか。」

そう言つと、朝食の準備をします、と残して出て行ってしまった。

ちょっと、ミアア！言い逃げはないよ！この空気をどうしてくれようか…

紛れもなく気まずい雰囲気は部屋一杯に充満していた。

「…すまなかった。」

しゅんとして謝罪を述べてきたのはクーンさん。

どどどっ、どうしよう?!…可愛いんですけど。

美形は何しても許せる気がするのは私だけだろうか。いや、確か例外（アホ神）もいたっけ。ま、どーでもいいことは置いとこう。

『あの、大丈夫ですから。でも…着替えてるところは見られたくないの、今度からはお願いします。』

てゆうか、見たくもないもん見せられる方が可哀相だしね。見て減るものじゃないって言うけど、見られて減るものならとっくに悲惨なお腹を晒してる。

でも、そんなの見た人の方が不愉快でしょ?ってなわけでお願いに至った。

その後、クーンさんも謝ってくれ、三人で朝食をとる。私が違うところから来た事を知らない人に話を聞かせることはできないため、クーンさんは人払いをしていた。

もちろんミリアも。ちよつと淋しく思ったけど、味気ない食事に日本製の調味料を加えるのにはちよつと良かった。

最早口を開いたのはクーンさん。

「ネイの立場はクーンの再従兄妹くはとこ・またいとこ」と言うことになった。遠い土地からやって来たので、この国のことはよく知らないという設定だ。」



あいあいさ。立場をごまかす為の嘘ってことですね。了解いたしました、と肯定するために首を縦に振った。

カチャカチャと音を立てながらナイフとフォークを扱う。確かフランス料理のマナーだといけないことだった気がするけど、生憎こっちは毎日箸を使って食べるという文化に染まってる。

今さらだけど、日常でたとえナイフとフォークを使っていたとしても、ファミレスで、とかで、マナーを習ったことはさっぱりない。

ごめんなさい、と内心思っておきながら、口にすることは言い訳じみてて気が引けた。

「この後のことはレークに頼んである。ネイは心おきなくこいつに迷惑をかけるといい。」

昼と夕刻には顔を出す。それまで、この世界について知りたいことを聞き、自分の状況を把握して、俺たちに話してくれ。」

いいか、と聞かれ、大きく頷いた。昨日の私のあり得ない戯言を信じてくれているだけで嬉しい。なのに、それに加えて私を支えようとしてくれる。

もう、感謝、の一言しか出てこない。

だから。

『…有難う御座います。』

深々と頭を下げた。座っている状態だったから、テーブルに頭が

付くぎりぎりまでだけ。

すぐに頭をあげる、と言う声がかかり顔をあげると、気難しそうな顔をしているクーンさんと、にっこり微笑んでいるレークさんがいた。

「ネイさんは私の再従兄妹なんですから、親類に感謝の言葉など不要です。さあ、朝食を続けましょう。」

優雅に食事を続ける姿を不躰ながらにじっと見つめてしまい、クーンさんが私のことを見ているなんて気が付かなかった。

食事が済み、昨日と同じくお茶を飲みながらのんびりとしているとノックの音が部屋に響く。それは返事を待たないまま開いた。

…この人たちは礼儀を知らないのか？

なんて思っていると、クーンさんに向かって似たような紺色の制服らしきものを着ている男の人が近づいてくる。片膝を立てて傍らに膝間づくと、用件を述べようと口を開いた。

「宰相殿がお呼びです。」

「用件は？」

「大臣たちが疑問の声を上げているようです。昨日のドラゴンの使役についてと、城を抜け出した件について。」

早急に、とのことで、失礼ながらも朝食の時間に参りました。」

「そうか。」

二人のやり取りを顔を見ながら交互に見てしまった。映画のワンシーンみたいでちょっと格好良い。

ボーッとカップを持ちながら見ていると、足元に何かトンツと当たった。

『……………？』

ああ、そうか。あんまり見ていちゃいけないってことね。

私の座っている椅子を軽く小突いたのは、紛れもなく今も優雅にお茶を飲んでいるレークさんだった。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

“はっ”と返事をする、男の人は私を一瞥してから大股で出て行った。

誰だお前って目は痛かったけど、私の方こそ誰だお前って感じ。招かれざる客かもしれない。私だって不本意に訳も分からず、右も左も何も分からない状態でここにいる。

それでも、客人の部屋だと言うことを忘れて欲しくなかった。

…なんて、お世話になっという私、勝手だなあ。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。」

ため息と共にカップを置く音。その眉間には皺が寄っていた。難しそうな顔はそれでも画になっている。

けど、そのうち心労で倒れたりしそう。さっきの人の態度とかだと、偉い人みたいだから、板挟みとかにならなきゃいいけど。

立ちあがったクーンさんを見上げると、一瞬だけ表情を緩め、おでこを軽く撫でた。

「その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

そう言うだけ言つとさつさと行ってしまった。途端に顔が熱くなる。

何その顔、何その台詞！それこそ言い逃げだつて。

『……っ！』

声にもならず悶える。カップのお茶はもう温くなっていた。

「クーン殿があればどこまで気を許しているのは珍しいですねえ…ところで、その反応は何なのですか。」

別段気にすることなどないでしょう、と尋ねてくるレークさんの反応こそどうした、って思う！

イケメンは目に入れ過ぎると痛いことがよく分かった。学習して次からは直視し過ぎないようにしないと！私の心臓が持ちません！

スー、ハー、と深く深呼吸。心を落ちるかせるためにはこれが一番効く。

ようやくそれを止めて目を開くと、レークさんはずっとこっちを見ていたみたいで、不思議そうな顔をしていた。

『すみません。落ち着きました。』

謝罪の言葉を述べると、もう一杯飲むために女中さんに頼んで淹れてもらうと、二人きりになった部屋で面白そうな顔をしながら質問してきた。

「随分と混乱していたようですが、どうかなさったんですか？」

「どうもこうもないよ。ってのは説明にならないよね。てゆうか、そこ聞くんですか。」

『いやー、男の人に触れられたことなんてなかったものですから、少々混乱してしまいました。』

「ご家族に男性はいらっしゃるでしょう？」

はい、いますとも。

お父さんがいますけど、そんなに関わりないし。

『年齢が近い男性、しかもイケメンなんて、私の周りには未だかつて存在したことなんてありません。』

だからどうも緊張してしまっただけ。』

そう言うと、また首を傾げている。どうやらこの人たちは価値観が違ってみたいだ。

「いけめん、とは何ですか？」

…あ、そこですか。イケてるメンズ、なんだけど、めっちゃくちゃな日本語は伝わらないってことが。

ってゆうか、今さらだけど何で言葉が伝わってるの？

『クーンさんもレークさんも格好良い、と言えば伝わるでしょう。うーん、顔が随分と整ってらっしゃるから、じーっと見られると平凡過ぎる私にしたら心臓に悪いんです。』

きつと二人はおモテになるでしょうから、そんなことを思っ勝手に緊張している私がいけないんです。慣れてきたらきつと大丈夫ですから、気にしないでください。』

そう一気に言い終わると、一息ついて、お茶を口に含むとする。けど、猫舌な私はふーふーと息を吹きかけて冷ます破目になっていた。

「おモテになる」？

あー、伝わらないんだ。今度からきちんとした言葉に直さなくちゃ。

まだ不思議そうにしているレークさんに“女性に人気で、たくさん言い寄られていそう”な事の意だと伝えると、納得したように頷いていた。

やっぱりモテるんですか。

ところで。

『私、日本語を話しているつもりなんですが、どうして言葉が伝わってるんでしょうか。』

大き過ぎる疑問。さっき、レークさんの口元を見ていたら、明らかに日本語じゃない動き方をしていた。

と、言うことは。

レークさんたちが喋っているのは日本語じゃない。じゃあ、どんな言語を喋っているの？それがどうして私に伝わっているの？疑問は膨らむばかり。

きつとそれはレークさんも一緒。

妖精 その2 (後書き)

今夜は徹夜だ！



閑話（前書き）

クーンサイドのお話です。

## 閑話

レークに言われたことは俄かに信じ難かった。鏡盆に一人の女の子が映し出されたと言っただ。

これは単なる神話ではなかったのか？

そう疑問に思いつつも、鏡盆を除くことができない俺は、指示に従って動くことしかできない。

誰も通らないはずのシユラスバンド砂漠に黒髪でおかしな格好をした女の子がいるはずだと言われ、俺はすぐさまに国所有のドラゴンを一匹拝借した。

その所為で今審議に巻き込まれてしまっているのだが。

「宮廷魔法師及び、騎士の一等指揮官でもある貴方であろうと、いかなる理由があってもドラゴンを自由にできるはずはないと思われるのですが？」

これは吾輩の判断が間違っているのだろうか。」

…ちっ、狸ジジイめ。

先程からつらつらと告げているものを聞きながし、自分の思考に耽った。

赴いて行った砂漠には本当に不可思議な格好をした女の子が倒れていた。と、言うことは、神話が実現してしまったのだ。

あり得ない。

そう思いながら、倒れている女の子に近寄って声をかけた。

「大丈夫か？」

女であるにもかかわらずズボンを穿いている。まずここがあり得ない。それに加えて素材が分からない袋、明らかに造りがおかしい鞆。

…まさか、本物か？いや、それは少女に聞いてみてからの判断だろう。まずは取り急ぎ運ばなければ。

「大丈夫か？」

もう一度問うと。

『待ちやがれ、アホ神…』

空耳だと信じたい。

耳を疑うような神を冒瀆する言葉と、口調。もしかして下級市民か。いや、それにしても格好がおかし過ぎる。

『…んっ、暑………』

本人に聞くしかないのか。そう思いドラゴンに乗せると、急いで都へ戻った。

そこからが大変だったのは無理もない。

ドラゴンを返しに行くと、飼育係に泣きつかれた。俺が責任を持つ、と言い残して、少女に目がいかないように、なるべく勤め、使われていない客室に連れていく。

レークの幼馴染みが女官を務めているのは助かった。世話を頼むと、何食わぬ顔をして常務に戻る。その時はまだドラゴンのことはバレていなかった。

ルイス派が何か嗅ぎつけたのかもしれないな。あいつは少々厄介だ。

仕事を終え、真っ直ぐに客室へ向かう。いつにもまして終業が遅くなったため、もう目を覚ましているだろうと寝室へ向かうと、その少女は目を閉じたままだった。

…夢げだな。

見てまずそう思った。

抱きあげた時には羽が生えているかのごとく軽く、感触からして

華奢だと分かった。身長もそう高くはない。

きつとまだ成長途中なのだろう。

そう思っ不躰にも見つめると、眉間にしわが寄る。

肌は白く透き通っていて、唇は果実を思わすように色合いも良い。黒髪は艶やかさが際立っていた。

…触ってみたい。

そんな衝動に駆られてから、いくら少女だからと言ってそんなことをしていいはずがないと自分を叱責した。

それからどれだけ時間が立ったのだろうか。じつと見つめていた少女は顔をしかめる。それから小さく声を漏らした。

『んっ…』

その直後に長いまつげに縁取られた目は、少し眠たそうに開いた。

「おい、大丈夫か？」

もう一度声をかける。しかし、よく眠っていたようだし、まだしっかりと頭は働いていないらしい。

しばらくして大きな目をさらに大きく開くと。

『じじ、ぶじじっ？』

そう呟いた。その声は掠れていたが、どこか引き込まれてしまうような甘い声。少女にぴったりだと思った。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

身体を起こし、それから俺をその瞳に移した。ようやくこの場に俺がいることを知ったらしい。だが、俺が言ったことに微塵も反応しない。

もしかして、記憶喪失、とか？砂漠に倒れていたくらいだし、何かあったことは明白だが、まさか、盗賊に襲われて捨てられた、とでも言うのだろうか。

『てゆうか、あなた、誰？』

少し舌っ足らずな言葉使い。しかし不思議と不快には思わなかった。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

せつかくの述べたのに、反応を示さない。俺の顔をじっと見つめているようだ。

…何か付いているのか？

しかし、その魅力的な瞳に見つめられていると、どうも居心地の悪さを感じ、口を開いた。

「おい、大丈夫か？」

まさか、どこか具合の悪いところか？

ぐっと身体を前のめりにして様子を伺おうとすると、顔を赤く染める。

まさか、熱が出たしたのか？と、思ったが。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

思い切り噛んだようだ。見ず知らずの男がいるわけだし、いつの間にか知らない場所にいた。混乱している上に、きつと緊張してるんだろう。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったように会話を続けた。こう言うことは気にするべきではない。それに、何事もなかったような顔など、し慣れている。

その様子にホッとしたらしく、今度は間髪開けずに質問に答えてくれた。

『ネイ。サカキバラ・ネイ。』

「サカキバラ・ネイ？どつちが名前なんだ？」

とつさに疑問をこぼしていた。

名前の形式として、どこか不思議な音を持っているそれは、発音

し難い。そして、“サカキバラ”も“ネイ”もどちらも名字にはありそうなものだが、名前としては違和感を持つ。

少女は不思議そうな顔をしながら、考え抜いた挙げ句に答えた。

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっこのことでそう言う姿は、真っ直ぐに俺を捉えて離さない。その瞳は澱みなく輝いているように見えた。

思わず笑みがこぼれてしまった。そして、いつになく珍しいことをしてしまったと思い、いつもの表情に戻す。それから質問の続きへと戻った。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

考えている様子から、全く理解できていないことが伺える。こう言う時は急かしても無駄だろう。

『…今から言うこと、信じてくれますか？』

頭がおかしいヤツだと思われることを、きつと今から言います。

『ただ、真実だから。』

考え抜いたのであるうその言葉に、疑問を持った。

“信じてもらえない”ことを話す？それはきつと勇気があるのだろう。瞳には涙が集まっていた。

零れさせまいと我慢している姿は抱きしめてやりたい衝動にから



れた。それを何とか引っ込めると。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

そう言った。なるべく、感情を見せないように。

もつしばらく耐えるような表情を見せて、それから語り出した。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

別段気にすることもない、普通の話だ。それも真実に則っている。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”

次に述べたことは、理解できないものだった。ニホン、とはどこかにある土地のことだろうか。今まで耳にしたこともない。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。』

東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。あそこでジュ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

分からない単語だらけだ。それにしても。

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

そう本気で心配してしまった。もしくは空想癖のある子なのか？  
そうであるならば、管轄外だ。俺の手には負えないのかもしれない。

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

二ホンに、神様、ねえ。」

信じがたいことだらけ。それを証明することはできないが、この少女の戸惑いようから言って、嘘をついてるようには思えなかった。

『あ、買い物袋がない…!』

小さな呟きに、頭では別のことを考えながらも答える。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

すると、すぐさま手を伸ばそうとした。が、まだ力が入らないのか、ベッドから落ちそうになる。

『きゃっ…!』

小さな悲鳴があがる。しかし展開が読めていた俺は、迷うことなく手を伸ばした。

「危ない。」

でも。…こんな展開は予想していなかった。

腕に力を入れて抱きしめたネイは、ふわりとせっけんの香りがする。それに、抱き心地が…非常によかった。

『う、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

焦ったように言葉を紡ぐその姿は愛らしく、もうしばらく腕に納めたいと思ってしまうほどだった。

あり得ない、この俺が。

思考を切り替えようと、話を別へと進める。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろっ?」

この娘が着ている物は、うちの女中に洗わせることにした。それにしても、二人で首を傾げてしまうほどの変わった衣服は、着ていては異国の者だと気付かれてしまう。

それでも、勝手に洗っておいて返さない訳にはいかないため、乾いたら持ってくるように言っていた。

『あの、これを私に着せたのって…?』

顔はもう真っ赤だ。

俺じゃないかと心配しているのか?

疑われるのは嫌だと言わんばかりにすぐ答える。

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

安心した表情をしてくれるかと思っただが、顔をしかめている。何か気に障ること、言ったか？

その答えはすぐに分かった。

閑話 その2 (前書き)

クーンサイドが続きます。

## 閑話 その2

『私、何歳だと思われてるんですか？』

女性なら本来聞かれないことだろう。しかし聞かれては答えるしかない。

「14くらいだろう？」

思った通りの年齢を述べる。少し強張った顔。やっぱり失礼な事を言ったのかもしれない。

『私、18です。』

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思った。」

返ってきた答えに驚いて、すぐに謝った。それにしても、若く見える。

『ここでは何歳で成人ですか？』

あまりにも真剣な表情。それは普段からも若く見られがちな事を気にしている風に見えた。

「15だ。」

そう言うと少し考えて、年齢を問われる。24と答えると、上から下までじっと見られて、大きなため息を零した。

と、思ったら。

ぐー。

突然の大音響。彼女はさっきの顔よりももっと赤い顔をしていた。

「食事を運ばせよう。」

ずっと寝ていた所為か、水分も口にしていない。もっと早くに気にするべきだったな。食事の準備をさせるように女中に言いつけ、ネイに目を戻す。

「大丈夫か？」

ベッドに身体をもう一度預ける姿があまりに辛そうなので声をかけると、苦笑いで頷いている。何とか席に付けたようだが、身体は重そうだった。

それからレークが来ると、話をしながら食事を始める。その時にいった言葉は初めて聞いた言葉は俺とレークの心に留まった。

どう意味かを問うと、慈愛に満ちたような表情。それに惹きつけられ、思いがけず不躰にもじつと見つめてしまった。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そんなモノの命を奪って人間は生きる糧にしているんです。』

だから、犠牲になって私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの力を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。

なるほど。

当たり前過ぎて気が付かないことにも感謝を述べている姿は、心を大きく揺さぶったような気がした。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようにです。」

面白そうな顔をしているレーク。その間も手を止めないネイの食べっぷりに満足していると、急に手が止まる。

嬉しそうにしているレークは気にしている様子もなく、少し上の空で笑顔を浮かべていた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

腹が鳴るほど空いている様子だった。それを掘り返した所為か、また顔を赤くしている。今日は何回顔を赤くさせたら気が済むのだろうか、と少し微笑ましくなった。

「ネイ？」

何しゃべらないと思ったら、急に立ちあがり、ネイの物らしい荷物の中へ寄って行った。ガサガサと音を立てながら漁っている。

何がしたいのかわからず、見つめることしかできない。



しばらくすると、何かを抱えて戻ってきた。どん、と音を立てながら並べていく。訳の分からない容器に入っているそれらは、変な色をしていた。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

さっきまでは戸惑っていたのに、今は随分と嬉しそうだ。楽しいな笑顔をしながら、俺の質問に答えてくれた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、醤油に味噌です。』

調味料？味を整えるために使うヤツ、か。それにしても、どれも聞いたことない。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

国の味…ネイの国の味、は随分と気になった。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、スープの中に少しだけ垂らした。ちよつと色が濃くなった液体。それを口に運んで、思わず笑みを浮かべている。口に運んで、何かに満足したように頷いていた。

『…食べてみます？』

それがどんな味なのか、気にならないと言えばうそになる。…でも、まだ名前も知らないはずのレークに先に差し出すのは気に入らない。

しかも自分が使っていた食器を使つて、だ。

少々恨めしくなり、横目でにらみ付けるように見届けたあと、自分にも同じように差し出されて満足する。

あまり、このような事に頓着しない性格なのかもしれないな。

差し出されたものを口に入れてみると自然と言葉が零れた。

「おいしい…」

変わった味だが、深みがある。今までに食べていたものが、薄く感じられてしまうほどだ。

『そうですか。それは良かった。』

いつの間にか食べ終わっていたネイは、俺たちが興味深そうに見ていた調味料をかけてくれた。

今まで俺が食べていたものと味が全く違う。格段に美味くなっていた。これ外国の味だと言うのだろうか？

ネイが食べ終わっていた時の挨拶を言うと、女中を呼んでお茶を頼む。その作業を飽きることなくじっと見つめている姿は微笑ましかった。

一服しつつ一通りの話をしてみると、段々表情を暗くしていく。大分、情報を詰め込み過ぎたのか、少し待って欲しそうだ。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。ネイ、疲れているようだから、もう寝る。」

そう言うと、嬉しそうに笑顔を浮かべている。それに満足した。

…満足？なぜ俺は満足しているんだ？

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークに目線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。

強引だと分かりつつも、ついつい行動してしまったことに反省するべきだが、俺としてはレークに謝るつもりはない。

…正直、この時間は俺に欲しい。

「…眠れそうか？」

さっきまで長時間寝ていたはずだ。もし眠れないようなら、話相手にでもなるう。そう覚悟していたのだが。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

ネイはそう言った。

…何故がっかりしてるのだろうか。

しかし、それをおくびにも出さずに礼を述べた。褒めて欲しいところだ。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

…どうして手が出てしまったのだろう。無意識にネイの頭を撫でていた。思っていたよりも細かい髪はサラサラして、指通りがいい。

ん？一か所、髪が絡まっているような感触がした。

「ここ、絡まっているな。少し待ってる。」

近くの化粧台まで言って櫛を持ってきて、ベッドの上に座り、髪を丁寧に梳く。

「…綺麗な髪だな。」

ずっと触れていたたい衝動にかられたが、鏡であっただけの娘にここまで固執しようとしている自分に驚いた。

…きつと、妹みたいだから、だな。うんうん、と頷いて、自己完結する。

もう一度頭を撫でると、おやすみ、と挨拶をして部屋を出た。

「クーン殿っ！聞いておられますかな。」

「…ええ。」

…物思いにふけてしまった。

気が付いたら血圧が上がったような真っ赤な顔が目の前にあった。赤い顔と言っても、ネイとは全然違う。

向こうを可愛らしいと言うならば、こっちは不愉快になる顔としか言いようがない。

そう言えば、今朝の恰好はよく似合っていた。

シュエランがやって来た時に驚いた様子だったネイには謝るべきだな。あいつも返事の前に扉を開けていたからな。

ネイが俺とシュエランの会話をオロオロ見ていたのは知っていた。交互に見上げているのは小動物を連想させ、大きな黒い瞳に魅了されたのは言うまでもない。

「わかった。すぐに行く」と伝えてくれ。」

先にわざと行かせる。途中退場になってしまったため、言いたいことを真っ直ぐに伝える。その時に、

結われている髪を避け、額の辺りを撫でた。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。…その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を见にくる。」

我ながら、柄にもない、気障つたらしい事を言ってしまったとは思う。だが、後悔などしていない。

…そもそも、時間が空く可能性があるのだろうか？とりあえず、ジジイにもっと血圧でも上げてもらって、普段の仕事に戻ろう。

「昨日、ドラゴンを使ってレークの再従兄妹を迎えに参りました。その際、賊に絡まれていたらしく、保護を頼まれましたので、若輩者ながら承らせていただきました。」

「どうやって賊に襲われているのを知ったのだ？！まさか。まさか、あの方が本当に現れたのか？！」

あほか。そう言いたいのを何とか抑える。

「大体は約束の時間に来ないことで何かがあつたに違いないと分かっておりました。嫌な予感がするとのことで駆けつけて行きましたところ、襲われそうになっておりました。」

その再従兄妹君には見込みがあるらしく、今回は鏡盆を見せるために招いていました。」

淡々と語る。ここ数年で無表情になることは慣れていた。何気ないことのように語るフリも。

そして言えることは、こんな奴らにはネイを合わせたくない。

実際はレークの再従兄妹と言うだけでも危ないが、異国、いや異世界からやって来た娘などと言っては、神話に沿って崇められてしまう。

そんなことをしたら、ネイは飾られたものとして神殿に軟禁状態になってしまるのが目に見えている。

そんなこと、絶対にさせてはやらん。

「そんなことっ、われわれに黙って行ってよいと思っているのか？  
」

あー、うるさい。こんな時間があつたら、政の一つに時間を費やした方がいいことを知らないのだろうか。

いや、こいつらにそのような事を考えるような能力はなかった。

呆れたようにため息をつく、丸投げにもとれる発言をする。後には任せた、と言う意味を込めて。

「今回のことは宰相殿にも知らせてあった故。未来の神官候補として受け入れる前に、その素質を確かめるために黙っております。まだうら若き乙女なのです。」

今後の幸せを考えると、中途半端な力の所為で人生を棒に振ることもないでしょう。その見極めのために、黙っていたことは謝罪いたす。

しかしながら、そのように判断の鈍る若さを持った乙女に揺さぶりをかけようとする輩もいましようから、黙っております。」

ここまで言われては誰も何も言えないだろう。少し厄介な事と言えば、何も知らないはずの宰相殿が巻き込まれていることだ。

そして、笑顔を浮かべていることから大層ご立腹だと分かる。

…とりあえず、避けるとしよう。しかし三日と持つまい。そんなつたら腹をくくろう。

そう決意してその場を離れた。



閑話 その2 (後書き)

クーンさん、意外と感覚だけで動いてますよね。  
次回はまたネイチちゃん視点です。

## 楽しみの時間

もうそろそろやってくる時間。

そう思った次の瞬間、ノックの音が響き渡る。

ほら、キタ。

少し身体を強張らせ、一呼吸置いてから“はい”と返事をする、扉が開かれた。

「もう風呂は済ませたか？」

それにもはい、と答える。すると、さも当たり前かのように私がいるソファへやってきて、タオルを私の髪へあてた。

これはもう三日も前から始まっている。何で習慣づいてしまったのかはよく分からなかった。

ただ、髪を乾かしてもらうのは気持ちいいから、私は嬉しそうに私の髪を拭くクーンさんに身を任せることが身についてる。

止めた方がいいと思いつつも、どこか緊張感のあるこの時間が、実は何よりも好きだ。

昼間は最近ミリアと一緒にいて、この国について学んでいる。初日こそレーンさんは一日中地球について質問してきたが、あまりに多くの時間は費やせないらしい。

それでも、食事の時は必ずやってきて、子供がおとぎ話をせびるように、いろいろと質問していった。

それに比べてクーンさんとはめったに会えない。たまに食事を一緒に摂るけど、昼間にあったことはなかった。

レークさん曰く、忙しいらしい。

じゃ、神官は忙しくないのか、と聞いたら、今は祀り事がないから忙しくないって言った。

その代わり、行事の時には寝る間もないほど忙しいんだって。

で、昼間は忙しいクーンさんがやってくるのは就寝間際になっていた。時間と言っても、正確には分からないんだけど。

この国には、いや、この世界には太陽が6コ、月が6コある。おそらく一日は24時間で、太陽も月も、一つで二時間を表していた。

朝の6時ほどに太陽が一つ出る。これは朝の6、7時を表す。二時間たつと、光る太陽が一つ増えることになっているのだ。夜はこれが月に変わるだけ。

便利にできているようで、しっかりと把握できるわけではない。しかも法則を知らないでいると、私みたいに卒倒する羽目になるだろう。

そりゃそーさ。あるはずもない太陽が6つもあつたんだから。

で、月が三つ上がるころにクーンさんはいつもやってくる。そしてお喋りをしながら、タオルで私の髪を拭ってくれるのだ。

「よし、こんなものだろう。」

乾いた髪に櫛を通すと、満足そうに頷いている。私はいつものことながらお礼を言った。

すると、頭を撫でてくる。

ぐちゃぐちゃになった髪をまた梳くのもクーンさんだった。

…だったら最初から撫でるのやめればいいのにね。二度手間だつて。

そう思っても、どこかで止めて欲しくないって思ってる。結局のところ、クーンさんに甘えきっている自分がいた。

手を取られ、寝室まで連れて行かれる。ベッドに横たわると、布団をかけてくれた。まるで小さい子供に戻ったみたい。

『クーンさん、私、子供じゃないんだから自分で髪を乾かすのも、布団をかけることもできますよ?』

朝も早くから会議だと言っていた。それに帰るのはいつも深夜近く。ちゃんと眠れているのか心配だった。

「…そんなこと言っな。」

え?

絞り出された声はどこか悲痛そう。弾かれたように起き上がると、ランプの薄明かりの中、しっかりとクーンさんの顔を見ようと努めた。

「俺はレークやミアア程ネイに会える訳じゃないから、夜のこの時間を楽しみにしてるんだ。一日の楽しみを奪わないでくれ。」

それは思いがけず、懇願だった。でも、顔色を伺えば、疲れているのは一目瞭然。目の下にはクマがある。

ってことは、現在進行形で疲れてるってことだよな、うん。

一人で頷いていると、名前を呼ばれ、意識の焦点を横の人に合わせる。

『本当に楽しみなんですか？』

それを切り口に、思っていることが溢れ出した。それはもう、堰を切らせたかのように。

『クーンさんはいつも仕事を終わらせてからすぐに来てくれているみたいですけど、それでこの時間と言うことですよ？ってことは、これからお屋敷に戻るともっと遅くなるはずですよ。』

それなのに、朝は私が起きるよりも早く、城に来ています。そんなに働いてどうするんですか？

他に無能でも政をこなすための人数はあるんじゃないですか？

てゆーか、早朝から深夜まで働くなんて、労働基準法を丸無視してますよね。』

例えば、朝8時くらいのスタートとすると、夜の10時位まで働いてることになる。ってことは、14時間勤務?!

ありえない!働き過ぎ!!

どんな世界でも統治するための政治が必要だって分かってる。議員とか、ここの場合だと貴族って類のものが多いってことも。

レークさん、言ってた。この世界には貴族階級の人がいるんだって。その階級を持つ家の主が、国の中心である国会に参加して会議をしてるんだって。

そんな中でも、理由は教えてくれなかったけど、クーンさんは大変な立場にいるみたいで、休む暇もないらしい。

気にかけてあげて、って言ってたレークさんの言葉に、私はつい頷いてた。

…思い返してみると、夜にやってくる時も朝にやってくる時も、いつも疲れた顔、してた。もっと早く聞くべきだったのに。

「気にしてくれて有り難いが、いくらネイに言われても俺はこの時間を止めるつもりはない。」

…なに、その断言。そして、無意識ですか?その極上の表情は<sup>カオ</sup>。

最高に格好良く見えるその表情は、私の心臓を鷲掴みにした。き

つと顔も赤いに違いない。

ホント、格好良い人は何しても許されるどころか、むしろ公害に近いくらいに自分に負担が来る。

要するに、目の保養は行き過ぎると毒になるってこと。俯くしかできない私の意思なんて、端から叶うはずもなかった。

それでも譲れないことが一つ。残念ながら、私はその方法なんて微塵も分かりはしないから、直接本人に尋ねるしかない。

『私がクーンさんにしてあげられることはありませんか？』

何でもいいから、何かできることをしてあげたい。だって、クーンさんは私の命の恩人だもん。あんな砂漠で倒れてる人間を助ける人なんて、いないはずだったのに。

それなのにクーンさんは国軍のドラゴン？を動かしてくれた。

レークさんにこの国のことはたくさん聞いている。魔法が在って、不思議な生き物がたくさん居て、妖精さえもいる世界。

この世界の最高峰であるこの国のために一番働いてるのはクーンさんなんだって。

クーンさんは私が知っていることを知らないけど、私を助けた時に使ったドラゴンのことで、たくさんの人たちに責められてるみたい。なのに、私は悠々とここで生活して、尚且つクーンさんの負担になってる。

…それが、どうしても許せないの。

「ネイ、有難う。しかし、そこまで気を使うことはない。」

『でもっ…!』

違うんだ、と言ってクーンさんは首を横に振る。それは初めての私の言葉を遮った。

「ネイは俺たちの世界の人間とはものの考え方が違う。価値観が違うんだ。」

それは俺に癒しを与えてくれる。今まで当たり前であったことを違うと言うネイは、面白い。俺に直接向かって働き過ぎだと言うヤツに初めて出逢った。」

クシャツとした笑顔は、今までで一番私の心を震わせた。

…ホンモノ、だって思ったの。

数少ないクーンさんの表情。大部分は無表情。その中で、今の笑顔は、間違いなく本物だった。

『私にできることを教えてください。』

譲れない。何かしてあげたい。義務感とかじゃなくて、自分の意志でそう思った。

今の笑顔が毎日、無条件で出るようにしてあげたい。それは、私にできることじゃないかもしれない。



でも、できることかもしれない。

可能性が1%でもあるんなら、私はそれに賭けて、命の恩人にしてあげられる事をしたい。

「では、この時間を、出来る限りずっと俺だけの物にしてくれ。望むのはそれだけだ。」

『そんなの、望むことじゃないでしょ！』

あつ、タメ口きいちゃった。

「ごめんなさい、って呟くと、勢いが殺がれて黙る。すると、大きくて重みのある手が私の頭を撫でていた。

「今、ここから一步も出してあげられないんだ。それを俺は謝らなければいけない。」

それに、今は何とか先延ばしにしているが、これからこの国のことにおそらく巻き込んでしまう。今のままのネイでいて欲しいのに、これから起こることはきつとネイの負担になる。」

そう言ったクーンさんは少ししゅんとして見えた。

自分のことを考える暇がないくらい働いてるのに、私のことばかり心配して！お人好しにもほどがあるよ。

私のことなんかより、もっと自分の事に気を使うべきだ。そこは、

どうしても譲れない。絶対に考えてもらおうように、しなくちゃ。

『いつか、絶対クーンさんの願いを聞いて見せますから！考えて置いてくださいね。』

結局、そんな約束を取り付けることしかできなかった。これが約束できただけいいのかもしれない。

この時の帰り際に言っていた、一、二、三日したら会いにくる人がいるかもしれないと言うことが現実のものとなるなんて、この時の私は想像もしていなかった。

**宰相さま、登場（前書き）**

お気に入り登録を下さった人がいるみたいで、  
とてもうれしいです。

これからも頑張りますので、ひとつ気長にお付き合いください。

では、続きをどうぞ。

## 宰相さま、登場

「それでは、箱のようなものに映像が映し出されるんですね！

でもそれは…」

勤のいい方はお気づきでしょう。私がレークさんに説明しているのは、テレビです。

いやーね、もっと上手く説明するはずだったんだけど、箱って言うっちゃったわけですよ。

さらには絵心が最悪なもので、言葉を探すしか伝える方法はない。

『目に見えているものとほぼ同じ映像を映し出せるんです。』

その一言に、おお、と驚きの声を上げて、目を丸くしている。ちよっと、面白いかも。

…ああ！ちょうどナナメ掛けの鞆の中にケータイ入ってたと思う…

そう思って鞆の所へ近寄って行くこうとしたら…

「失礼する！」

おっ？！

何事かと思つてドアの方を見る。そこにはオロオロしているミリアと、厳格そうなおじさんが立っていた。

『どちら、様でしょう？』

明らかに怒つてらっしゃいますよね？つてくらいの雰囲気纏っている。初対面なのに、私、このおじさんを怒らせるような事を何かしたんだろうか。

否。…記憶にない。

てゆうか、この部屋から一步も出てないのに、むしろ迷惑をかけるって言う方が難しい気がする。

困つてレークさんを見てみると、苦笑いを浮かべて肩を落としていた。

…その反応、なに？

何が起こるか分からない状況に戸惑う。そして、どうすることもできなくて、とりあえず身構えてみた。

「宰相殿、ようこそ御出でです。もちろん、このことはクーン殿は知つておられますよね？」

何この空気。現代っ子だから、もちろんそこは読んで黙るけど…

一触即発？

でもなさそーだけど、レークさんの笑顔が胡散臭い、いや、どす

黒い…でもなくて、張り付けた様なもののは確かだ。

「ヤツにはめられた。」

お気の毒に。

何にはめられたかはよく分からないけど、眉間のしわの深さに、何だか哀れになった。

さつきまで怒ってるみたいな感じだったのに、そうでもなかったのかな。顔つきは元々そんな感じみたいだし、この人もクーンさんと同じく疲れた顔をしている気がした。

「ミリア、あいつを呼んできてくれ。」

かしこまりました、と言うと、当たり前のようにミリアは行ってしまった。

なになに?!今から何が起こるって言うの?

それよりも、あいつでだれか伝わってしまうのがすごいと思った。

一人、訳も分からず立ちつくす。すると、おじさんの目が私を捕えて離そうとしない。

…怖いんですけど。かなり。

苦笑いするしかできなかった。

「貴女がレークの再従兄妹、かな。」

うつへえ。本気で怖いっす。

けど、ここで委縮する訳にはいかない。クーンさんのマイナスに繋がることだけはしたくない。

『お初にお目にかかります。ネイと申します。』

ゆつくりと丁寧な礼をして見せる。顔を上げた時に部屋にいた四人は驚いているようだった。

ちょうど入ってきたクーンさんとミリアは入口のところで固まっている様子。

どこか変、だった？

一人オロオロとしてしていると、おじさんは急に笑いだした。ひとしきり笑った後、さっきの顔とは違う柔らかなものを浮かべている。それにちよつとだけ安心した。

それにしても、急に笑い出すなんて、ワライタケでも食べたのかな？

「実に肝の据わった娘だ。．．．気に入った。」

ん？気に入られた．．．って何事？

周りを見渡してみても、どうやら状況が理解できていないのは私だけみたいだ。とりあえずお茶にしましろう、というレークさんの言葉で、この空気は一時保留。

ミリアがお茶を入れて部屋から出ていくまで、椅子にくっついたように留まるしかなかった。

「さて、この馬鹿が丸投げした話の真実を教えてくださいませんか。」

おじさんが顎で指したのはクーンさんだった。クーンさんが馬鹿だなんて、そんなこと言ったら私はどうなるんですか?! って、言いたくても言えない。

だって、ここの中で話しを理解できていないのは、私だけみたいだから。

「ネイ、設定を言ってくれるか?」

急に話を振られた私は、中身を溢さないようにカップを置き、三人の顔をしげしげと伺いながら口を開いた。

『私はレークさんの再従兄妹にあたり、一族の中でもレークさんに次ぐほど力があると言われています。』

そのために神官見習いの候補生として王都を訪れようとしたところ、賊に襲われそうになってしまい、そこをクーンさんに助けられました。

現在はその休養をとるために、城の一室を借りています。』

早口でそう言うと、大きく息を吸い、同じように大きく吐いた。

間違えてはいないはず。ここ二、三日ずっと確かめられてたこと



だから。

そんな私の様子を見て、おじさんは大きいため息をついた。どうやら、聞いたかったのは、そういうことではないらしい。

「設定などではなく、事実を教えてくれ。」

なるほど。それなら、確かにさっきのでは答えにはなっていない。

ここで口を開くのは私であるべきなんだろうけど、事情を話し始めたのはクーンさんだった。

「ネイは鏡盆に映し出された。」

それだけ言えば分かるのか、妙な沈黙が息苦しい。おじさんは目を見開いたまま私をその瞳の中にとらえていた。

「この方が…」

何処の方よ？

急な態度の変化。それに、崇めるような暑い視線は、かなり居心地が悪い。私は目を逸らすと、カップを手にとり、息を吹きかけて冷ましにかかった。

「ネイは砂漠に倒れていたんだ。それでここまで運んできた。話を聞いていると、予言通り、とでも言おうか。」

「この娘は価値観がどうも異なっていて面白い。しかし、政に引き込まれていいような子じゃない。純粹な、良い娘なんだ。」

私に注がれているクーンさんの熱い視線には気付かなかった。それ以外の二人は何かしら悟ったみたいだけど。

「しかし、そうもいかんだろう。鏡神祭は一月後に迫っている。

それまで見鏡盆が使えないことが知れ渡ったら、ただじゃ済まされない。」

そうだろう、とレークさんに問いかけるから、私はそちらを向く。目があったレークさんの表情は少し困っているようだった。

事実、らしい。確か、前にもそんな話してた気がするけど。

「その通りですが、私はクーン殿に賛成です。この乙女を政には引き込みたくない。大人の汚い世界に巻き込むなんて言語道断です。

ルイス派の人間にとっては格好の獲物となるでしょう。それに、まだ預言者<最後の乙女>と決まった訳ではありません。」

…私は動物か？獲物になって狩られるなんて、冗談じゃない。

それにしても最後の乙女ってナニ？

意味のわからない単語に戸惑っている私を置いて、話は進んで行った。

「一月後まで何とか隠しましょう。国王陛下には鏡神祭の後に報告すると言つこととして、とりあえず乙女かどうかの判断は明日の日没後にいたしませんか？」

私のことなのに私を省いて話が進んでませんか？

ふとした疑問だが、助けてもらった時点でこの話が始まっているみたいだ。

私は一体何者な訳？ここでは稀有なものとも言ううんだろうか。さっきのこのおじさんの熱い視線の事も気になるし。

もう我慢ならない。分からない事を聞くことにした。

『口を挟んでごめんなさい。だけど、分からないんです。私はこの世界にとってどんな存在なのですか？』

それが分からないことには私の中で話は進まない。理解できないに等しい。

置いてきぼりをくった私は何とか追い付こうと努めた。

「話していなかったな。」

そう言ったクーンさんに目を向けると、少しだけ愁いた目をしている。なにか、大変な事なんだろうか。

「鏡盆には人間が一人だけで映ることはないと言っただろう？」

その問いに大きく頷く。いつか聞いた話だった気がする。

「それに一人きりで映されるのは<最後の乙女>と相場が決まっている。

<最後の乙女>とは神からのお告げを伝えることができる、預言者のことだ。

そして、最後、と呼ばれるのは、未だかつていなかった預言者のことを指し、最初で最後の乙女の意を示している。」

なんすか、その仰々しい話。私には無関係に思えるんですけど。そんな大それた存在のはずないよ。

今まで日本のどこにでもいる女の子の一人だったんだもん。

ワンピースの裾をギュツと握る。その手に柔らかく乗って来たそれは、クーンさんの物だった。

心配そうな瞳。きつと、相当酷い顔してんだろーなあ。なんてしみじみと試してみたり。でも、混乱してるから、そこは許してほしい。

「ネイにとっては巻き込まれたくないものだろうが、この国の神話に記述されていることなんだ。

それに、ネイが一度映ってしまった鏡盆はネイが神殿にいかない限り、使うことはできなくなって、この国の政治に関わってしまう。

「

うーん。映らないのは困るよね。それにしても、神様を信仰して

るのかあ。それはちょっと厄介だよな。

## 宰相さま、登場 その2

『質問、しても良いですか？』

私が知りたいことは山ほどある。

理解できないことだけじゃなくて、私自身が気になることも。その問い掛けに頷いてくれた三人を交互に真っ直ぐ見つめる。

真剣な顔をしてるから、私の顔にも力が入った。

『この国の人たちの多くがその神を信仰してるんですか？信者の敬虔さはどのくらいですか？』

あんまりにも熱狂的だと、嫌でも「最後の乙女」とか言うものの立場に立たされそう。それに、もし私がそうでなくても、勝手に理由を付けて祭り上げられそうだもん。

それだけは、何としてでも確実に避けたい。

「国民のほぼ9割が信仰しておる。中には熱狂的な信者もあるな。」

難しい顔をしたおじさん、いや、宰相様がそう言った。

まじ、勘弁。今さらだけど、何としてでも避けたいよね。私、そんな面倒な事からは、回避を希望します。

『：私の居た世界にはいくつかの宗教がありました。でも、私は無宗教です。』

いや、多神教って言った方が正しいのかもしれませんが。私の国の住人はとても自由で、それぞれの宗教に準じた催し事を行うんです。』

こう説明していると、やっぱり日本の文化って面白い。てゆうか、ここまで来ると自由すぎるよね。

「その口ぶりだと、ネイさんは神を信じておられないようですね。」

そうか。神官様から見れば、信じられない人間なのかも、私。

でも、実際問題自分がどう思うかだし、思想はその人の自由だ。

思ってる事なんだし、それを隠して本当のことを述べないでごまかすなんて、おかしい。

私は頭に、不愉快に思ったらすみません、と付けておいてから話し出した。

『私自身は基本的には神様を信じていません。もしかしたらこの世界を創った神様はいるかもしれませんが、継り付ける神様はいないと思うんです。』

だって継りついて本当に助けしてくれる存在がいれば、治らない病気なんて存在しないと思いますから。』

ここまで言つといてなんだが、みんなの視線が痛い。信仰している人から見れば何とも不愉快な話なんだろうけど、単なる小娘の浅はかな考えつてことで、勘弁してほしいとこッすね。

『私のいた世界では自分の信仰している宗教を他人に押し付けて、過去にも現在にも争いが起きています。』

聖職者がお金を得るために、神に助けてもらえる紙切れが出回った過去があります。

これは人間の我儘で、私腹を肥やす為にやったことで。でも、その行為は神様に結びついてしまふんです。

神様は自分に似せて人間を創つたと言われています。そう考えると、神様がいると信じると、汚い心を持っている人物を想像せざるを得なくなりますから。

それを崇めることはできません。』

ここまで言つて、完全に冷めてしまったお茶を飲み干した。

：我ながら捻た考えだよな。自覚はしてるんだけど、どうも自分の考え方は真つ直ぐになつてくれない。

「神様のことで争いが起きたと言っていましたけど、それは本当に自分の信仰する神を信じているからなのではないですか？」

それって自分の神が一番正しい、って考えなのかな。ある特定の人物からしたらそうかもしれない。



けど、私が言いたいのはそのなことじゃなかった。

『どの神がそこに在るのかを争って戦うことは、敬虔な信者の行いかもしれません。でも、私の中ではその考え方は違うんです。』

その神が真に存在するのであれば、そのことで争い合って、自分の所為で人間が死ぬことなんてないと思います。

もしいても確認もできない存在。ならばどうしてその人のために多くの命が奪われるのを黙って見ていられるのでしょうか？』

真つ直ぐレークさんを見つめて言うと、右隣から盛大なため息。宰相様は見た目よりも、本当はもっと若いのももしれない。私みたいな統制のとれないバカがいるから、心労で髪が白くなったのかも。

…ご苦労様です。

「もしもく最後の乙女>ならば、随分と変わった考えだな。」

あ、ため息ついたのはその所為？自分でも変わってるのは自負してるけど、そこは個性ってことにしておいて欲しいね、うん。

『まだそうと決まった訳ではありませんよ。それと、もう一つ申し上げておきますと、私のいた世界では、科学が非常に進んでいます。その結果、人間は猿が進化したものです。』

神が造ったと言われる人間が、実は環境に合わせて、時を重ねて優秀になったってことです。

この進化論は、神を崇拜している者たちからすれば、信じられな

いものなのでしょうが、事実、証明されています。』

ゆっくりと立ち上がって、お茶をみんなのカップに注いでいく。自分の席に着くと、またお茶を覚ます為に息を吹きかけた。

「ネイさんは大人しくて柔らかい空気を持っているのに、意外と意思がお強いんですね。」

…褒め言葉として受け取っていいのかな？

だんだんレークさんの笑顔が胡散臭く見えてきた。遠まわしに大人しく従ってるよ、って言われてる気がする。

『私、性悪なんですよ。だから、猫を被るのも得意ですし、人を言い負かすことに何の負い目も感じていませんしね。』

にっこり笑ってそう言うと、宰相様はまた笑いだした。

「これはネイの勝ちだな。ますます気にいった。」

ますます気に入られた？宰相様の判断基準が分かりません。

『私の世界では、一人ひとりの意志が尊重されます。言論の自由だつて、思想の自由だつてあります。女性に対する差別もありません。

もしかしたら、私のいた今の社会は女性の方が強いのかも。』

おじいちゃんとおばあちゃんを見たつてそうだ。かかあ天下が甞生してますもん。おじいちゃんつてば、完全に尻に敷かれてる。

それよりも、ここから変える方法ってあるのかな。これからどうなっちゃうんでしょう。

ため息を零した直後、ここで急に空気が打って変わって、意気消沈気味にレークさんが話し出した。

「あと一月ほどで鏡神祭なので、興味深いネイさんのお話を聞きに来ることができません。」

あら、せっかくの知り合いに会えなくなるの？そうでなくても三人しか知ってる人いないし、部屋から出られないのに。あ、今日もう一人増えたんだっけ。

がっかりしていると、不思議そうな顔で見られる。何でもないと答えたけど。

『テレビの話はもうしばらくお預けですね。次は上手く説明できるように整理しておきます。』

手をグーにして力む。脱・説明下手人間！

それにしても。

『これから一カ月も喋る人がいないのかあ…』

みんながいるのも忘れて独り言ちる。何か役に立てることないかな？いや、ここから出たらいろいろ大変だろうし。

でも、バレない形で自由に歩き回れたら…

！！思いついた！

『クーンさん！』

思い立ったら即行動派の私は、すぐさまクーンさんに飛びつく。もう、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てるように言った。

『女中のお仕事させてください！』

そこにいた三人が固まってしまった。とりあえず、どんな返事が来るかワクワクして待っていると、がっくりとしているお人たち。

どういうこっちゃ？

一人理解できずに首を捻る。それを分かってくれたのか、クーンさんは代表になって話してくれた。

「最後の乙女」かもしれないネイに、そんなことはさせられない。

なるへそ…なんてこった！

せつかくいい案だと思ったのに、どうやら採用されならしい。でも、これができないとなると、本当に一人ぼっちで一カ月過ごすことになっちゃう。

それに、こんなお姫様みたいな生活、心苦しくて仕方ないんだ。

『そこを何とかありませんか？働かざる者食うべからず、とも言いますし、こんなにももしない生活なんて、あり得ません。』

私の意見が一理あるのか、三人は顔を見合わせて困っている。

…もつひと押し、だね。さっき提言したように、私の意志は強いんですから！

『もし私が最後の乙女であつてもなくても、これから先、元の世界に戻る保証はありません。』

どう転んでも、いずれは独立するべきですし、こう言う籠の鳥になつたようなお嬢様生活なんて、私の性質には合いません。』

女中の仕事を覚えれば、自分のことは自分でできるようになる。

それに、住む所を探せるし、もしもお給金も貰えれば何もかもこの暮らしに合わせていけるかもしれない。

だから、曲げる訳にはいかないの。

そう思いじつと三人の顔を見つめる。まず降りたのは宰相様だった。

「こう言っていることだし、何せ誰とも会わずに一月もこの部屋から出るな、とは言えんだらう。」

宰相様ったら話が分かるー！

って、抱きつきたい気分だったけど、そんな空気じゃないことは

重々承知。だから、我慢した。

その言葉を聞いてレークさんは。

「仕方ないですね。私が話相手に慣れないのは悔やまれますが。」

そう言った。

すぐさま反応してクーンさんは言葉を遮ったが、二人の重い視線にとつとつ陥落。

「承知をしてくれた。」

### 宰相さま、登場 その3

「ネイ、条件を付けても良いか？」

そうキタか。どうやら心配症であるらしいクーンさんは、簡単に野放しにはしてくれないみたい。逃げたりしないのに。

でも、条件を飲まずに自由を失ったら嫌だから、顔色を窺いながら小さく頷く。

それにホツとしたような表情を浮かべて話し出した。

「宰相殿が俺のどちらかの専属の女中として働くことだ。」

そうか。いろいろと知らない事だらけだもんね。

妙に納得しながら、了解したことを告げる。でも、話はそれだけじゃ終わってはくれなかった。

「お前の専属でいいじゃないか。ネイ、こいつに働き過ぎだと注意する役目を承ってくれんか？」

やっぱり。他の人から見てもクーンさんは働き過ぎってくらい働いてるんだ…

宰相様はきつとクーンさんのことを心配してるんだね。レークさなんだったらこうはいかない。クーンに言いくるめられちゃうだろうから。

『了解いたしました。』

立ちあがって前で緩く手を重ね、綺麗にお辞儀をして見せた。最初の時みたい、みんなは驚いた顔。

今日はこんな顔見てばっかだなあ。

なんて一人暢気にそう思った。

「ネイ、お前はどこで覚えてきたんだ？先程もどこぞの令嬢のようだったし、今もその気品さは完全に消えきっていないが、女官のようにお辞儀をして見せた。

不思議でしようがない。」

そんなこと言われても、記憶にないんだけど。でも、強いて言うなら。

『ドラマとか映画の影響かも…』

この呟きを理解できる人はいなかった。三者三様、さまざまな顔をしている。

「それは、なんだ？」

簡単に説明、できないー！どうやっても無理だよ。私、説明下手だもん。

…うん。困ったぞえ。



『先程レークさんには説明しましたが、私のいた国では機械がとも発達しているんです。“テレビ”と言うものがありまして、目に見えているような映像を映し出す機会があります。』

レークさんは分かってくれましたが、おそらく鏡盆に映っているものを見る感じだと思っんです。

そのテレビには、たくさん物が映し出されます。その中の一つがドラマです。ドラマとは、劇場で見られるものを何回かに分けて楽しむものです。

映画とは、それ専用の映し出す写映機を使い、大きな白い布にそれを映して見ます。例えば、ドラマが1時間を一回の物とすると、10回ほど放送して話が完結すること、映画は二時間ほどで一つのお話が完結することに違いがあります。』

たぶん、あつてると思っただけど。

大体の感じで伝えてみたから、かなり内容的には不安になる。

どうも英語は伝わらないみたいだから、スクリーンとか使えなくて困ったけど、これが私の限界です！

…自慢して言うことじゃないけど、さ。

「何となくは理解できた。ネイのいた世界は文化が発展しているよっだな。」

優しさに涙が出そう。

クーンさん、明らかに眉間にしわが寄ってて、ちょっとこんがらがってます、って顔してるのに。

『はい、ものすごく。不便な事はありませんし、逆に手が掛からなさ過ぎて人がダメになっっている様な気がします。』

「まだ便利な事があるんですか？！例えばどんなものがあるので…「レーク。」

有り難い。

流石に急なテンションの高まりがみられるレークさんはここ数日で、あのアホ神くらい厄介だって分かったから。

見兼ねて止めに入ってくれたクーンさんにまた感謝した。

「詳しい話を聞くのは、事が無事に過ぎ去ってからだ。とりあえず、あと一月はネイのことを鏡神祭があるから、とごまかすことはできるだろうが、問題はその後だ。」

…確かに。ひとまずこの状況から脱することができただけいけれど、肝心の問題を後回しにいただけだって気付いた。

「明日の朝はゆっくりしろ。ミリアにすべて任せておくから、何食わぬ顔をして俺の執務室へ来い。」

そう念押しをすると、忙しそうに去って行った。

ですよ。だって、私のいる客室にくるのはいつも夜遅く。きつとそれも一日中、根詰めて働いてから。

なのに余計な事で時間を取っちゃったから、今日はもっと遅くなるんだろつなあ。倒れなきゃいいけど。

「そう言うことならば、あとはお前たちに任せた。とにかく、もう一度考えることもあるだろうから、また訪れる。」

あいつの世話はネイに任せた。頼んだぞ。」

そう言つと、宰相様も足早に去って行った。

みんな忙しい人たちなんだろうね。私なんかに構わなくてもいいのに。って、そんな訳にもいかないか。

どえらい話になってきちゃってるしね。

レークさんもどこかへ行くだろうから、一人でポーっとしてようかなあ。って思ったのに。レークさんは立ち上がることもせず、地球のことを聞いて止まない。

忙しいんじゃないの、って聞いたら、明日から頑張るからいいんだって。

あんだ、それ、職務怠慢ってやつじゃないっすか。しっかり働こうよ。…私が言えたことじゃないけど。

夕食を一緒に摂り、それが終わってもレークさんは興味があることをひたすらに聞いて行った。

クーンさんが来た時にはぐったりしてたのは無理もない。

「…疲れたのか？」

それはクーンさんじゃない。顔色だって悪いのに、私の心配してる場合じゃないよ。

『夕ご飯は食べましたか？』

少し、と返ってきた答えに不安になる。それに、やっぱり働き過ぎだっと思った。

私、確実に負担になってる。明日から、しっかりと働いて、クーンさんに少しでも楽しんでもらわなくちゃ。一人でガッツポーズをする。

髪を拭いてくれているクーンさんには見られずに済んだ。

『あんまり、無理しないで下さいね。クーンさんが倒れちゃったら、心配になって私が倒れちゃいますから。』

真剣にそう言ったのに、なんだそれ、と呟いて喉の辺りで小さく笑われた。今日はいつもよりも遅い時間に来たから、本当に申し訳ないと思ってる。

だから心配したのに。なんで笑われたんだらう。いや、もしかしたら私が何か言葉を間違えたのかもしれない。

「ネイが倒れたら誰が倒れた俺の世話をするんだ？明日から俺の専属になるんだろ。」

あ、そっか。主の世話もせずに隣で倒れてるなんて、女中失格じやん。…私、ホント馬鹿。

いや、でも、それくらい心配してるんだって、いい方向にも取れるよ。ね？とか、誰に言う訳でもなく、話を振って見たり。

『お願いですから、ご自愛ください。』

女中さんっぽく言ってみたけど、やっぱり映画とかドラマとかの真似でしかない。ミリアに聞いて、しっかり勉強しなくちゃ。

一人物思いに耽っていて、クーンさんの表情が硬くなったのには気付かなかった。

「ネイ、みんなの前ではそうして入れればいいが、俺の前では普段通りにしていて欲しい。」

でも、と口を開こうとすると、すぐに遮られる。

「そっちの方が俺の気が休まる。」

ずっと人に敬語を使われてたりとかするから嫌なのかな？クーンさんがそう言うなら、そうしよう。

了解を伝えると、髪はもう乾いていた。今度は櫛を通してくれる。その時にも話は続いた。

『…どこか、借りられる部屋を探さないか。』

「なに？」

うひょ！低い声が耳元でした。

ゾクツとさせるような響きは、何とも言えない艶やかさを持っている。なのに、どこか怖かった。

『いや、だから、えっと…』

目力強いから、余計に怖い。

イケメンは流石に迫力ありますね。って、今は顔見えてないけど、でも、顔も体格も体型も良いんだもん。もちろん声だって、極上だ。

『女中が城の客室にいるのもおかしいですし、どうなるにしろ、一人立ちしなければいけませんから。』

それもそうだな、と悩ましい声。それでも手は止まらなかった。

「女中の間はここにいるのは、確かにおかしいな。一月はここにすることは難しい…そうか。ならば、俺の家に来い。」

そうすれば夜のこの時間もなくならずに済むからな。」

…なぜそうなる？！

急な話の展開についていけなかった。

確かに行くあてはないけど、どこか仲介とかで紹介してもらって、暮らすって形にならないの？

なんていう間もなく、意気揚々とクーンさんは帰って行ってしまった。

なんてこった…

専属女中（メイド）、出勤

「ネイ様、おはようございます！」

『おはよー…』

昨日のことが気になってあんまり眠れなかった。顔、最悪だと思  
う。

「あら、眠れなかったんですか？」

やっぱり…

『顔、そんなに酷い？』

そう聞くと。

「ええ。」

なんて、すぐに返事が来て凹んだ。

自分で聞いておいてなんだけど、ちょっと包み隠して欲しかった  
ぜ。とか強く思いながらも、脱力した。

「早く顔を洗って来て下さい。きっと目が覚めますから。」

返事をする、バスルームに向かった。水で軽く顔を洗い、顔を  
拭う。



鏡に映った顔は…

『お化け…?』

そんな残念過ぎる私は歯を磨いて、ミリアがいるであろう寝室へ向かった。

「あ、目は覚めましたか？お召し物の準備はできてますよ。」

そう言ってベッドの上に広げてあったのは、簡単に言えばメイド服。

『フリフリ…』

まじで勘弁してほしい。

「お城の女中服は可愛らしいですから、きっとネイ様に似合いますよ。」

うん。…嬉しくないけどね。

それに、こんなに長い裾って…ありえないっしょ。

『ミリアの服の方が可愛いと思う。』

そんなちっちゃな眩きはミリアに届くはずもなく。さっさと着ると目線で催促され、のろのろと着てみた。

「よくお似合いですわー!」

うそだ！キモいだけだつて！！

『ミリア、これいじつちやダメ？』

眉だけを綺麗に動かして見せるその様は、訝しげな様子をそのまま表していた。換えはありますけど、という言葉聞いて、ハサミを貸してもらおう。

生き生きと刃先を鳴らすと、ちよつとだけ引かれた。

「もしかして…」

そのとーり！ふふふ。楽しませていただきまっす

息を大きく吸うと、刃を動かした。

『ミリア、ペチコートある？』

そう言つと、少し興味が出てきたのか、渡してくれる。それを付けると、スカートよりも少し短めに切つて、軽く縫いつけた。

『編上げのブーツ、履いてもいい？』

こつちの世界に来てから、お願いして茶色の編上げのブーツを履かせてもらつて言った。でも、こつちの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

流石に髪はまとめて、化粧をしてもらおう。

完成です！

「いい。すごくいいです！」

そう褒められて私の鼻は高くなる。

スカートは足首まであつてウザったかったから、膝が見えるか隠れるかの所まで切った。そして編上げブーツ。肌がたくさん見えるのはダメらしいから、ちょっと緩めの靴下をはいて、極力見せないようにした。

ゴスロリに近くなっただけど、足首まであるよりマシ。これで大分動きやすくなった。

「可愛らしいですけど、きっと上の方々が見たら憤慨なさるわね。」  
別に怒られてもいいよ。自分がいた国とは文化が違うんだって言えればいいんだから。

あ、でも、そうするとクーンさんに迷惑かけちゃうかなあ。」

そこが一番のポイントだよな。

でも、この世界の服は本当にあり得ない。動きやすさなんて皆無。確かに地球の衣服の文化は露出が激し過ぎるかもしれないけど、ここはいくらなんでも布が多過ぎだ。

私だって足を出したからない女子高生だったけど、流石に膝は出てたもん。ま、ここじゃそれを配慮して膝も出てないんだけどね。

これでも譲歩した方だつて。それに、何だつたらパンツ履いて仕事したつていい。いい加減、ジーパン履きたいんだよね…

ズボンは男の人しか履いちゃいけないらしいから、当分はムリだろつ。

「あら、こんな時間！ネイ様、クーン魔道師の所へ急ぎましょう。」

そう言われて、少し戸惑つた。カスタム女中服メイドのままだったから。

でも、面倒だからいつか。

なんて、ミリアが忘れてるみたいだから、しめたもんだと思つて、黙つて着いて行つた。

「クーン魔道師様、ネイ様をお連れしました。」

ほー…でかい部屋。

ノックをして開いた先には机が一つ。それしかなかった。

そこに着いて仕事をしている様子のクーンさんは、切りがいいところまで行くと顔を上げる。

それからちよつと驚いた顔をした。それに気づいたミリアははつとして私を見る。それからやつちまつたつて顔をしていて面白かつた。

…睨まれたからすぐに止めたけどね。

「随分といじつたようだな。」

はい、申し訳ありません。とか謝って見たり。でも、実際は口だけで、反省なんてしてないけど。てゆうか、部屋にいた時だってこれくらいの丈だったし、誰にも文句は言われなかったもん。

気にするほどじゃないと思うんだけど…

『これ、そんなに変ですか？』

裾をちよつと上にあげてそう聞くと、目のやり場に困るから下ろせ、と言われる始末。今さらだけど、ここの文化とは合わない気がする。

「似合っている。まあ、それでもいいだろう。」

助かった。長い丈だと転んじゃうだろうしね。怪我だけは勘弁ってなことだ。

「仕事の仕方はミリアに聞けば大抵わかるだろう。それに、俺はあまり世話が掛からないだろうから、そこに居てくれるだけでいい。」

それだけ言われると、私はミリアに続いて部屋を後にした。

城は迷路みたいになっている。すっかり暗記しないとまずい。道を覚えがてらに、それじゃ私の意味がないんじゃない、ってミリアに聞いたら、それだけで十分すぎるんだって言われた。

「これは私から話せることじゃありません。しかしながら、宰相様に少しは言われたでしょう？」

クーン魔道師はこの城では厄介な立場に居ます。仕事をし過ぎないようにネイ様が注意して下さるだけで十分ですよ。」

なるほど。みんなクーンさんが働き過ぎだっと思ってる訳ね。

ワーカホリック？いや、働いてないと落ち着かない訳でもなさそうだし。何か理由があるんだろうねえ。

話してもらえない限り、私には理解できない。早く話して欲しいなんて思っていると、女中部屋に着いた。

ミリアはここで着替えているらしい。ここから、調理場や洗濯場など、城内を案内してもらった。

それにしても広すぎ…

ミリアはもう慣れたって言ってたけど、私は当分無理そうだ。たいていの所を案内してもらって部屋に戻ると、第一城人発見。

一瞬ぎよつとした表情をされて、言わんことがよく分かった。

あ、やば。

どう考えても視線は私のスカート。早速怒られると思ったら、おばさんは豪快に笑い出した。

「あんだ、クーン魔道師様に聞いた通りの子だねえ。」

クーンさん、何か余計な事言った?!自己紹介でもしますかね。

恐る恐る口を開いた。

『お初にお目にかかります。クーン魔道師様の専属女中となりました、ネイと申します。』

以後お見知りおきを。』

昨日のように手を軽く前で組み、丁寧にお辞儀をしてみると、今度は目を丸くしていた。忙しい人だ。

「奇抜な格好をしてると思ったら、教養があるみたいだねえ。」

あ、そこですか。大概の人に教養があることを驚かれるのはどうしてだろう。やっぱり幼く見えるのかな？

「私は女官長のマーサ・マキンス。たいていのことは私が管理している。それにしてもその格好は？」

早速キタ。やっぱり言わなくちゃダメだよー。

『私のいた国では、足首までスカートがあることは滅多にありません。それに、あれだけ長い丈だと、転んでしまいそうだったので。』

すみません、と頭を下げると、また笑い声が聞こえた。

「あんまり気にすることはないさ。でも、ここの連中にはそれをあまり良くないと思うものもあるだろう。それでなくても、“あのクーン魔道師の専属なんだから、目をつけられるかもしれない。”

怪我をしないように気をつけな。」

そろそろきな臭くなってきた。そんなにクーンさんは大変な人なのかな。

「まあ、その格好をしていると逆にクーン魔道師の専属だと分かって、そこら辺のお偉いさんに小間使いにされずに済むだろう。」

豪快なおばさんと、いや、マーサ女官長と握手をすると、ミリアと一緒に厨房へ向かった。



## 専属女中（メイド）、出勤 その2

「ここで、お茶の準備をします。何度かお茶を淹れてるのは見ましたが、正しい入れ方をお教えしますね。」

残念な事に、私は言われてすぐに覚えられるたちじゃない。だからエプロンのポケットからメモ帳とボールペンを出す。

その二つに不思議そうな眼を向けてきたけど、質問されなかったからあえて答えなかった。

「おつ、新人さんかい？」

陽気な声。明るくおはよう、と声をかけられ、私はさっきと同様に丁寧に挨拶をした。

「ははは。俺にそんなに畏まることはない。お、お譲ちゃん、随分と軽そうな格好じゃねーか。」

はい、キター。本日二回目の服装チェック。

『本日よりクーン魔道師様にお仕えいたします、ネイと申します。』

この格好は動きやすさを重視いたしました。私は人よりどんくさいらしく、長いスカートだと、上手く動けないのです。これは転ばないための配慮ですので、どうかご勘弁を。』

「…ミリア、この方はどこぞのお譲さんかい？」

おっと。何か間違えた？

不安になってミリアを見ると、しょうがない、と言った様子でため息をついた。呆れられたみたいでちょっと悲しい。

「いえ、新人さんですから、きっと緊張してるんです。」

あ、なるほど。わかったぞ！さっきのはお偉いさん方に使う言葉。ここでは少しだけ丁寧に喋ればいってわけね。

「そーか、そーか。そんなに緊張することはない。」

ここは気取ってる調理場のヤツらじゃないから、安心して何でも聞けばいいぞ。

俺はミハエル・ユース。みんなにはエルって呼ばれてんだ。ここでコックをしてるから、昼食なんかは注文してくれていいぞ。」

あら、良い人そうで安心。気取った人だったらどうしようかと思っただ。

さっきのマーサ女官長といい、エルさんといい、優しい人が多そう。なんか、こういうのってたいいは新人が虐められたりハブられたりするのがオオドウじゃない？

あ、ドラマとか本の読み過ぎか。

私はよろしくお願ひします、と言つと、ミリアに連れられてクーンさんのお部屋に戻った。

ら。大変な事になってましたよ。

クーンさんが夜中まで仕事してる理由が分かった。

部屋見戻ってみたら、書類の山、山、山！

さっきまで平穩だったのに、びっくりするくらい人が出入りして  
る。

部屋が広い理由はここにアリってか。

「驚くのはまだ早いです。こんなのはまだマシな方なんですよ。」

ウソつ。こんなの、仕事って量じゃない。もはや、うーん、そう  
！簡単に言っちゃえば戦争に近い。

クーンさん、必死に書類の山と戦ってるから。

『クーンさんってド？』

「なんです、それ？」

『マゾってこと。苦痛を喜びに感じる人のこと。』

二人で部屋の隅に立ちながら立ち話。

クーンさんが働いてる時に何やってんだってお叱りの言葉を得る  
かもしれないけど、生憎人がせわしなく動いてるせいで、ミリアは

もうしばらく仕事に行けそうになかった。

「もしそうなら、気持ち悪いですね。でも、仕事に関してはそう言えるかもしれません。」

日常はどちらかと言つと違うようですけど…闘い方では言えば、守るよりも攻めるほうが得意だとお聞きしました。」

『Sってことか…』

今度は不思議そうにSの意味を聞かれて、私は丁寧に説明した。

「ネイ様のお国は不思議な事や物、文化がありますね。ここまで知らない事だらけだと、むしろ面白いです。」

そう、なのかな。まあ、確かにここの文化は驚くことが多い。それに不便なことだらけだし。

今のところ、電気がないのが一番痛いところだよね。エジソンは偉い人だよ、ホント。

「では、私は仕事に戻ります。お昼時になりましたらお迎えに上がりますね。」

丁寧に礼をして、出て行ってしまった。一段落した部屋は静かで、書類を捲る音と、ペンの音だけが響く。

こりゃ、話しかけられない。

「ネイ。」

うおー。クーンさんの方から話しかけてきた。

何でしょう、と言うと、手は休まず、顔を上げないまま言葉を続ける。

「同じ職場の人間にはもう会ったか？」

こんな時まで私のことなんか気にして。ものすごい仕事の量なのに…

『はい、マーサ女官長とエルさんとは会話を交わしました。お二人ともとてもいい人です。』

「そうか。あの二人に気に入られたのなら大丈夫だな。」

そうなのか？いや、クーンさんが言うならそうなんだろう。あの二人はどう見てもリーダー気質だったし。

『あの、クーンさん。余計なことかもしれませんが、これ、手伝えませんか？』

国家の機密書類だとかだとまずいと思うけど、そうでなければ何か手があるかもしれない。

『さつき行き来している人たちの話が聞こえていたんですが、ここには省がたくさんあるみたいなのに、書類は皆さんバラバラに置いて行かれました。』

それを分類するくらいなら手伝えらると思つんです。』

そう、さっき実はちょっとイラッとした。だって、どこの省の誰かは名乗るのに、どうしてそのまま書類を重ねてくんだって。誰がどう考えても、効率的じゃない。

「…ネイがやることじゃない。」

その突き放された冷たい口調。こんな重苦しい空気を纏っているクーンさん、初めて見た。

怖い。

けど、私の心配ばかりしてる人には言われたくない。

『私はクーンさんが私を心配してくれるように、クーンさんのことを心配してるんです。どうか、ほんのちょっとしか手伝えませんが、やらせて下さい。』

お願いします、と付け加えて頭を下げる。必死の懇願だった。

「ネイ、その“お願い”はずるい。」

苦虫をかみつぶしたような顔。どこかずるかったらしい。よく分かかないけど。

『じゃあ、手伝わせてくれるんですね？』

そう言つと、小さく渋々と言った感じだけど、了解の返事が戻ってきた。

やったー、と喜んで置いてから疑問が一つ。

私、こっちの字読めるのかな？って、かなり根本的な事を今さら！アホ過ぎる…

恐る恐るゆっくり書類を手にしてみると。

『あれ？』

私の眩きにどうした、と心配そうな声がした。

『読める…』

書いてある字は明らかに日本語じゃないのに、普通に読めた。疑問だらけ。言葉も分かるし、字も読める。違う世界に居るはずなのに、こんなのってアリ？

「大丈夫か？」

そう聞かれて現在に帰ってきた。

呆けてる場合じゃない！少しでもクーンさんの仕事の負担がなくなるように手伝わなくちゃ。

うし！両頬を叩いて気合を入れる。

それから女中部屋に戻った。

ちなみに、廊下は一切走ってません。このスカートの丈でさえ怪

しげな顔されるのに、走って置いてお転婆だと思われたらなお悪い印象しか与えかねないもん。

でも、最後の方は早足になって、女中部屋に飛び込んだ。

お目当ての人がいて安心。すぐに声をかけた。

『マーサ女官長様。』

「マーサでいいよ、ネイ。どうしたんだい？」

飛び込んできた私に驚きながらも、普通に対応してくれた。流石、大人！

『少し大きめの机をお借りしたいのですが、どこかに宛はありますか？』

クーンさんの机に積み重ねてある書類を整理するためだと話すと、着いて来るように言われ、また城の中を歩く羽目になった。

やっぱり覚えられそうもない…



専属女中（メイド）、出勤 その3

「久しいね、リユクス。」

着いたのはお城のすぐ近いところにあるスポーツの練習場みたいなところ。でも、そこで繰り広げられていたのはもちろん陸上競技なんかじゃなくて、見るも見事な剣技だった。

「あれ、マーサさんじゃないですか。どうしたんです？」

どうやら二人は知り合いらしい。赤毛の青年はそばかすのある頬を上げ、無邪気に笑っていた。

随分と爽やかそうな人。私はじっと見つめてしまった。

「あれ、後ろの人は…初めて見る顔だね。」

私の視線が熱過ぎたのか、話題に上がってしまった。早いとこ戻りたいのにい〜。

「この娘は今日からクーン魔道師の専属の女中になったんだ。ネイだよ。ネイ、こっちは騎士団第二軍長官のリユクス。クーン魔道師の部下さ。」

ほー。若いのに立場的には高い所にいる人なんだ。さすが、こう

いう仕事だと実力主義なんだね。

『初めまして。』

そう言うときにこやかな挨拶の返答。それからお約束になった私の格好の説明を終えて、机の件に話は移った。

「と言う訳で、クーン魔道師の部屋に運んで欲しいんだよ。

お願いできるかい？」

マーサさんの話を聞いたリュクスさんは、嫌がるどころか目をものすごい勢いで輝かせた。

…犬？

耳と盛大に振られてる尻尾が見えた気がして目を擦ってみると、そこにそれは存在してなかった。

でも、なんかリュクスさんって犬っぽいなあ。

「お任せ下さい！そんなお願いならいつでも聞きますよ。」

誰かの名前を呼ぶと、リュクスさんはその人に事を説明する。その人もやっぱり嬉しそうにしていた。

クーンさん、みんなに人気なのかな。イケメンは男女問わず人気が高い、って心のノートにメモっておいた。

場面は変わりまして、現在は私はお城の廊下を、机を運んでくれている騎士団の方と歩いております。二人は人懐っこいらしく、奇抜しいな私も簡単に打ち解けていた。

クーンさんは騎士団の長官だつて聞いてたのに、言われるまで記憶の奥底に仕舞つてあつたみたい。完全に忘れてた。

「クーン魔道師は俺たちの中じゃ人気が高いんだよ。年寄りのお偉い方には嫌われているが、貴族の娘たちの間でも人気が高いな。」

ああ、それは言われなくても分かる。

『あの容姿ですから、若い娘たちは放つておかないでしょうね。』

きつとアイドル状態。顔、スタイル、完璧。てゆうか、何頭身ですか？足、長いよねえ。

私は…うん、見なかったことにしよーかな。

残念過ぎる私の容姿の説明はパスと行きますよ。

「おや、ネイは興味ないのかい？」

からかいを含んでるその瞳には、わざと空気を読まずに一刀両断。

私はそう言うことには関与しないで、傍らで話を聞いている役が性に合ってるし。

『私、クーン魔道師さまに命を助けていただいたんです。ですから、その恩を返すために誠心誠意お世話させて頂くまでですよ。』

笑顔でそう言うと、そう言う意味じゃないんだけどなあ、なんて呟きが聞こえた。

わざとですよ、わざと。からかいに對することを言わなかっただけで、さっきのは私の本心だしね。

それ以外は何も口を開きません！

「それにしても、クーン魔道師にお目にかかれるのはいつ振りかな。」

名前を聞き逃した騎士さんは熱っぽくそう言った。本当にクーンさんのことを慕ってるんだって感じる。

それにしても、会うの久しぶりなんだ。あんだだけデスクワークしければ当たり前っちゃ、当たり前か。

「今の地位に就いてからは練習場にいらしてないんだ。ネイは見たことないかもしれないけど、魔術だけでなく、あのお方の剣は迫力があるんだよ。」

ほー。それは一度お目にかかりたい。

現代の地球じゃ本物の剣なんて闘う道具じゃないだろうし、日本

で持ってたら銃刀法違反で即逮捕だもんね。

『一度でいいから見てみたいです。』

きつとあの格好良さが引き立つちゃうんだろーなあ。目の保養を通り越して、毒になるはず。その時には卒倒しないように気をつけなきゃ。

「俺は一度もあの人に勝ったことがないから、久しぶりには是非手合わせ願いたいなあ。」

リユクスさんの目は、さっきとは違う輝きを持っていた。何て言うか、キラキラしてる。

勝ちたいてって思ってるのか、闘いに飢えているのか。どっちにして、今の私にはまだ非現実的な話だ。

…おおよよ？また人が出入りしてるみたい。

朝ほどではないけど、何人もの人が書類を抱えてクーンさんのお部屋に入って行く。出てくる人はみんな何も持っていなかった。

ってことは、全部あの部屋に収まってるのか。

…量、多過ぎませんか？いくらなんでも仕事量がありすぎ。あんなことずつとやってたら、クーンさんそろそろ倒れるよ。

「中に運び入れるのか？」

縦にゆっくり頷く。すると、ちよつとどいてろ、と言われ、机を

そこに置いた。

「サイモン、中の調度いい所にこの魔法陣を置いてきてくれ。」

サイモンさんって言うんだね。

ここで名前をようやく知ることができた人、サイモンさんは、リユクスさんが持っていた紙を持って中へ入って行った。

詳しいことは後でクーンさんに聞こう。魔法なんて空想上の物が実在してるだけで興味津々。だけど、ここでは当たり前らしいから、変な反応を見せたら疑問に思われる可能性大。

置いて来ました、と帰って来たサイモンさんが言うと、お礼を述べてからリユクスさんは右手を構えた。

どんな方法を使うのかと思うと。

「転送」

そう言ったと同時に指を鳴らした。

案外シンプル。なんちゃらかんちゃら、呪文みたいなものは掛けないみたい。少しだけ夢が削がれた気がした。

ほら、杖を使う、とか。長い呪文を唱える、とか。

某ファンタジー映画、みたいなのをイメージしてたから、ちょっと残念だった。

でも、やっぱり驚く。目の前に合ったはずの机とその上に乗せられた魔法陣の紙は、あつたはずの私の目の前からごく自然に風景に馴染んで消えていくかのようにスツと見えなくなったから。

『リユクス様も魔道師だったのですね。』

本当、ありえない世界だよ。とんだファンタジーだらけの所に来ちゃってみたい。

「様付けなんてするなよ。柄に合わない。」

あらら、照れてる？

リユクスさんの顔はその髪ほどではないけど、赤くなっていた。照れてるかどうかを尋ねると、照れてない、何て頑固な返事。そんなの肯定してるもんだよ。

面白い人はっけーん！

私から逃げるかのようにクーンさんに挨拶に行くと告げると足早に部屋に入り込んで行った。慌ててその後を追う。

私とリユクスさんが廊下で立ち話をしている間に一段落ついたのか、人通りはまた途絶えていた。

中に入るとサイモンさんがもうクーンさんと話している。本当に久々だったみたいで、少し分かりにくいけど、クーンさんは喜んでるみたいだった。

「クーンさん！」

あ、犬が飛びついて行った。やっぱり全力で振られる尻尾が見える。

ホント、懐いて…いや、慕ってるんだねえ。

「ネイ、机を運んできたのか？」

はい、と返事をして、お茶のワゴンに近づく。手を動かす前に謝罪を入れた。

『勝手な事だとは思いましたが、このままではこちらが書類で溢れてしまうと思いましたので。』

しかし、これからはクーン魔道師さまにお伺いを立ててからにいたします。』

丁寧に礼。それからお茶を淹れはじめた。

さっきの手順を思い出す。ミアアに言われた通りに、ミアアに言われた通りに… 心の中で何度もそう呟いて、お湯を注ぎ、蒸らし時間を計るために砂時計をひっくり返した。

本当に女中だったんだ、なんて呟いてリユクスさんの言葉は聞こえなかったフリをしときましたよ。

温めたカップを三つ用意して、砂時計の中の砂が完全に落ち切ったタイミングを見計らってお茶を注ぐ。それが終わるとトレーにそれを乗せて、丁寧に三人の所まで持っていった。



うん、置くところがない。

当たり前だけど、クーンさんの机の上は書類だらけ。

こんなにすぐに役立つとは、ね。

私は運んで来たばかりの机の上にカップを三つ並べた。有難う、と言われると嬉しくて笑顔が零れる。

『初めて淹れたので、味の保証はできませんが、どうぞお飲み下さいませ。』

「ネイも一緒に飲もう。」

味の感想を待っていると、クーンさんは唐突にそう言った。

いや、それはいかんでしょうが！

『私はクーン魔道師さまの女中なので、それは困ります。』

初仕事のウキウキはどこへやら。

リュクスさんたちの目の前でなんつーことを抜かしてんの！

うるたえる私、主張を揺るがさないクーンさん。二人のやり取りを二人は目を丸くして見ていた。のにも拘らず。

「“魔道師さま”なんて呼び方は外だけでいい。少なくとも俺に直接そう言うのはやめてくれ。」

もー！！！！無理難題ばっか、押し付けないでよ。ってか、その  
二人、助けて！。

なんて手を伸ばそうとしたら、クーンさんの妨げによってそれは  
達成されなかった。

専属女中（メイド）、出勤 その4

「クーンさんとネイはそういう関係なのか？」

リユクスさんっ、訳の分からん事言うな！てゆうか、クーンさんは否定くらいして！

「ネイは賊に襲われていたところを俺が助けたからと、身の回りの世話をすると行って聞かないんだ。」

何それ〜。半分以上嘘じゃないですか！

とは言えず。私はぐっと押し黙った。

「確かに身のこなしは貴族令嬢のそれですね。もしかして、そんなのですか？」

サイモンさん、話を膨らませないで。そして、そうか私に弁解の余地を！

「それは…。」

クーンさんはここで黙って私を見る。その所為で視線は私に集まった。ひじょーに居心地が悪い。

「ネイ、そうなのか？」

リユクスさん、そんなの知ったこつちやないですよ。大体から言  
って全部初耳だし。

言葉に困って黙ったままの私。こんな微妙な空気の中、口を開く  
勇気なんて無い、って思ったのは四人中三人。

空気なんてお構いなしに口を開いたのは、さっきまで見えてた尻  
尾（比喻）を下しているリユクスさんだった。

「まさか、賊に襲われたのが原因で記憶を失ったのか…?!」

急な展開に耳を疑う。眉を顰めて。

『…はい?』

なんていった所為で勘違いはさらに続いてしまった。

私のおバカー!

「悪かったな。思い出せないのに無理に聞き出そうとして。」

泣いた!なんてこつた。大の男が泣いてますよ。

『あの…「いいんだ!」』

はひ?今ので伝わったはず…

「何も言わなくていいんだよ。」

…ないよね。

『リユクスさん、何か勘違いしてるんじゃない？』

ガシツと肩を掴まれて言葉を遮られる。思わず飛び上がったのは無理もなかった。

「辛いことが分からない状況下にいるんだな。クーンさん、俺、ネイみたいな娘を増やさないためにも鍛錬を行い、見回りをしてきますっ！」

……

行っちゃったよ。

私の手と口はリユクスさんを止めようとしたところで固まっていた。

「ネイ、何かあればいつでも相談に乗る。では、私もこれで失礼します。」

サイモンさんは礼儀正しく挨拶すると、やっぱり勘違いしたまま行ってしまった。

伸ばしていた手を空中から力無く下ろす。

それから、さっきから聞こえてくる、聞き慣れたクーンさんの喉

の奥で笑う小さな声がする方を睨みつけた。

『クーンさん、遊びましたね?』

笑ったところでそれは確定してた。大体、意味深に黙りこくった時点で可笑しいとは思ってたんだよね。

「…すまない。あいつらと会うのは久しぶりだったから、つい懐かしくなってな。」

貴方はいつもそんなこととして部下をからかってたんですか!私なんていい餌にされちゃいましたよ。

「リユクスの勘違い癖は治らないみたいだな。」

そう言ってまた笑った。

『リユクスさん、いつもあんな感じなんですね…』

こんなこと言ったらダメだろうけど、会う度に疲れそう。それにしても、この世界に来てから、必ずって言っていていいほど最初は話を聞いてくれない人が多い。

「驚いただろう?少し前までは毎日会っていたから何とも思わなかったが、久しぶりに見ると面白かったよ。」

明るい微笑みを浮かべたかと思いきや、いきなり陰った。それが何だか自嘲気味な笑顔に見える。

『クーンさん?』

顔を覗き込むと、また笑顔を作ろうとしてる。私は咄嗟にそんなの嫌だっと思って、やめてください、と口にした。

『無理に笑わないで。そっちの方が見てて不安だよ。』

私、クーンさんの手伝い頑張るから！協力し合えばきっとリュクスさんたちと会う時間ができるよ。』

ぐつとスカート裾を握っていた。皺ができてるだろうから、きつと後でミリアに怒られるだろうなあ。

なんて、今はそんなこと気にしてる場合じゃなかった。

「普段の口調はそっちなのか？」

はっ！勢い余ってタメ口に！

『ごめんなさい。』

目上の人は敬わなくちゃ。日本人として、これ、常識なり。

「いや、気にしていない。むしろ、いつもその口調であって欲しいくらいだ。」

それはできませぬ故。丁重に辞退を申し出た。

『リュクスさん、言ってきました。クーンさんと手合わせしたいって。クーンさんもその顔だときつとそう思ってますよね？』

ぐつと押し黙った。ってことは凶星なんだね。勝手にそう解釈して話を進めた。

『クーンさんは騎士団の方々から人気があるみたいですし、貴族の娘さんたちからも人気があるって聞きました。そんな人が部屋に籠ってるなんて、勿体ないですよ。』

「リユクスのやつ、余計な事を。」

ありや、情報源がばれてる。聞いちゃいけなかったみたいだから、リユクスさんは後で怒られてください。

『私もクーンさんがリユクスさんと手合わせしてるとこ、見てみたいです。』

そう言うつと一瞬動きが止まる。不思議に思っていると、手が伸びて来て…

「失礼します！」

「な、なんだ！」

きゃー！し、心臓ひっくり返る！

その手が私に触れる寸前にドアが開かれた。

「書類のお届に上がっただけなのですが…」

私は急いでカップを下げる。クーンさんも何もなかったかのように、受け答えをしていた。



顔、あつつい。

クーンさんの目があんまりにも真剣だったから。目、逸らせなかった。

あーっ、もう！考えるとまた顔が赤くなるでしょうが。

自分を叱責して、ワゴンを端に寄せてから、クーンさんのところへ向かった。

『クーンさんって、この書類をチェックするだけが仕事じゃないですよね？』

「ああ。法律改定の嘆願書や、城下の制度についての様々な書類がここにはある。」

各省ごとに内容は異なるが、認可して議会へ行くものは宰相のところ、不可の場合はその省へと逆戻り。

その場合、添削をして戻している。必要があればそこまで行って説明を行っている。」

コレ、全部？うひゃー、クーンさんすごい。私なら一日も持たないと思う。しかも全部一人でやってるみたいだし、天才、いや秀才さんなんだねえ。

これ、私なんか手伝えるのかな？

って、ダメダメ！やるって決めただから、やる前から尻込みし

てちやいかんでしょー。

『机の上にある書類はどここの省のものはバラバラなんですよね？』

聞くところによると、説明をしてくる人がいてそれを聞いている間に置いてく人が多いんだって。分類する暇もないらしい。

そんでもって夜遅くまで仕事してたら、きつと対策を用意する暇も労力もないはず。

女中さんとか従者さんを付けねばいいのに、ミリア曰く、クーンさんは周りに人を置くのは監視されてるみたいで嫌らしい。

『まだ手を付けていない書類を分類します。ほとんどは手を付けてないですよね？』

そう尋ねてから、着々と分けていく。省の名前は日本のもの何ら変わりなくて、ちよつと面白かった。

「…ネイは働いていたことがあるのか？」

なかなかの手捌きだったのが意外だったのか、その声はちよつと驚いている。

心外だなあ。

『仕事じゃなくて生徒会の役員をやっていたんですよ。』

分からないだろうと、生徒会の説明をした。

『…と、まあ、社会に出た時のための訓練ですね。社会の人間関係を教え込むには、学校を一つの組織のように見立てて運営するのが、口頭で教えるよりも簡単ですから。』

『よし、終了!』

サクサクと仕分け完了。

「早いな。」

お褒めいただき光栄です。はい、次行きましょ、次。他にやることは…

ゴーン、ゴーン、ゴーン…

低い鐘の音。私のやる気になっていた脳は、完全に思考を遮られた。せつかくやる気になってたのに。

『これ、なんの鐘なんですか?』

「昼時になったら鳴るんだ。」

なるほど、お昼休みか。そう言えば小腹が空いた気がする。

いつもはあの部屋から出られなかったから、ミリアが運んできてくれてレークさんと一緒に摂ってた。

でも、今日は勝手にしてもいいよね。よく分からないから、ミリア

アがいると思われる女中部屋にいったん戻ろう。

『クーンさんはお昼ご飯はどこかで摂るんですか?』

「…いつも食べない。」

はい?今、何とおっしゃった?

私は耳を疑った。

信じられない言葉が聞こえてきた気がしたけど、気の所為だよ、  
うん。

なんて思ってもう一度聞いてみたら、その“まさか”の答えが返  
ってきた。

『食べない?!いつも?!』

念を押すように聞くと、やっぱり肯定された。

し、信じられない!私なんて美味しいご飯のために頑張ってるっ  
てのに。

「そんな時間はないんだ。終わらせるのが遅くなると、省長にも迷  
惑になる。少しの間も勿体ない。」

なんちゅー男じゃ!食べ盛りの20代、それでいいんだろーか。

『…食べる時間がないだけで、食べる気がないわけじゃないんです  
ね?』

「ああ。」

なるほど。これは専属女中メイドの出番ですね！ご主人様のためにも一肌も、二肌も脱ぐ覚悟でございます。

「ネイ、だから俺のことは気にしないで食べに行け。」

でも、って食い下がったのに、クーンさんの意志は固かった。

将来は頑固親父になること間違いなし。いつその事、ここに居座ってやるうかと思っただけど、腹が減っては戦はできぬ、とも言いますし。

闘うことなんてないんだけど、一時退散と行きましょう。

『すぐに戻ってきますから！』

そう宣言して駆けだした。

## 辛口ミリアとサンドイッチ

自分の格好に奇異の目を向けられてるとか、廊下は走っちゃいけないとか関係ない！（いや、関係あるだろう。）

私は我が主のために頑張ります！

『たのもーっ！』

パンツ、と思い切り扉を開けた。そこにはたくさんの中さんたちが、当たり前前だけどいらっしやいます。すごい数の視線を集めてしまった。

やっちまっただぜ！

知った顔の方に目を向けると、二人とも頭を押さえていた。

「…ほら、あんたたち！さっさとご飯食べないと午後の仕事に間に合わないよ。」

その度胸に感服。マーサさんの粋な計らいで何とかそこにいた女中さんたちは私を気にして酷く後ろ髪を引かれてるような感じだったけど、女中部屋からは出て行った。

「もう！急に飛び込んで来てはダメでしょう？

「そうでなくてもネイ様は目立つのに。」

はい、怒られています。

反省？御覧の通り、もちろんしてますよ。ほら、ちゃんと正座。

てゆうか、ミリアって怒ると怖いんだね。今度からは怒られないように気をつけなくちゃ。

『ごめんなさい。』

「まあ、いいじゃないか。それにしてもすごい勢いで入って来たね。

何か用事があったんじゃないのかい？」

はっ！そうだった！

『クーンさんがいつもお昼を摂ってないって言うじゃないですか！  
どういふことですか?!』

さっき思ったんだけど、お昼はあの部屋に運べばいい。それくらいの余力はこの城にいる使用人の多さから言えばあるはずだもん。

「うーん。それを私の口から言うのはお門違いってヤツだ。

まあ、見たってことになれば誰の責任にもならないかもね。」

少し考えるように間をとってから、マーサさんは視線をミリアに向けた。

「ミリア、一緒に行きな。紅茶のワゴンを持ちにクーン魔道師の部屋に、ね。」

マーサさん、好き！

ぱっちりとウインク付きで言われた言葉に感動した。

こう、ドーンと胸を張って言われるから、何となく安心できる。

「でも！クーン魔道師さまはネイ様に一番知られたくないと思ってるのではないのですか？」

「でも、も何もないよ。あの子は人に頼らな過ぎるんだ。味方はこんなにもいるのにね。」

大きなため息。この時のマーサさんは、まるで母親みたいに見えた。

どうしようもない息子を心配してる母親。

…きつと、クーンさんのこと、大切に思ってるんだね。

「私はネイに感謝してるんだ。あの子が自分の傍に人を置くようになったことだけでも大きな進歩じゃないか。」

なんだか複雑、みたい。ややこしいなあ。知りたいことは教えてもらえないし。変な改定願いなんで山ほどあったし。

ここの政治は大丈夫なのかねえ。

実はさつき、仕分けしながら、いけないとは思ってたんだけど、内



容をちらっと、ね。

ほら、ダメだって思うことほど反抗的にやってみたくなくなるって言うか。立ち入り禁止って書いてある所ほど立ち入ってみたくなくなっちゃって言うか。

国の重要書類とは分かりつつも、ついつい見てしまったわけで。

私、天邪鬼なのかも知れない。

「…わかりました。ネイ様、行きましょう。」

お、ミリアが折れた。流石お母さんの存在のマーサさん。

それにしても。

『同じ仕事してるんだし、“様”付けするの止めよーよ。』

ずっと気になってたんだよね。

言うタイミング逃してたから今まで言わなかったけど、私は単なる女中だし、ミリアは女官だよ？立場が上の人に様呼びされちゃーね。周りにいる人だって変に思うよ、きつと。

「それだけはないません！」

ちえー。

結局言い合いになって、マーサさんから私たちに雷と言う鉄槌が下されました。

ってことで、話は一時保留。

私とミリアはそそくさとクーンさんの部屋に向かった。

それはドアを開ける寸前に、聞こえてきた話。冷静なんて言葉を頭からふっ飛ばすくらいのものだった。

「ほう、噂の専属とやらはおらんのか。見物に来たと言うのに、時間の無駄になってしまったではないか。」

ゆったり、いや、ねっとりとした纏わり付くような話し方。虫唾が走る。

「申し訳ありません。昼食を摂りに行かせました。」

クーンさんが謝ることないのに！てゆーか、そんな見物する時間があるんだったら仕事しろよ。

「ほう。主人を差し置いて昼食に行くとは生意気。とんだ忠誠心だな。」

余計なお世話だ、コノヤロウ！

口が悪いかも知れないけど、腹が立つもんは腹が立つ。いや、段々腸が煮え繰り返ってきた気がしてきた。

私は何とか握り拳を作って耐える。しきりにミリアが心配そうな

視線を送って来た。

「…クーン魔道師さまにとっては日常茶飯事のことなのです。ですから、頭にくるとは思いますが、辛抱なさってください。」

その小声が耳に入って来た時、思わず手を握り締めるのを忘れていた。

日常茶飯事って、こんなねちねち言われるのが日課になってるってこと？ありえない。

「戯れ事、戯言だと思って気にしないのが得策です。」

あんな肩書だけで生きている、無能な税金ドロボウ貴族の狸ジジイの言うことなど、気にしなければいいのですよ。

さてと、お耳汚しはここら辺で終わりにしていただきましょう。」

ただ呆然として部屋の扉の前で立ち尽くしていた。

…ミリアって毒舌なんだ。

ちょっとしたショックとかなりのダメージを受けながら、私はミアリアの後に続く。何事も聞いてなかったみたいに入っていく姿に、もう完敗だ。

「失礼いたします。」

堂々と歩く姿は格好よくて。どこまでも姐さんについて行きます、って心の中で誓った。

「宰相様からの伝言でございます。騎士団員育成法の改正案はまだか」との催促です。」

はつみみー。いつの間に宰相様と会ったのかなあ。

てゆうか、私、ちょっとあの人苦手なんだよね。昨日会った時、若干怖かったし。しかも急に笑い出すから、心臓が何度もびっくりしちゃったんだよね。

「了解した。午後一番に届けるとを伝えてくれ。」

お前は今後、午後の仕事に支障が出ないよう、ひるやすみをしてとに当てなくてもよい。宰相殿にもそう伝え、すぐに休憩をとってくれ。」

畏まりました、と言うと、ミリアは出て行ってしまった。

「他人の心配をしている暇などお前にはないはずだが。」

それにしても、この女中が噂のお前の専属か？足を曝しよって、品位が疑われる上に、お前の母親を連想させる。

少し幼い気はするが、顔と身体は中々よいな。もしや愛玩用か？」

愛玩用？それは一体何ですか？

訳の分からないことを言うオッサンを睨みつけながら、貶されることは確かだと雰囲気から察した。

「…聞き捨てならない事をおっしゃる。それはあなたには関係のない事だ。」

それに、その娘は愛玩用などではない。…人を計りかねると、そのうち己の身を滅ぼしますよ。」

最後の一言は、私の背筋にも何か寒いものがぞつと来た。ってことは、このオッサンはクーンさんのその迫力を一身に受けてるはずだから、なおさらだろう。

案の定、狸ジジイは顔を真っ青にして、部屋からそそくさと出て行った。

「…すまない。」

オッサンが出て行ってからはしばらく、どちらとも口を開こうとしなかった。

私は詳しい事を聞いていいものか悩んでいたし、クーンさんはきつと私に話そうかどうか迷ってたんだと思う。

『どうして謝るんですか？』

クーンさんは悪いこと、一つもしてないのに。むしろ、謝って欲しいのは訳の分からない御託を並べて、明らかに私の事を見降ろしてきたあのオッサンだよ。

喋り方がねちっこかったその人は、イメージ通りの体型だった。

良く言って恰幅がいい、悪く言ってメタボってる。撫でつけられ

た茶色の髪は、見事なまでの七三分けで油ギツシュだった。

なんか、失礼だとは思っただけ。…巨大な豚さんが質のいい服を着て歩いてます、って感じ。

『クーンさんは何も悪くない。』

大体から言っつて、あのおじさんが訳わかんないことばかり言うのが悪い。そんな中途半端だと却って気になるっくらいのささやかな情報。

あー、ホント気になるっつての！

…ま、聞かないけどさー。あんな顔してちゃ、聞けない。

さてと。私はご飯でも食べに行こうかね。

『クーンさん、私ご飯食べに行つてきます。』

一礼して、お茶のワゴンを押しながら部屋を後にした。ミアアがきつと待っててくれるはずだから、急がなくちゃ。

私は走らない程度に急いで、女中部屋に滑り込んだ。

「お帰りなさいませ。」

涼しい顔をして礼をしてくれるミアア。しかし、その裏側はいかに、って感じ。

さっきちょっと怖かったしねえ。

「どうしてそんな目で見るとですか？」

私の顔に何か付いてますか、なんてベタなこと、聞かないでください。心苦しいですから。

『んーん、何でもない。お腹空いちゃった！食いつぱぐれる前に「飯行こー」。』

腕を引つ掴んで何とか回避。私はそのまま使用人たちの食堂へ連れて行ってもらった。

## 辛ロミリアとサンドイッチ その2

ほー、広いねえ。

流石はお城、高校の学食とは一味も二味も違う気がした。

ずらつと並べてある長机とベンチには人が集まって座っている。それでも、もう昼休みが終りに近い所為か、人は疎らになりつつあった。

要するに、ちょっと雰囲気ヨーロッパ的な食堂ってところかな。

トレーに自分の分を乗せるみたいだし、多分システムは学食とかと同じだと思う。

あ、見知った人たちはっけーん！

『マーサさん、リユクスさん、サイモンさんにエルさん！』

声をかけるとすぐに振り向いてくれたみんなは、明るい笑顔を向けてくれる。さっきまでの黒い気持ちはどこかへ行って、安心感が胸一杯に膨らんだ。

「おう、ネイ。今しがたリユクスに聞いた。…お前、記憶がないんだってな。」



なにー?!

いきなりテンションが低くなるエルさん。それぞれの顔色を覗いてみると、みんな暗い顔をしてる。ってことはそう信じてる訳で。

りゅ、リユクスさんのおバカー！何でさっきの今でもう話してんのよ。

まあ、忠犬だろうから、悪気はないんだろうけどさあ。

『いや、あの…それは、ですね…「いいんだ！」』

またこのパターンか！いい加減飽きてきたぞ。

「俺、何でもするからな。ネイがやりたいことはなるべく叶えてやる！だから、記憶が戻るまで、何も心配することはねえ。安心しときな。」

はい、また弁解できないままですよ。

エルさんは涙を拭いながら厨房の方へと駆けて戻って行ってしまった。

「何がどうなってるのかは分かりませんが、とりあえずお昼を摂ってしまいましょう。」

ミリアの言葉は有り難かった。何とも勘違いが激しい人たちだ。私にはこのまま止めることはできないんだろうなあ。これからはミリアに任せよう。

私は無視を決め込むことを決意した。

「ネイには複雑な事情があるってことは聞いてたけど、そう言うことだったんだね。」

うっ！マーサさん、首、絞まっています！！

何やらマーサさんまで勘違いしちゃったらしく、私は首元を締め上げるかのように抱き締められていた。

「マーサさん、ネイ様を放してあげて下さい。そのままでは花畑を見ることになってしまいますよ。」

冷静に、しかも食べるのを止めないままミアは言った。

助かったけど、やっぱりミアは裏が存在するのね。誰にだって裏側はあるのかもしれないけど、ミアの場合は普段が明るくていい子だからか、ちょっと、いや大分怖い。

ミアだけは敵に回さないようにしよう。これもまた心のノートにメモっておいた。

解放された私は、食事に手を付ける。

『うん、素材そのものだ。』

頷きながら食べる。ミアはもう慣れてたようだけど、マーサさんはそれが不思議だったみたいで尋ねてきた。

『私の食べ慣れていたものとは味付けが違うのです。』

「そうか、記憶をなくしても身体は覚えてるってやつだね。」

勘違いは続行中で、私はもうそれでいいと思って、記憶喪失なんかじゃないと言っつのは止めておいた。

ミリアに続いて食べ終わると、お茶を飲みながらため息をひとつ。午前中の間にいろいろありすぎて、ちよつと疲れちゃった。

人と接するのが苦手って訳じゃなかったはずなのに、この短時間で会った人たちはみんな個性的過ぎて。その強烈なキャラにクタクタだった。

もしかしたら、しばらく決まった人以外と会話を交わしてなかったから、急に人がたくさんいるとこに出て来て、人酔いしちゃったのかなあ。

「大丈夫ですか？」

マーサさんは仕事に向かったらしく、目の前には心配をかけてくれる人が一人だけいた。

大丈夫、と小さく零すと、お茶を一气飲み。それをトレーに置くと、ミリアが片づけに行ってくれた。

さてと。これからどうしようかな。

とりあえず、私の中でクーンさんの仕事時間短縮計画を進めるために必要な事を考えなくちゃ。

「どうしました？そんな怖い顔して。」

急に声がかかる。聞いたことがある声。

『レークさんっ！』

声が出た方を向くと、ここ数日一番一緒に居た人がいた。

「服を大胆にいじられましたね。“ニホン”では手足を出すのが批判的には捉えられていないため、当たり前なんですよね？」

ひたすら話してたから、クーンさんは地球についての知識を、今じゃかなり持つてる。ニコニコしながら話す姿に、はい、と答えると、その瞳はキラキラしていた。

「よくお似合いですよ。人形のように愛らしいですね。」

うん、嬉しくない。人形って…子供じゃないんだから、違う褒め言葉にして欲しかった。

ん？てゆうか、褒め言葉だったのかな？

レークさん、異世界の研究が進まないからお昼にでも話をしようって昨日言ってたけど、それを本当に実行するとは。確かお祭りの準備で忙しいはずなのに、大丈夫なのかなあ。

「あー！神官様発見！！」

“げ、見つかった”、そう呟きましたね、今？逃げ出してきたんかい！

あれよあれよと言う間に、レークさんは白い服を着ている人たちに引きずられて行ってしまった。

何だったんだらうか？

呆然と立ち尽くしていると、ミリアが帰ってきて言った。

「私は仕事に戻りますが、ネイ様はどういたしますか？」

おそらく一部始終を見てたはずなのに。全く動じてないし…

『うーん、とりあえずクーンさんの仕事を短縮させる方法を考える。っと、その前にご飯持っところかな。』

私も気にするのを止めて、意識を別のことに持っていく。

「厨房の方に行けば、エルさんがいますから、相談すれば何とかなると思いますよ。」

それと、クーン魔道師さまの仕事時間を短縮する方法は、私も考えてみます。」

ミリア万歳！

私は嬉しくなって飛びついた。

『ありがとう、ミリアー！』

ミリアは固まったままだった。

「ちょっとくらい反応して欲しいんだけど…無反応だと対応できない。」

「…ネイさまは感情の表現が豊かですね。」

遠慮がちに言われたけど、そうは思わない。感情表現が一番なのは、多分リユクスさんあたりだ。

『ごめん、五月蠅かった？』

「いえ、そういうことはありません。」

少し言葉を濁す。そんな事されちゃあ、余計に気になるってのが、人間の性。

でも、ま、時間も無いし、そんなことしてる場合でもないんだけどね。

「とにかく、何でも協力しますから。ネイさまはそのままでクーン魔道師さまに接してあげて下さいな。」

了解、と残すとエルさんに会うために厨房まで行ってみた。

すごいお皿の量。まず最初にそう思った。

洗い甲斐があると言うか、何と言うか。それはそれは半端ない数の、使用済みの皿が山積みになっていた。

「お、ネイじゃなーか。どうした？」

困ったことでもあるのかい、と聞かれ、その表現にさっきのことを思い出す。

結局私は記憶喪失ってことになったままなんだよね。って言うても、もう弁解する気は更々ない。

人間ってのは学習するモノですからね。いい加減、何を言っても私が気を使ってるっていう風にしか捉えてくれないって分かっているもん。

それに、さっき思った。このヘンテコな設定は使える。だって、さっきのご飯もよく分からない野菜がいっぱいあった。

って、ことは、だ。

記憶喪失で全ての記憶が無ければ、きっと知らないことだらけでも変には思われないはず。

そう納得して、本題に入った。

『クーン魔道師さまが時間が無いっておっしゃるから、何か軽いも

のでも作って行こうかと思って。協力、してくれませんか？』

ゆっくり、見上げて懇願するように言った。

策士とでも何とでもお言い。私、腹黒いですからね！

「あ、ああ、もちろんさ。」

イエス！作戦成功ってことで、目的の実行はサクサク行きましたよ。



## 辛ロミリアとサンドイッチ その3

「何を作る気なんだ？」

そう、問題はそれなんだよねえ。一応記憶が無いってことになってるから、テキパキ作るのはきつとまずい。てゆーか、バレル。

そこまで記憶の所為にできるかが問題。エルさんが気にしない人だったらいいんだけど。

純粹に、私が記憶喪失だけど、体が覚えているから作れる、とか、純粹に信じてくれたら尚いい。

…よし、ここは気にしないで進めることにしよう。

エルさんをお願いして、パンと卵と野菜と油と酢を用意してもらったことにした。

「野菜は何があるんだ？あと、たまごは何のたまごを使う気だ？」  
ずらっと並べられたものに驚いた。すごい数。で、気が付いたことが一つ。

ここは城内の厨房、つまりたくさんのお肉が詰まってるってこと。

そりゃあ、種類を尋ねられるほど有り余ってますよね。

自分で選べって言われたらまずい。ってことで、先手を打ちましょ。

『レタスとトマトとキャベツ。あ、あとニンニクもあったら。それとハムとベーコンとチーズもあれば嬉しいですね。』

エルさんって本当にいい人だよ。言ったものを全て聞きもらさずに、すぐさま用意してくれましたから。

それに、拳動不審な私を疑いもせず… 心が少し痛みます。

でも、それにしたって… 用意した量が多すぎると思います。

トマトは一籠、ベーコンとハムとチーズは塊。油に至っては、瓶が一ダース。何人前よ？

それにしても、見かけないものだらけ。恐る恐る手にとって、黄色い葉っぱをかじるとレタスの味！ 白いのはキャベツ。

この液体、まさか… ほんのりピンクがかった液体は酢だった。

全部味は同じでも、色や形が違う。これから、食べる度に違う色のものを口にするのね。複雑。

「ネイ、だから卵はどれにする？」

そう言っで見せられたのは、さっきの量の多い卵。よく見ると、30種類以上あるみたいで、色や形が違った。手前にあったのを手にとって、とりあえず器に割り入れた。

『これ、黄身が緑！』

驚愕の事実！てゆーか、食べる気すらしない色だった。

「それは黄身じゃなくて緑身だ。」

うつそー、まっじー？ジョーダンやめてよっ！…いや、至極真面目だ。

エルさんは不思議な眼の色を隠しもしないで、私を見つめている。それからハツとして、愁いを帯びた目が変わった。

「ネイ、やっぱり記憶が薄れてるんだな。これからは何でも言え！おじさんが何でも相談に乗ってやるからな！！」

ハイ、って言いつつ、後ろめたくなって心の中で謝った。いくら腹黒い私にも、流石に良心は存在する。

本気で心配してくれているエルさんに、全てにおいて嘘をついてるのが心苦しかった。

そんなこんなで一段落ついて。

「ネイは黄身の卵が欲しいんだな？」

論点は元に戻った。

説明されたことによると、鳥の種類によって卵の中身の色が違うらしい。

黄身のものは原種に近くてあまり好まれないらしい。黄身が緑とかピンクとか黒とか、ましてや青とかより個人的には断然黄色がい

いと思うけどね！

ま、それは個人の自由だから一端置いといて。

『まずはこれを茹でます。』

それから、それから。やっぱりやることは嬉しくて。向こうに居た時よりも手早く料理を始めた。

卵の黄身と酢と油を使ってマヨを作る。

これはやっぱりサンドイッチには必需品だよね。

そう思っただけ混ぜていると、初めてこれを見た時のクーンさんたちと同じように、エルさんは不思議そうな顔をしていた。

『ちょっと舐めてみます？』

それに頷いて小指にちょっとだけ付けて舐めた。すると、みるみる表情が変わる。

「う、うまい！こんなに美味しいもの、今まで味わったことがない！

ネイ、どうやって作ったのか、もう一度説明しながらやってくれないか？」

その興奮とキラキラした目に圧倒されつつ、ちょっと面白かったから、企業秘密ってことにしといた。

今は時間がないし、また次回に乞うご期待！早くクーンさんに食

べてほしいから。

それからの作業はもっと早く進んだ。エルさんが手伝ってくれたしね。

ベーコンをカリカリに焼いて、ハムとチーズをスライスしてくれてる間に、私はパンにバターとニンニクを混ぜたものを塗って、フライパンで焼いた。

卵は潰してマヨネーズを加える。キャベツの千切りにもマヨネーズ。

本当はマスタードも入れて和えたかったんだけど、その、色が、ね。まさかの青だったからやめた。

青って！食べるものに青って！！食べる気失せないの？！

…とにかく、見事過ぎるお色でした。

ここまで用意したらサンドするのみ。私は三種類を考えてる。B LTサンド、たまごサンド、もう一つはハムチーズサンドのキャベツ入りだ。

あんまりにも熱い視線を送ってくるエルさんに、一種類ずつおすそ分けした。

さすが料理人。初めて見る食べ物に興味津々だ。手伝ってくれたお礼くらいにはなるよね。

そして、毒味係でもある。

酷いとか言う言葉は受け付けません。興味がありそうだし、私が作ったんだから毒の心配もない。

ま、食材が初なもの（見た目）だったってことで。

じーっとエルさんが咀嚼する音に耳を傾けて、感想を待った。

「う、うまい！今まで味わったことのない味だ！ネイ、料理の才能があるんじゃないか？」

ありがとうと言い、後片付けを簡単に済ますと、新しくお茶の用意をしてクーンさんの仕事部屋へと向かう。

その間もクーンさんの仕事時間の短縮方法を考えた。

でも、そんなに調理場から遠くなくて。そこにはすぐに着いてしまった。

朝とは違って人通りはない。ゆっくりと息を吸いこんでから、ノックして部屋に入った。

「ネイさん！元気にしていますか？」

開けた瞬間に満面の笑みが迎えてくれた。

『レークさん！』

なんでここにいるの？てゆーか、さっきのことを思い出すと、逃げてきましたね？懲りない人だなあ。

なんてちょっと呆れちゃう。どうせまた引つ張り戻されるか、怒られるかのどっちかだと思っただけ。

「実は頼みたいことがあるんです。」

さっきの笑みは未だ絶やしていない。ずっと思ってたんだけど、レークさんとクーンさんってホント対照的だね。

って、今はそんなこと考えてる場合じゃなくて。お願い、だっけ？

あんまり好ましくなさそうだけど、レークさんのお願いとあっちゃあねえ。聞くしかないでしょ。

同時進行でお茶を淹れることに許可をもらって、手を動かしながら耳を傾けた。

「私が神の声を聞くには、一度ネイさんに鏡盆に触れていただく必要があります。そうしないと、私は存在を感じられないのです。」

式典の準備が進むにつれ、誤魔化すことが難しくなってきました。このままでは事実が発覚し、〈最後の乙女〉の存在が疑われてしまうでしょう。」

そんな事態になっていたのね。無意識に難しい顔になってしまっ

その人物を二人の男性が眺めていることは、当の本人も気づいていない。

『それは、私の存在を隠すために必要なんですね？』

嫌だ、そう思う。

私はこの国の人の心を助ける存在かもしれないのに。でも、やっぱり私には何の力もないと思うから。

だから、その人たちの象徴として崇められるなんて、絶対に嫌だ。無責任な事、したくないし言いたくない。それを回避するためなら、協力は惜しまない。

心の中でそう決心し、レークさんたちに向き合った。

『…わかりました。ご協力させて頂きます。』

身体を綺麗に曲げて頭を下げる。これは女中としての礼じゃない。私自身の決心。



## 辛口ミリアとサンドイッチ その4

『それより、今時間ありますか？クーンさんにサンドイッチを作つて来たんですけど、たくさんあるのでレークさんもいかがですか？』

二人は初めて調味料を見た時のような顔をした。それのお陰で、説明が必要なんだと分かる。

『私の世界の食べ物です。いや、挟んだだけだし、料理って言うほどのものではありませんけど。』

クーンさんが食べる時間もないとおっしゃるので、手で掴んで食べられるものを用意しました。』

そこまで説明すると、どうぞ、と二人に促した。

本当はお米食べたいよね。でも、ここではパンしか見かけないし。

私みたいな東洋系の人がいるみたいだし、エルさんに聞いてあるか確かめてみよう。

今となつては本当に恋しいよ、焼き魚と米とみそ汁。日本人には必要不可欠な味だね。

『お口に合うか分かりませんが、そんなに食べれないものではないと…』

「うまいー！」

「おいしい！」

二人の声はほぼ同時。見たことないものを食べるのを訝しがってるのかと思いきや、もう口に運んでいたようだった。

二人と勢いよく食べてる。そんなにお腹空いてたのかな？

二人の食べっぷりに満足しながら、お代りの紅茶をカップに注いだ。

お皿はあっという間に空っぽ。清々しいほどの食べっぷりにまた満足した。

「ごちそうさまでした。」

例に習って、いつもの挨拶。日本の挨拶、定着してる？

どうやら食に関しての深い考えを、一言の言葉で言い表していることに二人は感心したらしい。

私にとってはもう当たり前のことだったけど、文化も宗教も違うし、珍しい考え方なのかもね。

手を合わせて挨拶している二人を、不躰にもじっと見てしまった。

…いかん、いかん。ここ数日でいい男を見慣れてしまった。

これじゃ目が肥えちゃうって。

「さて、私はそろそろ戻るとします。今頃部下たちが血眼になって私を探してる事でしょうから。」

分かっているなら、もっと早く帰ってあげて下さい。

さっきから聞こえないふりしてたけど…レークさんと呼んでる声がずっとしてる。

半分泣きそうな声色からしても、ずっと探してたんだね、ってちよっと可哀相に思えた。

「では、日時は改めて。また明日もこの時間に参りますので。」

そう優雅に挨拶を残すと、さっとクーンさんの仕事を後にした。

『レークさんの部下さんたち、可哀相ですね…』

思わず独りごちる。それに一言、気にするな、と言つ言葉が返ってきて、何事もなかったかのように、レークさんと呼ぶ部下さんの声は途絶えた。

心の中で部下さんたちにエールを送ると、目の前の紙の束に意識を向ける。

こっちもこっちで大変なのだ。…主にクーンさんが。

手伝えることがないか考えなくちゃね。

一度食器を下げ、その途中で気付いたことがあり、ミリアに紙と書くものを受け取って、足早にクーンさんの元へと戻った。

「…何を始めるんだ？」

忙しいはずなのに、私を気にしてくるクーンさん。それじゃ意味無いって。

だって、仕事を効率よく回す為に私がいるんだよ？なのに、私のことをいちいち気にしてたら、タイムロスでしょ。

ま、そうは言っても、いきなり何か始めたら気になるってものだよ。ってことで、説明しながら手を動かすことにした。

『この部屋を訪れる方々は、書類を自由に置いて行かれるようなので、あとで分けるのが面倒にならないように、あらかじめ置いて行く場所を指定するようにしようと思ったんです。』

「こうやって紙に省名を書いておけば一目で分かるでしょう？」

私は書類とにらめっこしながら、お手本どおりに名前を書こうとする。けど、どうも上手くいかない。

…うわっ、曲がった！

「…そうか。」

あ、今私の書いた字、ちらっと見ましたね！そしてあたかも見なかったフリするの、止めてください。余計に傷つく。

下手なら下手って言うてくれた方がまだマシだって。てゆーか、問題はペンと紙にある、と思う。

羊皮紙は凹凸激しいし、羽ペンがペン先がさけてるから自由に動いちゃう。

それに加えて、なんで読めるのか分からないこの国の文字はくやくにやしてるし。きつとこの国の識字率は悪いと思っちゃうほど、ヘンテコな字だ。

格闘することおそらく30分。私はようやく全ての省の名前を書いて、札のようにすることができた。

午前中に仕分けした分をそこに並べていく。

次は厚手の大きめの封筒に、これまた30分ほどかけて名前を入れていく。次はさつきよりもうまくかけた気がする。

「それは？」

伸びをしている私に、見計らったように声をかけてくる。

『これはチェックが終わったものを入れる封筒です。』

チェック？と聞き返され、英語は伝わらない事を思い出した私は、確認の事だと伝えた。不便だと思う。

だって、日本語英語って結構普及してたから、日本語に直すのって結構難しいんだよね。

『もし私が省への道のりを覚えたら、私が届けに行く事も可能になりますし、その方が回転率が上がると思うんですけど……』

最後の言葉を濁したのは、途中で自信がなくなったから。逆に迷惑かけるようなら止めた方がいいかも、って思えてきちゃって。

それに、クーンさんの無機質な目線の意味が気になった。

なんか、嫌だった？一度うるたえ、それからクーンさんを見る。視線があつて、一瞬で逸らした。

…目力強いですね。切れ長の目は、私を捉えて離さないようだった。

『あの…』

無言の空間がきつくて、自分から声をかける。でも、やっぱり視線を真つ直ぐ交わすことは難しかった。

「ああ、悪い。ネイが他のヤツに知られると思うと、少しイライラしてな。そうでなくてもこの城内でネイはもう有名人になっていると言つのに。」

驚いて視線を上にあげると、その瞳に捉えられる。さっきと同じように逸らすことはできなかった。

『お、おお、お茶の用意をします!!』

何とかそつ口にすると、そこから飛び出した。

何これ！心臓が、痛い。活発に働き過ぎ！

胸の辺りを押さえるように、昼休みの比にならないほどのスピードで廊下を駆け抜けて、侍女部屋に飛び込んだ。

「ネイさま！あれほど飛び込んではいけないと…ネイさま？」

その場へたり込んで心臓を押さえる。

冷静に慣れ、自分！

「お顔が真っ赤です。熱でもあるのでしょうか？」

心配してくれるミアを余所に、私は自分のことで精一杯。おでこに手を当てて熱を計ろうとしてくれるけど、原因は分かっている。

何だか知らないけど、クーンさんの言葉にドキドキしてるからだ。

『ねえっ、ミアアっ！クーンさんって天然タラシ？』

「は？」

例によって、私はミアに詳しく話す破目になった。

## 天然タラシ

現在、午後のお茶の準備をしております。

侍女部屋に飛び込んだ時、そう言う訳でちょうどミリアは私を呼びに行こうとしていたらしい。

「で、何があつたんですか？」

テキパキと手を動かして聞いてくるミリアとは違って、私は動揺を隠せない。

いきなり核心を突いてくるのがミリアらしいと言いますか、うん。遠回りする時間はないって分かってるんだけど。

『あの、ですね…』

そう切り出した。何で敬語なのか聞かれたけど、それはなんか雰囲気だよ。

『クーンさんのお仕事を手伝おうとして、書類を私が配達してはどうかと提案してみたんだけど…そう言ったらクーンさん、私を他の人に知られるとイライラするって。』

あの時の目があんまりにも真剣だったから、他意はないんだって分かってるけど、ドキドキしてしょうがない。



自分一人の動揺はそのせいだ。

「ま、仲がよろしいんですのね。あの方にしては、分かりやすい行動に出るには随分と早い展開です。」

納得したように頷いてますけど、ミリア、私良く分かんない。置いてかないでよ。

どう言つことか話してくれるように懇願すると、言葉を選ぶようにして話し始めた。

「そのままの意味です。ネイさまはそのまま受け取ればよいと思いますわ。」

『それって、私の存在が迷惑で知られたくないってこと?!』

ま、まさか、そんな風に思われてるとは!ああ、でも確かに、私ここに来てから迷惑しかかけてないし…

てゆうか、突然ポツと湧いて出た私に親切にしてくれ過ぎてるし、いい加減そう言う扱いしてる事に気づけよ、って話?

「何でそうなるのですか!」

さっきまで平静だったミリアは、いきなり声を大にして言った。

でも、そう言う結論に、なるでしょ?

『だって、私はこの城内じゃ有名だって言われたよ?この奇抜な格らしい格

好の所為でしょ？それに、ここに来てから迷惑かけてばかりだし…」

私の今の気分はどん底だ。迷惑かけないようにするにはどうするべきか、悩みどころ。

「その意味、私分かりますわ。」

ため息をついて、手を休めて私に向かって言った。

「ネイさま、ご自分の容姿についてどう思われていますか？」

自分の容姿？今そんな話だったっけ？

不思議に思いながらも、ミリアの質問に答えた。

『指して特徴もなく、平凡な感じ？あと、残念な足の短さしてるよね。』

この国の人たち、みんな背が高く足が長い。しかも、女の人たちなんかボン、キュツ、ボン、な体形してるから、私が最初早乙女って言われたのにも、今さらだけど頷ける気がする。

私の答えにやっぱり、と独りごちると、ミリアは口を開き始めた。

「ネイさまが1日で有名になられたのかは、たくさん理由がありますが、原因はその容姿ですわ。」

なに?!そんなに見るに堪えぬほど酷い?ニホンに居た時はそん

な事もなかったはずなだけど…

「的外れな事をお考えになっているところ失礼しますが、ネイさまはご自分の容姿に自信を持った方がよろしいですわ。」

大きく神秘的な黒い瞳はぱっちりしておられますし、艶やかな黒髪は印象的なほど美しいです。それに加えて透き通る白いお肌。

身長は平均よりも低いかもしれませんが、華奢な身体に細い手足。それなのにお胸はしっかりおありになって、総合的に見ても人の目をとても惹く、愛らしい存在です。

最初にクーン魔道師さまがおっしゃられたように、物語の森の妖精のように愛らしいんですもの。

クーン魔道師さまはきつと誰かにネイさまを取られるような気分になって、嫌なんだと思います。」

は、早口！一体どこで息継ぎしてたの、ってくらい早口だった。

「お分かりになりました？」

そう言われれば、頷くしかなかった。

「それで、“天然タラシ”とはどういうことですか？」

どうもこうも、そのままの意味。日本人にはかゆい台詞を真顔で言ってくるんだもん。

『妖精だとか、私の髪を梳くのが楽しみの時間だからそれを奪うな、だとか。』

なんか、こっつ、ここら辺がかゆくなる言葉をたくさん言われてるような気がしております、ですね…』

そう言っつて、私は自分の胸の辺りに手を置いた。

「まあ、クーン魔道師さまはそんなことをおっしやられてるのですね。意外ですわ。」

え？そうなの？私の記憶によりますと、しょっちゅうそんな事言っつてる気がするんだけど。

もしかしたら、ここの人たちにとっては普通のことなのかもしれない。ほら、外国人っぽい感じだし、お世辞を言うのが当たり前とか。

私がいちいち気にし過ぎてるだけなのかも！そう納得。

『そか、そうだよね！お世辞なんだからいちいち気にしてちゃダメだっつて！』

わはははは、と大声で笑っている隣。

ミリアが頭に手をやって、悩ましげにため息をついたのは言っつまでもない。そして。

「お気の毒に。」

そう呟いたのを、大声で笑っているネイが聞きとれるはずもなかった。

閑話？（前書き）

クーンさんサイド、再びです。

閑話？

はあ、と一つため息。

先程飛び出して行った少女に声をかける事も出来ないまま、開け放たれた扉を閉めた。

さつき自分の口から出た言葉は、らしくないもの。

何を言ってるんだ、俺は。まるでおもちゃを取られて駄々をこねる子供みたいだな。

自分を省みるとはこのことか、と妙に腑に落ちて、椅子に座り直す。目の前の膨大な仕事を横目に、どうしても思考が別の方へ行ってしまう事実がそこにはあった。

ネイと出会ってから、大分日が経つ。夜の時間はお互いのことを知るのには最適な環境だった。

それに、ネイのあの艶やかな髪にも触れられる。見た目だけでなく、細くてサラサラと手からこぼれる髪は、本当に触り心地がよく、いつまでもな出ていたい気分させるものだ。

ネイに楽しみを奪うなと言ってしまっただけ、気に入った時間。今日からそれがどうなる事やらと、いつもよりも進まない仕事に対してため息をついた。

とりあえず進めないと。今日からネイが屋敷に住むことになるんだ。夜遅くまでなど待たせてはおけんな。

気合を入れると、目の前のものに向き合った。

ハンコだけのものをすごい勢いで終わらせ、椅子の背もたれに寄りかかる。今日一日で大分疲れた様な気がしていた。

ノック音。それからドアが開いた。

「失礼いたします。お茶の用意をしてみました。一休みしてはいかがでしょうか？」

期待していた人物とは違い、もう一度背もたれに寄りかかる。普段ならば誰かに見せる姿ではないはずなのに、どうも力が入らない。

「どうかしたんだろうか？ 普段の俺ならばこんな醜態見せたりしないのにな。」

半ば自嘲気味に笑いを溢すと、調度いいタイミングでおかれたお茶に手を伸ばした。

「うまいな。」

「恐れ入ります。」

「…ネイはどうした？」

そう聞くと、さっそくですか、などと言われた。何か間違った事



を聞いたのだろうか？

「私が入室した際も、あからさまに残念な顔をしておりましたわ。」

そう…だったのか？意識していたわけではないのだが。

それよりも、元々は顔に出にくいと言われていたはずなのに、ネイが関わるとそうもいなくなるのだな。

そう思い、自分に呆れる羽目になった。

「ネイさまは現在精神統一をすると行って、固まってらっしゃいます。」

何かあったのか？

そう思っただけのつもりだったが、口にしていたらしい。

ミアリアの呆れた顔。いつもなら俺に向かってそのような表情はないはずの完璧な女官だ。

そんなに変わったのだろうか？

「ネイさまはクーン魔道師さまのお言葉で心を乱しておいでです。

それにしてもクーン様、ネイさまをあまりお苛めにならないで下さいまし。」

頼まれたようにそう言われても、身に覚えはない。

俺の言葉で心を乱す？何か変な事でも言ったか？思い返してみても、見に覚えがない。

分かることは、普段よりも格段に自分に正直になって、真っ直ぐ思った事を伝えていた、ということだけだ。

何がいけなかったのだろうか？

「でも、私は応援いたしますわ。ようやく心をお砕きになれる方に出会えたんですね。

しかし、私からの忠告をお許しくださいます。

…なぜ、いろいろばれている？

疑問に思うことばかりだ。俺は顔に出にくいとみんなから言われていたはずだ。

と、言うことは。…ネイか？

「お察しの通りですわ。」

何故表情を読まれている?!半ば混乱に近い。

「ネイさまのこととなると、本当に分かりやすいほどお顔に出ています。」

ところで、ネイさまのことですが、色恋に大分疎い方のようにです。

クーンさまのお言葉で、この辺りがかゆいとおっしゃられておりました。その時にすべてお話になって行きましたわ。

クーンさまの事も、ご自分の事も。」

やはり、ネイだったか。あれほど分かりやすく、素直な娘はいないからな。

「…それで？」

先を促す。それはネイが自分の事も話したと言っから。

「私が言えることはここまでです。」

その思いはミリアには知られていたようだ。すぐに口を噤んでしまった。

「それでも、私は応援している事をお伝えしておこうと。何かあれば全て伺います。」

ネイさまの内面を話すこと以外でしたら、何でも承りますわ。」

ミリアは丁寧な礼をすると、一度微笑んでから出て行くこととしてドアに手をかける。その途中でその動作を止め、俺に再び向き合った。

「ネイさまのはご自分の容姿に自信が無いようです。頓着がないとも言えますね。ですから、男性に言い寄られてもきつとお気づきにならないと思います。」

クーン魔道師さまのお仕事を手伝いたいという熱意は、是非ともお受け下さい。

あと、リルクスさまが言っておられましたが、ネイさまは一度クーン魔道師さまの剣さばきを見てみたいそうですね。」

どこで息継ぎをしたんだ…？

早口なミリアに驚く。

それよりも、ネイは自分の容姿に自信がない？

ありえない。あれほどまでに可憐であるのに。

気に入っている黒髪はもとより、あの黒い瞳は神秘的で惹かれる。吸い込まれそうになるほど透き通った純粹な色実を見せるそれは、とても大きくて愛らしい。

唇は果実のように艶やかで、赤い。

白い肌は触れると消えてしまうと思うほど儂く繊細で、華奢な身体は守りたいとつい思ってしまう。

身長が低く細いために最初は未成年かと思ったが、もう成人年齢は当に超している。

初めて砂漠でネイを抱き上げた時に、これほどまでに儂い少女がいるのかと思ってしまうほどだった。

男なら放っておかないであろうに、本人は自信が無いらしい。しかし、それは逆に役に立つ。

邪な思いは、そのまま顔に表れていた。当の本人は気付いていないが。

明るい性格、突っ走る癖。これは男から迫られても、天然攻防が期待できる。それに加えて色恋に疎いのであれば尚更だ。

そう嬉しく思いながらも、自分もその中に含まれていることに少し気を落としてしまった。

さて、どうしたものかと気にしつつも、目の前の仕事が終わらなければネイの髪に触れられる時間もやって来ない事を意味している。

…早いところ片付けよう。

そう思い、またネイのことで走らせるペンを止めた。彼女は成人している。あれだけ愛らしければ、元の世界に恋人がいたのではないのか？

…これは盲点だ。

そう気づき、もう一つ気になることができた。レークに二ホンのことを話してはいるが、一向に寂しがるどころを見ていない。

普通ならば、帰りたいと思うのでは？自分の故郷を思うことは当たり前前だ。

その行動を一度も見せないとは、一体どうということなのだろう？

何か事情があるのかもしれない。

今夜はこれを聞くことにして、そのためにも目の前の仕事を終わらせようと躍起になった。

おかげで扱ったのは無理もない。

閑話？（後書き）

彼が一番純粹でイイ奴なのかもしれません。

## 温かい家（前書き）

お気に入り登録が100件をこえました！  
ありがとうございます！！



## 温かい家

「よし、終わった。」

クーンさんの一言にホッとする。

今日は私が初めて働く日だったから、大分迷惑かけちゃってたから。終わらなかつたらどうしようかと思っただよ。

『いつもより早く終わりになったみたいですね。』

めまぐるしいほどのスピードだった。

私と言えば、ミリアにお願いして各省までの道のりを教わって、書類を届けたり、お茶を入れたり、そんなことで一日が終わってしまった。

もっと、役に立つことしないと。そう意気込んで、やる気を明日へ持ち越すことにした。

「ネイがいたからな。よし、帰るとするか。」

さっと立ち上がると、エスコートをするかのように私に手を差し出してきた。

と、こじで戸惑う。いや、日本人としては戸惑って当たり前だと思っ。

それに、私はクーンさん専属の女中だし…そのままフリーズしていると、ノック音、それからドアが開いた。

「ネイさまのお荷物をお持ちいたしました…何をなさっているのです？」

明らかに呆れたようなミアは、半眼で見してきた。そんな事言われても、と心の中で言ってみたものの、それはもちろん届くことはない。

一時停止したかのように立ち止まっていた私とクーンさんは、ここでさっきの動作を止め、再生された。

「外に馬車のご用意はできております。ネイさま、また明日お会いしましょう。」

そう言うのと、さっさと踵を返す。

ミアらしいけど、いくらなんでも要点しか述べなすぎじゃないですか？！って、混乱してるのは、さっきの微妙な空気の所為なんだけどね。

気を取り直して、何事もなかったかのように振る舞う。それはクーンさんも一緒。私は促されるまま馬車に乗り込み、お世話になるクーンさんの家へと向かった。

馬車は10分足らずで止まり、到着した事を伝える。

クーンさんに続いて降りようとすると、慣れないものの所為か、バランスを崩してしまった。さっきと同じように手を差し伸べられ

たけど、今度は素直にその手を取ることができた。

ほわー、いかにも、なお屋敷ですなあ。

古く、しかしどこか風情があつて、造りがしっかりしているお屋敷を、私は馬鹿みたいに感心して眺める。

ほら、都会に初めて来た人が、街並みとか電車に驚く、あれと一緒。今までの生活からしてみれば、あり得ない家の造り。

本気で、中世ヨーロッパに送り込まれたんじゃないかって思っちゃうほど。

「ネイ？」

馬車から下りてからいつまでも突っ立っていた私に、どうしたんだ、と声がかかる。

どうしたもこうしたも、圧倒されてるんデスヨ。とか、言える暇もなく、私は促されて中に足を踏み入れた。

広い玄関、吹き抜け、正面の螺旋階段。∴映画のセットみたい。

どうも現実味がない。緋現実的過ぎるのかもしれない。

本当に、ここで生活してるの？

見慣れた無機質な部屋の造りが面影もないそこは、壮大過ぎる作り物のように感じた。

クーンさんのお屋敷の中は、城よりも生活館が漂っている。豪華だけど豪勢とは言えないそこにある調度品の数々は高そうだ。使いこんであって、逆に好感を持つ。

それに触れてみたい好奇心に駆られつつ、目の前の人物たちによってそれは阻まれた。

「お帰りなさいませ。」

うわ、リアルメイド！城にもいたけど、こっちの方が本当にご主人さまに仕えてます、的な感じ。私もこれからのために見習わないと！

「クーンさま、こちらのお譲さまは？」

不躰にもじーっと見つめていると、視線を交わすことなくクーンさんに疑問をぶつけている。

私、そんなに不審者っぽいのかな？

何だかいたたまれなくなって、視線を下へ向ける。こつ言う時は大人しくして、クーンさんに任せておくのが一番だ。

「今日からここに泊ることになったネイだ。俺の部屋の隣が空いていたな？そこをネイに充てて、取り急ぎ湯あみの用意をさせてくれ。」

疲れているだろうから、と付け足された言葉に突っ込みたくなかった。

それはクーンさんの方でしょ、って。あれだけ働いといて、私の心配って。自分の休息も考えて欲しい。

「まあ、それならば先に申しつけておいてくだされば、お部屋をネイさまに合わせた可愛らしい飾り付けにできましたのに。」

シユリキスさまはそんなことをおっしゃられませんでした。この事はお知りで？」

「…私は知っている。」

…宰相さま?! どうしてここに居るんだろう?

一人訳が分からない私に、クーンさんは後で話すと耳打ちした。

「ネイ、よく来たな。自分の家だと思って寛ぐといい。また後日ゆっくり話すでしょう。」

私もネイの料理を食してみたい。その時はぜひ私も預かりはかりたいものだな。」

そう残すと、さつさとどこかへ行ってしまった。

…この世界の人たちはいつも急に現れて、いつもすぐに消える。心臓、びっくりしちゃうから。

でも、帰り方が見つからない今、ここでの生活を考えるべきだから、慣れなきゃいけないと思う。

…なんか、どっと疲れた。

それを顔に出さないようにしていると、さっきのメイドさんは私を部屋に案内してくれた。

『うわー…』

お屋敷についた時にも呆けちゃったけど、ここでもまた呆ける。

だって、広過ぎ…今までの価値観が崩壊しそう。

くるくる部屋を見回す。ここまでくると現実なんだって思うしかない。

「お気に召しましたか？」

私を面白そうに眺めて、そう尋ねてきた。一瞬ハツとして、一人じゃなかった事に気づいて急に恥ずかしくなる。私は動きを止めて、メイドさんに向き直った。

『あの…こんなに広い部屋を使わせてもらってもいいんでしょうか？』

「お嬢さまはとても謙虚な方ですね。」

さっきの笑顔と違って、優しい微笑み。私はおばあちゃんを思い出してしまった。今、思い出したくなかったのに。

私は俯く。そうするしか対処法がなかったから。

いつも見たくないものから目を背ける癖は健在らしい。こうやって私はいつも逃げています。何かを察してくれたのか、声色に少しだけ変化があった。

「もう少ししたら湯あみの用意が終わります。これからしばらく滞在するようなので、このお部屋も少し飾らせて頂きますね。」

『あつ、いえ、私なんかのためにそのような事をしていただくわけにはいきません。』

語尾が小さくなる。メイドさんの目力に負けたから、目をそらしてしまつた。

『ここに居させてもらえるだけで、十分なんです。』

私は多くを望んじゃいけない。他人の迷惑になるべくならないよう、他人の役に立つようにしなくちゃいけない。

「まあ、本当に謙虚な方なのですね。しかし、クーンさまの命ですもの。おもてなしさせてくださいな。」

でも、という私を止め、さらに話し出す。

「謙虚な事はお嬢さまの美德だと思います。しかし、他人の家に世話になる事を考えてみてください。」

おもてなしとはされるもの。それを受けなくては失礼にあたると言つ事を覚えて下さいまし。」

『…はい。』

私にとってその言葉は重くのしかかった。言われた事は的を射ている。私は、失礼なことをしてるんだってこと、考えてもいなかった。

それに…ここはあの場所とは違う。きっと、考え方だって違うはず。

「そんな顔はなさらないください。女中どもはお嬢さまがいらして下さったこと、実に喜んでおります。」

この家のお譲さまは早くに嫁がれてしまったので、物寂しく感じたいたのです。」

にっこり笑顔はやっぱりおばあちゃんを彷彿とさせた。

「男だらけではむさくるしいか？」

ひ！急に声が？！

と、思ったら、クーンさんが入口に立っていた。

いつの間に来たんだろう？

着替えたらしく、公務の時よりもラフな格好。それでも現代的なものとはだいぶ違っていた。

「いいえ、そのような事は申しておりません。ただ、楽しみが増えた、と。」



一触即発？

主従関係が成り立っているはずなのに、どうも火花が散ってるように見えた。

腕を組んでいるクーンさんは、若干威圧的。一方、女中さんは相変わらず微笑みを浮かべたままだ。お互いに纏っている空気に温度差がある。

どうしたものか、仲裁に入るべきか、と考えていると、一言声をかけて女中さんは出て行ってしまった。

もちろん残されたのは二人。クーンさんはお風呂に入るように言うのと、一時間ほどしたらくると残して出て行った。

部屋に、今度は一人ぼっちで残る。

とりあえず荷物を抱えてソファアに座っていると、奥の扉から女中さんが数人出てくる。どの人も30代ほどで、やわらかい笑顔を浮かべているから好印象だった。

「湯あみのご用意ができました。」

私はい、と立ち上がる。そこへ向かうとその人たちは笑顔を浮かべたまま、その場を動かない。

どいてもらわないと入れないんだけど…？

え？と思っていると、一瞬で服を剥ぎ取られた。

『えっ、ちよっ、まっ……！』

止めようとした声を遮られ、お手伝いしますの一言。ひ、一人で入れますー！

温かい家（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

## ネイの心、クーンの思い

…疲れた。お風呂に入ったはずなのに、疲れた。

一人では入れるのに、花の浮かんだお風呂に入れられ、隅々まで洗われた。良い匂いがするから、その点に関しては嬉しいけど、死ぬほど恥ずかしかった記憶しかない。

髪にもなんか塗り込もうとしてたけど、クーンさんがいつも乾かしてくれる事を述べたら、違和感の残る笑顔をして早々に切り上げて行った。

全て済んだことの安心感から、白いキャミワンピのようなものを着せられてるけど、そんな事を気にすること無くソファーにだれる。身体がぼかぼかする所為か、うとうとしてきた。でも、クーンさんが後で来るって言ってたから、まだ寝ちゃいけない。

そう思っではみたものの、ついうとうとする。夢半ばになったとき、ノック音が聞こえ、いけないと思って姿勢を正して返事をした。

「悪い。起こしたか？」

いえ、と一応。顔から半分寝たことなんてばれてるんだろっけど、それでもやっぱり一応。

当たり前のように私の所へやってきて、いつものように髪を拭っ

てくれる。これにはホツとした。

さつきまで、3、4人に囲まれてお風呂に入ってた。恥ずかしい  
ったら無い。

でも、クーンさんに髪を乾かしてもらうのは、最初は恥ずかし  
かったけど、今は心地いい。眠りを誘う心地よさを押さえながら、今  
日も話をした。

「ネイ、聞きたいことがあるんだ。」

神妙な面持ちであろうことが、雰囲気からして分かる。私は何を  
聞かれるのかと身構えた。

「ネイは…どうして元の世界に帰りたいと言わないんだ？」

その言葉はずっしりと胸の奥に押し掛かった。

それは今まで黙ってきたこと。…触れられなくなかったこと。

俯いて、何も言えない。それは私の黒い部分だから。

『聞いたらきつと、私のこと嫌いになります。』

だから、聞かないで欲しいと願う。ここに来てからの私を、今の  
私を知ってくれてる人だから。私を嫌って欲しくない。

嫌われたら、今度こそ立ち直れない。

「何を聞いても、俺がネイを嫌いになることなど有り得ない。ネイ

こそ、俺の話の聞くと、きつと俺を嫌いになるぞ。」

話したくなければ話さなくていい、と言われ、迷う。

私を嫌わない？

…でも、それは“絶対”じゃない。

だけど、私もクーンさんの事情、気になってた。昼間のおデブさんが言ってた事もあるし。

『私が私のこと話したら、クーンさんもクーンさんのこと教えてくれますか？』

それにOKを貰えたから、私は正直に話すことにした。

『私…いらぬ子なんです。』

つい最近までのことだったんだけど、何とかその輪から脱した。それでも、関係性は切れないから、この世界に来れたこと、実は心から嬉しく思ってる。

『私の両親、離婚してるんです。その時、どっちが私を引き取るのか言い争ったの。』

…二人とも、私のこといらぬから。お互いに押し付け合って、別れてからもずっと喧嘩し続けてました。

結局、父方の祖父母に引き取られました。』

そこまでは辛かったけど、捻てた訳じゃない。おじいちゃんもおばあちゃんも優しく、私は両親のどちらかに引き取られなくて良かったって思ったし、今まで生きてた中で幸せだった。

でも、問題はその後のこと。

『祖父母が事故で亡くなって…私はまた行き場を失いました。結局父に引き取られたんですけど、それは世間体があったからで。

本当は新しい家族がいたから、私は邪魔者だったの。』

ここまでくると、自嘲気味に笑うしかない。泣かないようにするために、そうすることで紛らすのが一番だから。

『高校生になって、家に居辛くなってバイトばかりして。早く家を出たくて、遠くにある大学に合格を貰って、家を出たんです。』

いつの間にか髪を拭っていた手は止まり、頭をなでる動作に変わっている。

クーンさんは何も言わずに、ただそうしてるだけだった。それに身を任せるように、私はクーンさんの胸に背を預ける。体温が、少しだけ私の心をほぐしてくれる気がした。

『非行に走らなかつたのは、多分心のどこかで期待してたから。でも、やっぱり私はいらぬ子に変わりなかつた。』

昔から、何をするのも苦にならない性質だったんです。勉強も、運動も、努力とかしなくても簡単にできちゃうから、不器用な妹と

比べる対象に必然的になる私は邪魔者。

妹は慕ってくれたけど、あの人たちは自分の娘より何でもできる私が嫌いだったみたい。』

あの時の目。私は何をしても褒めてくれなかった。だから、途中で諦めたの。半分血はつながってるけど、赤の他人。

腹違いの妹だけど、年の離れた知り合いの女の子。

ただそれだけの関係で、私は単なる居候。そう考えるようになってた。

『そんな人たちと縁を切りたくて、遠くの学校に入ることを決めました。離れたいと思って遠くへ逃げたけど、知らない世界に来たんだったら、もう会う事もないから。だから、帰りたい、って言わないし、思いもしてないんです。』

ここまで言っつて、やっぱり根っ子の部分はいつまで経っても変わらないな、と思っつた。

クーンさんは何も言わない。逆に言われなくて良かったって思う。それに、何を言うにしても困る内容だつて分かつてる。

次は俺の番だ、というクーンさん。だから、俯いてた顔を上げて、クーンさんを見た。

「宰相殿がここに居たことに驚いていただろう？」

その問いに、正直に頷く。クーンさんは、私の頭をなでる手を休



ませること無く、口を開きだした。

「俺は…宰相殿の養子だ。」

随分気心が知れた仲だと思ってたけど、そう言うことだったのか、と思った。思っただけで、口は挟まない。

「俺の元々の名はクーン・リッキンデル・デューク。現国王陛下は俺の腹違いの兄にあたる。」

?!

ってことは、だ。

…クーンさんって、ひょっとしなくても王族の血が流れてるってこと？

うん、なんか分かる気がする。纏ってる空気とか、品の良さが滲みだしてるから。

「母上は身分が低かった。先王は単なる遊びだったみたいだが、母上に手を出した。そんな関係だったために、先王は俺の認知を拒んだ。」

私と、少しだけ似てる。親に拒まれた時、クーンさんは何を思ったんだらう？

「母が亡くなってから、俺を引き取ったのが王家の親せきにあたる宰相殿だ。幸い兄上との仲は悪くなく、俺は兄上の役に立ちたいと

思って今の役職にこぎ付けた。

実際は余計な仕事や貴族たちの小言で精一杯だが、これから努力して、兄上の片腕くらいにはなってるつもりだ。」

…すごい。私は捻てるっていうのに、クーンさんは目標すら持つてる。

さっきクーンさんが私の話に触れなかったのと同じように、私もクーンさんの話には何も触れなかった。

それから他愛もないことを話したら、いつの間にか寝ちゃってみたい。朝目が覚めたら、ベッドに横たわって布団がすっかりかかっていた。

きつとクーンさんが運んでくれたんだよね。お礼、後で言わなくちゃ。

さて、どうしたものか…

今日も一日頑張るぞ、と意気込んだはずなのに、その途端から力が抜ける。私は昨日初めてここに来たわけで。何がどこにあるか、とか、昨日来てたカスタムメイド服がどこにあるのか、とか。諸々知らない。

つまり、どうしていいのかわからないってことにつながる訳だ。  
と、タイミング良く昨日のメイドさんがやって来た。

「よくお眠りになられたようですね。本当ならばもう少しお休みしていただきたいところですが、クーンさまと共に城へ行くようですから、失礼ながら起こしに参りました。」

私なんか敬語使わなくても、って思うけど、おもてなしは受けるもの、だから。私はありがとうございます、と礼を取った。

顔を洗って着替える。やっぱりカスタムメイド服は目立つらしく、気にしていた女中さんにどう作ってあるのか教えて欲しいと頼まれ、それに了承した。

そのまま誘導されて大広間へ。

朝ごはん、らしいです。

でも！やっぱり広すぎ！

みんなでご飯を食べるには、少々（大分）広い部屋。パーティーを催す際に、この位の広さがなきゃダメなんだってさ。貴族って大変なんだね。

お誕生日席に宰相さま、その向かいにクーンさん、右手に奥さまがいる。私は失礼ながら、空いてる席に腰を下ろした。

「ネイ、よく眠れたか？」

おはようございます、と言ってから質問に答える。挨拶、大事だからね。最優先。

『はい、とても。』

宰相さまは満足げに頷き、奥さまを紹介してくれた。

奥さまは、まさに貴婦人、そのもの。微笑みも言葉遣いも、所作も。全てが柔らかく優雅。

「クーンが女性を連れてきたと聞いて、とても驚きましたけど、とても愛らしい方で嬉しく思いますわ。」

クーンさん、モテそうなのに、女の人連れて来たこと無いんだ。

あ、でも、生活してて中世ヨーロッパ的な雰囲気（映画情報）だったから、私のいた現代とは違って、簡単に交際するってわけにはいかないのかもね。

「これからも、クーンをよろしく願いますね。」

頭を下げられて私もつられる。

『私、クーンさんにお世話になりっぱなしなので、少しでも力になれるように頑張ります。』

頭を上げるように声をかけられる。だから、ゆっくりと上げると、微笑み続けている奥さまがそこにはいた。

「母上、公務の時間が迫っています。ネイを苛めるのはそのくらい

にしてあげて下さい。」

いつの間にか宰相さまとクーンさんはご飯を食べている。いつもクーンさんが私の所へ来てくれていた時間を考えると、確かに時間ないかも。

私は慌てて手を合わせてから食べ始めた。

「まあ、私は苛めてないわ。心外ね。情けない息子のことをお願いして何が悪いのです?」

あら?意外とおっとりしてないかも。

ズバズバ言う奥さまに、クーンさんはたじたじだ。面白いもの見れた気がする。

奥さまに口撃されているクーンさんを見て、私と宰相さまは目を合わせて笑った。

どつやらいつもの事らしい。

一方的な口論になっているその横で、私はのんびり宰相さまとお喋りしながら朝食を取ることができた。

## 口撃

『奥さま、意外と毒舌なんですね。』

馬車に揺られながら、ぐったりしてるグリーンさんに話しかける。朝から随分とお疲れなようだ。

『疲れているようなので、後で甘い物でも用意しますね。あ、それと、今日のお昼ごはんも用意しますか？』

「甘いものはあまり好きではないのだが…」

甘いものが好きじゃない?!ダメダメ!疲れてるんだから、少しでも糖分とらなくちゃ。

「昼は任せる。ネイの作るものは面白いし、美味いからな。」

そう言われて嬉しくなって、いつぱいの笑顔でハイと答えた。

昨日、あんなこと話したのに、変わらない態度。嫌われてない気がして嬉しかった。

城に到着してまず出迎えてくれたのはミリア。ミリアに連れられて昨日の女中部屋へ。そこに居たマーサさんは笑顔で迎えてくれた。

「昨日はよく眠れたかい？」

『はい。』

それはよかった、と言い、クーンさんに早速お茶を持っていくように言われた。

カチャカチャを立てながら用意していると、今日も陽気なエルさんが鼻歌交じりで登場。朝の挨拶を交わしたのに、まだそこに留まって私を気にしている。不思議に思っていると、今日もクーンさんの昼食を作るのか尋ねられた。

「ネイの料理は興味深いし勉強になる。是非作るところを見せてくれ。」

なるほど。マヨのことごまかしちゃってたから、そりゃ得体のしれないもの作る人が気になるのも仕方ないよねえ。

『了解しました。また後ほどここに参ります。』

カラカラとワゴンを押して向かう途中、やっぱりカスタムメイドは目立つみたいで、じろじろ見られたけど、たじろぐことなく丁寧に礼をとってから進む。

世の中気にしなくていいものは気にしない。人の視線なんて一番気になるけど、文化が違ふところに居るんだもん。気にしたら負け。

視線なんて素知らぬふり、を通してクーンさんの執務室に着くとお茶を丁寧に淹れる。

仕事前だもんね。

美味しいお茶で心を落ち着けてからの方がいいはず。

湯気の上がる紅茶を持っていき、優雅に呑むクーンさんを眺める。

ほんと、いい男。恋人の一人や二人、いてもおかしくないだろうに。

クーンさんがお茶を飲み干そうとしたその時、ノック音が広い部屋に響き渡る。どうやら仕事の時間みたい。

私は急いでカップを下げる。扉は返事を待たずに開いた。さつきより慌てて昨日用意した机に着く。説明を任せてもらうことになってたから、ぐっと身構えた。

『おはようございます。』

丁寧にまずお辞儀。次に頭を上げて、笑顔を浮かべる。

『各省の名が書いてあるカードの所に書類を置いていただきたく思っています。クーン魔道師さまに説明が必要な方は、そちらへお並びください。』

何ら訝しげな顔をされる。

うん、そんな気はしてたから、覚悟はできてる。だから、私は笑顔を決やすことなくそうするように促す。それでも反発する人は必ずと言っていいほどいるわけで。

早速その声が上がった。



「なぜ我々がそのような事をしなければならぬ。」

おおっと。

一際高そうな生地で作られた服を見に纏っているおじさんに、お小言ちようだいしましたー。

あの人はきつと、身分が高い人。

近づいてきて私の前に立ち、じろじろと頭のとっぺんからつま先まで見る。

…省の名前、見えた。だからこそ、この人がなんでこんな態度を取るのか、ここで納得した。

曲がりなりにも、クーンさんは省をまとめる筆頭くらいの地位に居るはず。若いからと言って、失礼な態度を取っていいはずがない。

昨日、ミリアにいろいろ聞いというて正解だった。

この省の人は元々議会に居た人が多く、王族に反発気味。今の王に代替わりした時に、失脚させられたのを根に持つてるんだって。

…自分が悪いことしたくせに。

いかん、いかん。

自分の黒い感情を心の引き出しに収めつつ、笑顔を引きつらせないように気を引き締めた。

『失礼ながら申し上げさせていただいてもよろしいでしょうか？』

そう言うてから、さらに続ける。言ったのは建前。返事を待たないまま自分の思った事を述べていく。

反論させない勢いで。

『クーン魔道師さまが毎日膨大なお仕事をなさっている事はご存知ですよ。』

あのお方は大変勤勉な方で、自分の持てる力、全てを使ってこなそうとするお方でいらっしやいます。

それ故に昼食を取る時間も惜しんで働いておられます。』

「だが…」

喋らせませんが、何か？腹黒万歳ですよ。

こんなことで自分の性格の悪さが役に立つんなら、露見するのだから恥ずかしくない。だいたい、私が言ってるのは正論だもん。それを盾にするくらいの事はできるはず。

『立場的にそう言う方なのは存じ上げております。』

しかし、どんなに努力を惜しまず、働き者である方も、人間は人間なのです。

体力的にも精神的にも、必ず限界があるのです。それに、クーン

さまは書類調整のお仕事に留まるだけでなく、騎士団長としても働かなければなりません。それにも関わらず、現在はそのお時間がございませぬ。

夜中までかかって机に？り付き、翌朝には誰よりも早く登城して執務室に居らっしゃられる。食事もままならず、睡眠もままならない。

それでもこのお方が倒れないとでもお思いでしょうか？」

ぐつと押し黙る顔を満足して見つめる。その間も笑顔を絶やささない。

後ろの人、引かないで！。私は事実を述べてるだけだから！。

「…それでも、それが仕事というものだろう。」

まだ言うか。まだ言いくるめられなくちゃ気が済まないのか？それか、それなら受けて勝つのみ。

またにっこり笑って続けた。

『先程も述べましたように、クーンさまの仕事は机上のみではないのです。』

机に縛り付けられている時間を短縮できれば、クーンさまの身体を労わる時間が出来ますし、さらなる騎士団の強化にも希望が望めます。

それに、夜中に届く書類はそちらにとっても好ましくないのでは

ないでしょうか?』

訳が分からん、って顔すんな。いや、あんたは帰るんだろうけどさ。他の人たちは納得してくれてるみたいだから、夜遅くならない方がいいと思ってるんだって。

『ちょっとしたことでも時間を取られない方がいいのです。何事も効率が大切ですから、今私とこうして言い争っている時間も勿体ないとは思いませんか?』

そう言った瞬間に、人々は並んで書類を置いて行ってくれる。一方、私の口撃を受けたおじさんは顔を真っ赤にしている。けど、私は素知らぬふり。

そして腹黒いですから、追い討ち掛けますよ、純粹っぽく、天然っぽく。

『書類、お預かりいたします。それと…出過ぎたことを申しました。どうかお許しください。』

書類を受け取って頭を下げる。おじさんはさらに顔を真っ赤にさせて、出て行ってしまった。

あら、もっと怒らせちゃった?…ま、いいか。

そのことで周りの人はより一層機敏に動き始め、書類を重ねていった。

書類が積みまれていく机を見ながら、クーンさんが説明を受けたも

のを封筒に入れる。後で分かりやすくするために。

いつもよりも一時間も早く列が片付いたとクーンさんが言った時、ちよっとだけ嬉しくなった。

「その封筒は？」

ああ、これか。

『届ける書類用に作ってみました。一定量が済んだら、説明が必要なもの以外は私が配達しますね。』

ここまで用意して、やる気満々！なのは、よかつたんだけど、もう書類の分類が済んでるから、やることなんて無くて。

『…ヒム。』

思わず独りごちる。横目でペンを走らせているクーンさんを見て、嘆息した。

『クーンさん、何かお仕事ください。』

邪魔して悪いけど、暇すぎる。

昔から生徒会、バイト、勉強と忙しい事に慣れてたから、やることがないとどうも落ち着かない。

一昨日まではレークさんと話してたから、一応はやることがあっ

た。でも、今はこの部屋にはクーンさんと私しかいない。

それに、集中して仕事してるのに、雑談なんかしてうるさくするわけにはいかない。

『やることがないと落ち着かないんです。』

良く言えば働き者、悪く言えば落ち着きがない。

足をじたばたしてみる。さっき、クーンさんに椅子に腰掛けてるって言われた。本当は女中だからって断ったんだけど、許されなくて座らせてんだよね。

…思ったけど、クーンさんって過保護？ってな訳で、手足がフリーな私は、とりあえず軽く暴れてみることにしたんだけど…

そんな事は敢え無くスルーされた。

「俺としては、届けに行かせるのも好ましくないんだが…」

え！これ以上やること奪うんですか？！やってられないよね、私。てゆーか、迷惑だったのかな。

そう思って質問してみても、そう言うことじゃないと言われて終わりだった。なのに、渋い表情が目には焼きつく。

どう言う意味なんでしょう…？

## 異文化

結局やることなくてクーンさんの執務室を後にした。

とりあえず、女中部屋に向かう。もしかしたら何かやることもあるかもしれない。と、思ったのに。

「ネイさまにやらせるなんて、いくらなんでもそれだけは聞き入れられません！」

頼みの綱だったミリアに、一蹴された。どれだけ懇願してみようとも、頑ななミリアは折れてくれない。

最終的に、私は客人だからと断られる羽目になった。

「今日もクーンさまの昼食を作るおつもりなら、早々に厨房へ向かわれたらいかがでしょうか？」

ミリアのアドバイスは私を閃かせたけど、どうもここで疑問。

『私が行ったら邪魔にならないかな？』

そうでなくても城内中の人の食事をあそこで用意してるらしいんだもん。流石に私的欲求を満たす為に使っちゃダメでしょ。

とか何とか言いつつ、昨日は使っちゃってるんだけどね。

「いつも紅茶を用意している場所なら、使用は可能ですよ。器具と

材料さえエルさんに用意してもらえれば、何とかなるはずです。」

…エルさん、何者？てゆうか、厨房で仕事しなくてもいいの？

不思議に思っただけで訊ねると、続けざまに意外過ぎる答えが返ってきた。

「エルさんは料理長です。」

なに?! そんな偉い人だったの?!

『どうしよう! 私、すごい気軽に接しちゃってた。失礼過ぎだよな?』

「大丈夫です。」

焦る私とは裏腹に、ミリアは至って冷静。

「エルさんは決して私たちを見下したりいたしません。“様呼びはやめてくれ”とおっしゃられて、今ではみんな気兼ねなく話すことができる、とてもよいお方です。」

そう、なんだ。うん、そっか。なんかそんな感じだよな。見ず知らずの私にまで気さくに話しかけてくれたような人だったし。

でも。

『…料理長パシらせちゃった……』



一番のしこりはこれ。

昨日全てを用意してくれた事を思い出す。あれは流石にひどかったよね。

“パシらせ…?”と呟くミアに、こき使う事だと教え、うなだれる。確かに知らないものだったり、場所だったりしたし、無理もないんだろうけど…

「エルさんはネイさまの料理の興味がありませんし、むしろ手伝わせてほしいと言つはずです。」

そう言われて、厨房まで押しやられる。エルさんと呼んでおいて、ミアは楽しそうに去って行った。

「今日は早かったな。で、何を作るんだ？用意するものは？」

キラキラした瞳にさっきの話を重ね合わせてみても、どうも料理長には見えない。

そんな失礼極まりない事を考えながらも、やることはやろうと思つて、腕まくりをした。

『うーん、何作るう…』

全く持って何も考えてなかった。でも、今日は昨日よりも時間できそつだし。がつつり食べる時間くらいあるでしょう。

なんて、無責任なこと考えたりして。それだけじゃなく、ちゃん

とお腹いっぱい食べて欲しいって意味もあるんだけどねえ。

それに、さつきミリアからの言伝で、お昼はレークさんも一緒だ  
って言ってたし。

うん、軽食じゃなくて、普通のご飯にしよう。

『エルさん、マヨネーズの作り方、知りたいですか？』

次の瞬間のエルさんは、まるで小さい子供みたいに大きく頷いて  
いた。

そんなに首振ったら、もげるよ？と思いつながら、昨日とほぼ同じ  
ものを用意してもらって、順を追って説明をしていると、やっぱり  
素人の私と違うエルさんは、料理人の手つきを披露してくれた。

『これ、生野菜にも温野菜にも合うんですよ。あとは炒め物、肉で  
も魚介類でもどんと来い、です。』

ほう、と目を細めて考え込んでいる。私は構わず先に進むことに  
した。

鍋で骨付きチキンを炒め、水と野菜とハーブを加えて煮込む。だ  
けど、大雑把な料理に見えたのか、意識をこちらに戻してきたエル  
さんは心配そうにしていた。

「ネイ、本当にそれは大丈夫なのか？」

それ〓骨。こんな料理方法は未だかつて見たことがないらしい。

『ここから良い“ダシ”が出るんです!』

「だし?」

もう!なんでこんなに料理基準が高くないの?!

『ダシは料理の基礎を支えるものです。これが美味しくなくっちゃ、味に深みが出ませんから。』

とか何とか言いつつ、最近見た某テレビ番組の何とかタロウさんの作り方を思い出していた。

ホント、テレビって便利だよねえ。

野菜やミンチ状の肉を練っていく。つまりはハンバーグなんだけど。

こっちでは、肉は単にステーキとしてしか出されないらしい。勿体ないよね。いろいろと食べ方があるのに。

今度、鶏団子が入ったお鍋でも作ったら、エルさんは驚いてくれそうだな、なんて、不敵にほくそ笑みながら企んだ。

今日は残念ながらソースもケチャップも置いて来ちゃったから、塩コショウのみ、って思ってたんだけど。

エルさんが、サルーテとかいう、こっちの調味料をかけたらいいと教えてくれた。

味見してみたら、美味しい。

こんなのがあんなら最初から使えばいいのに、って思ったけど、どこかの民族のものだから、お貴族さまたちは好まないんだってさ。

食べ物にまで上流とかそんなモノ押し付けなくてもいいのにね。美味しいものは美味しいって言えばいいじゃん。

こっちはチーズもあるって分かったんだけど、これもまた民族のもの…後は省略。ハンバーグにはチーズが合う。高カロリー万歳な感じだけど、美味しいものに目がない私には、関係ないよね。

お昼にはまだ早いから、それはひとまず置いて、今度は甘味に移る。食材は何となく揃ってそうだけど、食感が珍しいだろうと思ってプリンを作ることに決めた。

とか思ってたまご割ったら失敗。赤いの開けちゃったから。赤い卵は、何ともグロかったけど、温めたミルクを入れた時点で、ピンクになって安心した。

普通の中には、カラメルを下に入れた。これなら、甘いのが苦手だって言ってたクーンさんにも食べられると思って。もう一つは、昨日迷惑をかけた人たちに渡す分。これは、上に砂糖をかけてプリュレまがいのものにしよう。

言葉が悪いのは、私の表現力のせい。まずいものは作ってない、はずだから、安心して欲しいところだ。

蒸し焼きにするようにオープンに入れ、今度はスープへと意識を向ける。

灰汁を取って、ハーブやら野菜やらを取り除く。新しく切った野菜を入れ、塩コショウで味を調えた。

うん、コンソメスープの素を使わないで初めて作ったけど、なかなかのよきだ。野菜が柔らかくなるころには、いい匂いが辺りに立ち込めていた。

「…良い香りだ。」

覗き込んで、興味津々な様子を隠しもしていない。

『味見、しますよね?』

いいのか、って聞いてきたけど、どう見てもそうしてみたっていう顔に書いてあるし。それに、私も味見くらいしなくちゃ、今回は保証できないしね。

小皿に少し掬うと、私とエルさんは同時に味を見る。…少し薄いかな、と思って塩を足し、もう一度味見をしてみると、今度はちょうど良かった。

「…ネイ、こんな上手いもの、初めて食べた。」

呆然としているエルさんに、この国の料理の発展がどれほどなかったのか、確信を得た。

思ったけど、（この世界の人って言うってもまだ数人にしか会ったことないけど）この人は新しい事に挑戦することをしない。それは、私にとっては一つの怠惰に思えた。

『何事も挑戦することが大切ですよ。未知の発見ほど面白い事はありません。』

…私のいた世界では、宇宙や過去に対して以外はたくさんの方が説明されて、子供たちはそれを学んでいました。それじゃ、つまらない。分からないことが分かるようになるのが、楽しい事なのに…』

「ネイ？…思い出したのか？」

は！そうだった。私、記憶喪失（設定）だった！

今さら難しいだろうと思ったけど、何とか濁す。

『私、今なんて言いました？』

言い訳、きつかったよね。どうしよう、なんて考えていると、タイムマーが鳴った。

…助かった。私は急いでオーブンを開けると、天板を取り出して、固まり具合を確認。そして、満足。後は冷やすだけだ。

けど。

『エルさん、これって冷やせますか？』

「ああ、厨房の方に、少しだけだが、魔道を使えるものがある。冷却の魔道をかけてもらえば、すぐにでも冷えるさ。で、それは食べられるのか？」

プルプルしているその動きを訝しげに見ている。それでもその動

きが不思議なのか、面白そうにも見える。

てゆうか、食べ物で遊ばないですよ。

『そうですよ。デザート、いや、おやつですね。クーンさんが随分とお疲れになっっているようだったので、糖分を取っていただこうと思っただけです。』

あれだけ働いているのに、私の面倒まで見て。尚且つちゃんとした食事を取らなくちゃ、いつか、いや、近いうちに絶対に倒れる。それを回避することが唯一私にできること。

そう使命感を勝手に持った。

「…ネイ？」

一人の世界から呼び戻されると、そこには知らないおじさんがもう一人。いつの間に来たんだろう。

「で、どのくらい冷やすんだ？」

訊ねられて、困ってしまう。基準って言うても、ここの温度の単位なんて分かんないし。なんて伝わないよね。

しばらく考えて、それから。

『抽象的な言い方になっちゃうんですけど、山に流れる川の水、くらいですかね。』

室温よりも全然冷たくて、食べる時にひんやりするくらいがいい

んですけど…伝わりましたか？』

おじさんにおずおずと言った。自分の表現力の無さに嫌気がさしたのは。言うまでもない。あんまりにも言葉があいまい過ぎたから、心配だった。

「大丈夫ですよ。」

そう言って、にこやかな表情を浮かべたまま、冷却の魔法をかけてくれた。

魔法って便利！見た目は変わってないけど、器に触れると冷やっとしていた。



## 異文化 その2

『あのー……』

調子に乗った私は、ピンクのプリンの表面に乗せた砂糖を焦がして貰った。本当に便利だ。

って、貴重な力をこんなことに使うなんて、やっちゃいけないだろうけどね。

反省してるのかしていないのかはさて置いて、私は感謝を行動で表した。

『お二方とも、これ、たくさん作り過ぎちゃったんで、よろしければお一つどうぞ。』

手伝ってくれたお礼。これがお礼つて言うのも、料理人の二人には失礼な話かもしれないけど、今の私にできる事はこれだけだから。

「いいのか？実はさっきから、どんな味がするのか気になっていたんだ。」

昨日のサンドイッチ、今日のスープの如く、エルさんは目を輝かせている。それを見て横に居るおじさんは、もっと優しく微笑んでいた。

「色が違うが、味はどう違うんだ？」

そっか。赤い卵なんて、使うの初めてだったから、味のこと考えるの忘れてた。赤いからって、辛い訳ないよね？

恐る恐る聞いてみたら、たまごの味自体はあまり変わらないけど、赤いほうが濃厚なんだとか：色は私的には受け付けられないけど、どうやら味の保証はされてるみたいだ。

『黄色い方は、下にほろ苦いカラメル、というものを入れています。クーンさんがあまり甘いものを好まないと言っ事で、食べやすいように甘さを控えてあります。』

もう一つは、表面の飴を割って食べていただく形になります。こちらには下にカラメルが入っていないため、少しばかり甘くなっています。』

私の説明を、エルさんはふんふんと腕組みをして聞いている。おじさんも興味を持ったのか、二つを見比べて、私の見慣れた方を手に取った。

「…ネイ、両方食してみたいのだが。」

迷いに迷ったのか、言い辛そうにそう言ってきた。

「相変わらず、料理長は食い意地が張っておられる。」

おじさんはやっぱり笑顔。しかし、言葉には確実にからかいが含まれていた。年の功ってやつかな。

「ち、ちがう！両方の食感を確認してみただけだ！」

焦ってるのか、噛んでるし。顔も赤い。おじさんがエルさんをか  
らかうの、なんか分かるなあ。反応が面白くて。

ほほえましく思いながら、私は両方勧めた。

『どうぞ。食べてみてください。私も感想が聞きたいですから。今  
お茶を入れるので…あ、時間大丈夫ですか？』

勝手に話を進めようとしてたけど、二人とも厨房に戻らなきゃい  
けないはず。でも、5分や10分は大丈夫だから、と近くの椅子を  
引っ張ってきて腰掛けていた。

それを見て安心。今までで一番手際よくお茶を淹れ、二人の前に  
出す。スプーンを渡すと、二人は早速食べ始めた。

「ほう…これは。」

さっきまでは目が笑っていて細かったのに、今は真ん丸く見開か  
れていた。

「ネイ、流石だ。美味しいよ。このプルプルとした食感。ほろ苦いカ  
ラメル。冷たさもちょうどいい。」

さっきまでの焦ったような姿はどこにもなく、しっかりと味を確  
かめるようにしている。料理をしている人のそれだった。

プロに批評されるのって、ちょっと不安。

次の言葉を待っていると、もう一方のプリンに手を付ける。上を

割っている姿は、何とも楽しそうだ。それから、一口含み、味わう様子を見せた。

「食べる前も楽しく、食べてからも二つの食感が楽しめるとは面白い。」

お気に召してくれたようですね。

その表情に私は安堵した。

「ネイ、悪いんだが、これを三つほど分けてくれないか？是非とも食していただきたい方がいるんだが。」

それは全然構わないんだけど、気になることが一つ。

さっきまでの碎けていた口調が、“食していただきたい”と丁寧になった事だ。身分の高い人に食べてもらうのになって、不安になる。不安に思ったことは、見事に顔に表れていたらしい。

「量が減ってしまうのを心配しているのか？」

返事に困っている私は、そう思われていったのか、と弁解するために口を開いた。

『量は構わないんですけど、もしも高貴な方が口にするのなら、お口に合わないんじゃないかと思って。』

クーンさんとレークさんと私、あとミリアとマーサさんと宰相さまにも上げたいから…最低六個残っていれば構いません。けど、新鮮なものを提供したいのであれば、もう一度作りますけど。』

「そうか！それならば、クエーカーの方で、下にあの苦いカラ…何んとかつてのを入れてくれ！」

“カラメル”が言えなかったね。てゆーか、私は私で聞き取れない単語に戸惑うばかりだ。

“くえっ…？”と、何かのない声みたいになっちゃったけど、私からしたら発音しにくいっいたらありゃしない単語だったから仕方ない。

「クエーカー。赤い方の卵だよ。」

ああ、またあの血みたいな卵を見ることになるのね。少し凹みつつも、食後のデザートだって事なので、すぐに取り掛かった。

付け合わせと、ハンバーグも同時進行でしあげつつ、赤い卵は目を逸らしながらかき混ぜる。

うん、いつか…要は“いつか”慣れることを目標に頑張ればいいよね。

クーンさんたちのお昼ごはんを仕上げ終わると、ちょうど良く昼時のチャイムが鳴り響いた。その時、いつの間にかエルさんもおじさんもおいなくなっている事に気付き、驚く。集中してて、いついなくなっただのかも分からなかった。

そう思いつつも、クーンさんもエルさんも待ってると思い、食事をワゴンへと乗せる。

温かいうちに持っていきたいから、急がなくちゃ。

けど、そこでエルさんに声をかけなくちゃと気づき、厨房に顔を出す、とんでもない状況が広がっていた。

「おい、早くこれ片付けろ！」

「パンが出ていないぞ！」

うへえ…まさに戦場。

私はここじゃ働けないな、と思った。

「ネイ！どうしたんだ？」

あまりの圧巻に、呆然としていた私に声をかけ、エルさんはさっきの女中専用の台所へと来てくれた。

『プリン、できました。後は冷やすだけになっていますから。』

「わかった。わざわざすまん。後でまた話そう。今は落ち着かないからな。」

それは見たから知ってます。みんな忙しそうだったし、今はエルさんがいないからもつと大変だろう。

私は了解し、エルさんを厨房へと追い返した。それからワゴンを

カラカラ押して執務室に入ると、レークさんが目に入る。

もう来てたんだ…今って忙しいって言ってなかったっけ？あ、そう言えば、さっきレークさんを探してる声が聞こえたかも。

『レークさん、また逃げて来たんですか？』

書類をどけ、皿を並べる。ついでにお茶も淹れて、とやる事をテキパキとする。まだ二日目だけど、私って案外順応性高いのかも。

「そうしていると、本当に女中さんのようですねえ。それよりも“また”とは聞き捨てならないです。

あの人たちは昼食の時間でさえ、私を神殿に閉じ込めようとするんですよ？」

必死な訴えに、それほどたいへんなのかと感心しつつ、用意が終わったので声をかけた。

『お仕事お疲れ様です。そのお話はひとまず置いておいて、食事にいたしましょう。せっかくですから、温かいうちに食べていただきたいのです。』

そう言つと、椅子にもたれかかっていたレークさんは姿勢を正す。一方のクーンさんは書類からまだ目を話していなかった。

「放っておきましょう。一段落するまではきつと動きませんよ。それより、今日は何を作ってくださいましたんですか？」

『今日はハンバーグとサラダとスープです。昨日よりも時間があり

そうだったの、普通の食事の様式にしてみました。』

レークさんにハンバーグの説明をしていると、クーンさんがようやくこちらにやって来た。今日は昨日ほど疲れていないみたい。顔色がだいぶ良く見えた。

『私もご一緒していいですか？』

とか何とか言いつつも、実はちゃっかり自分の分も用意してきた。ってなわけで、早速了承を貰って席に着く。と。

「『』いただきます。『』」

三人で手を合わせてそう言った。合わせた訳じゃないのに、タイミングがぴったりで吃驚。けど、私に合わせてくれるみたいだったから、ちよっと嬉しかった。

『そう言えばミリアから言伝を聞きました。レークさん、私に何の話があるんですか？』

食事をしながらいつものように談話する。私はこの時間が大好きだ。

私の事、事情を分かってくれている人たちだから、なおさら安心するんだよね。

「ああ、ちゃんと伝わっているようで安心しました。」

一人、クーンさんだけが蚊帳の外で、眉間のしわを一層深くしている。そのうち、跡が付いちゃいそう。



「祭が近づいてきているので、そろそろ鏡盆に触れていたかどうか  
思っています。クーン殿、時期的にも良い頃合いだとは思いませんか  
？」

「…そうだな。人に紛れ、人知れず行るのが無難だろうな。夕方か  
ら夜に掛けてがいい。」

夜、人がいない時間。そんな時間のお城って怖そうだなあ。なん  
て、自分の事なのに、他の事を考える。

てゆうか、鏡盆とやらに触れた時に何か起こらなきゃいいけど。  
宗教上のものって、なんかいわく付きで怖そうだよなあ。

箸を進めながらも、心はここにあらず。脳内に留まって、自分だ  
け物思いに耽っていた。

触ると、元の世界に戻っちゃう、とかだったらどうしよう?…そ  
れだけは、マジ勘弁。

「ネイ?どうした?」

さっきよりも柔らかい表情のクーンさんを目の前にして、私はに  
へらと笑うしかなかった。

『何ともないです。さ、食べちゃいましょう。』

そう促す。だって、レークさんがいる前では話せない。何だか知  
らないけど、勢いでクーンさんに喋っちゃった、私の黒い内面の事

だから。

それに、これ以上私の暗いところを見せたら、今度こそ嫌われちゃうかもしれない。そうしたら、私はこの世界でも生きていけない。

「…本当に？」

『ま、いいじゃないですか！』

明るく振る舞う。暗いと、本当に心配されちゃうからね！。それに、こつこつこのを隠すのは、昔から得意だ。

## 悪魔の笑み

『今日は甘味も用意しましたよ。クーンさんも食べてくれますよね？』

もちろん念押し。“ね”は強調して言った。甘いものだけど、有無を言わずに食べてもらいますよ、ってね。

まるで何も聞いていなかったかのように箸を進めるクーンさんを、レークさんと二人で見合って笑った。

お皿が綺麗に片付いたころ、私はプリンを出した。でも、生憎室温くらいになっちゃってて。がっかりした。

せつかく冷やして貰ったのに。

『すみません。これ、さっきまでは冷たかったんですけど。』

「冷やして食べるものなのですね。」

レークさんは面白そうに観察している。まだ、異世界の研究は諦めていないんだってさ。

『プリン、という名前のお菓子です。黄色い方は少し甘さを控えていますから、クーンさんにも食べられると思います。』

笑顔で目の前に置く。やっぱり二人には珍しく映ったようで、不思議な眼差しを向けていた。

「冷やそうか？」

一瞬、何を言われたのか分からないかった。だけど、クーンさんが魔道師だった事を思い出す。だから、お願いして冷やして貰った。

やっぱり魔法って便利！

二人に食べるよう促して、私はお茶のお代わりを注ぎ入れる。でも、言われた訳でもなく、二人はすでに手を付けていた。

「これは…おいしいですね。」

にこにこ食べてくれるレークさんは、ちょっと子供みたいだ。お代わりを要求され、もう一つ追加。それも美味しそうに食べてくれている。

『クーンさん、どうですか？』

さつきから無言だし、やっぱり甘過ぎてダメだったのかも。そう心配になる。でも、そうじゃなかったみたい。

「下に入っているのがほろ苦くて、食べやすい。さすが、異世界の菓子は作り方も違うんだな。」

感心しているみたいなどこ悪いんだけど、反応が今一理解できない。あれほどお菓子を嫌がっていたのに、パクパク食べ進めている姿はどうも不自然だ。

ここのお菓子って、一体どんな感じなのかな。

「甘さ控えめなのがいいですね。これならクーンさんにも食べられて調度良いでしょう。」

やっぱり、全然違うんだ。だからエルさんが興奮してたのか！

てゆうか、エルさん、そう言うことならちゃんとしてよー。

ここまでできたら、気にならないはずがない。

『ここのお菓子って、どんな感じのものなんですか？』

「何と言いますか、甘い、ですね。」

話をクーンさんに振った。でも、反応は二人とも同じものだった。

「甘い、な。」

なんすか、その一言で終わらせちゃう感じ。悪いけど、私には全然伝わって来なかった。

『もう少し詳しく教えてくれませんか？よければ料理の参考にしたいんです。』

「ここのお菓子、ですか…。」

二人は顔を合わせて嫌そうな顔をしている。それから、遠くを眺めるように、視線が散った。

「俺はとにかく見たくもない。よく貴族の娘たちはあんなものを食

べられると思うな。」

眉間のしわは、今までで一番深かった。それほど嫌いなのがよく分かる。でも、そんなに、って思えるくらいの反応だった。

「私はクーン殿ほどではありませんが、1、2年に一度食べたいと思うか、思わないかというほどですね。たいてい食べてから後悔しますけど。」

それって、どういう意味？美味しいの？まずいの？

訳が分からなくてそう尋ねると、二人は声を合わせて言った。

「甘いんだ（です）。」「

『甘い…？お菓子なんだから、当たり前ですよね？』

甘いお菓子なんていっぱいあるはず。文化が違うんだから、ポテチみたいなしょっぱいお菓子があるとも思えないし。

「いや、甘過ぎるんだよ。」

「そうなんです。何事もほどほどが大切だと、あれを食べると言うも思います。」

その反省は、どうなの？甘って、甘いだけでしょ。そこまですっぱねる理由でもあるのかなあ。

「こつ言われても、分からないのが当たり前ですよ。では、食べてぜひ一度苦痛を味わってください。」

…それは、笑顔で言うセリフじゃないと思う。てゆーか、敬語で言われると余計怖いって。

そう考えていたけど、笑顔だけみると、レークさんはとっても優しそうに見えるから、正直本心が読めない。

結構長い間一緒に居たけど、掴めない人だっただけはよく分かっていた。

自分の興味があることは、とことん追求する人だ。でも、そうではないことには淡泊だとも言える。

同族のにおいがしないでもないけど、レークさんの方が大人だから、長い歳月をかけての底知れない深さがあの笑顔に垣間見えるような気がした。

きつと、笑顔の分だけ、あっちの方が厄介なんだろうな、なんて思う。

「そんなに見つめてくれるとは、嬉しい事ですね。」

心から思ってもいないような歯痒い台詞をありがとう。私も笑顔で応戦して見たけど、やっぱり叶わないほど完璧な笑顔が板に付いていた。

「苦痛を味わってみるには、そのお菓子が必要ですよね。」

笑顔で言っただけで席を立つと、廊下に出て女中の一人に声をかけてきたようだった。ここにそのお菓子を持つてくるように、って。

そこまでして、二人が言う苦痛を味合わなくてもいいんだけどなあ、とは思ったけど、好奇心には勝てない。

それに、レークさんのお遊びにつきあってみても面白いんじゃないかなって思った。でも、私はMじゃない。日頃のお礼っただけ。

5分も経たないうちに、ノック音が聞こえて、お皿がテーブルに置かれた。のは良いんだけど。

『なに、これ？』

そう思わず呟きが零れていた。

「ティレ・タータ、という一般的なお菓子です。」

目を背けるクーンさん、笑顔のレークさん。そして私は目が点になってるに違いない。

三者三様の反応がある部屋の中、一番注目を注がれているそのお菓子は、見事なまでのお色だった。

今までだった、食材とかで変な色は見慣れてた。だけど、これは流石に驚愕の域だ。

ピンク、黄色、水色、黄緑。見事なまでの蛍光色の塊が、お皿に並べられていた。

一口サイズの丸いそれは、食べるにはどうも抵抗がある色をしている。アメリカとかのお菓子みたいな色だ。



『これが…お菓子？』

無意識に出た咳きは、クーンさんが拾って、そうだと教えてくれた。でも、心は放心状態だ。

「や、どうぞ。」

…悪魔の笑みだ。

神殿につかえている、力のある神官だと言うその人の笑みは、一見すれば天使の笑みかもしれない。

…だけど、今の私には悪魔の笑みにしか見えない。

これなら、常に無表情か、怖そうに眉を顰めているクーンさんの表情の方が、優しげに見えるよ、私。

「遠慮なさらず。」

してませんよ、遠慮なんて。そう言うのも戸惑われて、私はテイ・タータに手を伸ばす。一番手前にあったピンクのものを手に取ると、ひと思いに口の意放り込んだ。

『???  
…っ!』

それが失敗だったなんて、いとも簡単に分かること。声にならないう叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

つていなかった。

さっき飲んじゃったんだっ！

仕方がない方、必死に目で訴えてクーンさんのお茶を横取りする。私がそれを飲み下した時のクーンさんの表情は、憐れんでいるように見えた。

「大丈夫か？」

そんな訳もなく。私はワゴンまで行くと、新しいお茶を渋くなるくらいにして、カップに注いだ。

「人のお茶を盗って飲むなんて、ネイさんはお茶目さんなんですネ。」

お茶目とか、そんな事言ってられるレベルじゃない。果たして、これをお菓子と呼べるんだろうか。

私は未確認物体をじとーっと半眼で睨みつけた。

「どうでした？」

相も変わらずニコニコしているレークさんは、腹黒さが全開だ。憐れ感じの男の美人さんなのに、残念過ぎる。一本の図太い神経が見える気がした。

お茶用意した方がいって、教えてくれてもよかったんじゃないの？

さっきのお菓子と同じように、今度はレークさんを睨みつけた。でも表情は変わらない。私は諦念の感を抱いて、深く嘆息した。

『砂糖の塊よりも甘くて、衝撃的でした。てゆうか、まだ歯が痒い気がします…』

そう言って自己確認をしちゃった所為か、歯を磨きたくなかった。

「歯が痒いとは、あまりにも適切な表現ですね。で、これで分かりましたか？ネイさんのお菓子とこちらのお菓子はかなり違うのですよ。」

ネイさんのものなら、毎日でも食べられますよね、クーン殿？」

クーンさんは小さく頷いた。でも。

…嘘だね、絶対。

いつか、クーンさんが気に入ってくれるようなお菓子を作れたらいいなって、今は純粹にそう思える。

それに、そんな行動一つにもクーンさんの優しさが見えた。そして、それが倍増して見えるのは、隣に居るレークさんの所為だと言うことは、絶対否定できないだろう。

てゆうか、まだしてるんだけど。レークさんを遠くからの声。

昼休みはもう終わってるころだろうし、声が悲痛そうに聞こえるのは、私の彼らに対する憐れみだけじゃないと思う。

でも、今日は昨日と違うことが起こった。

「さて、私はお暇いたしましょう。」

優雅に立って、綺麗な笑顔を浮かべて礼をとる。そして、片膝で立つと、私の手の甲にキスをした。

「また後ほど会いましょう。是非夕餉もネイさんの手で作っていた  
だけると嬉しいです。では、失礼。」

まさに、貴公子のように去って行った。

## 口撃、再び

なんだ、あれ。

見慣れないその姿に呆然としてみると、クーンさんが来て私の手を拭った。

『どうしたんですか？』

「…いや。」

会話は続くことなく、クーンさんは定位置について仕事を始めている。

…そうか。今夜は神殿に行かなくちゃいけないからね。早く仕事を終わらせなくちゃいけないんだ。

私はワゴンを片付けて、昨日のうちにミリアに教えてもらっていた道のりを思い出しながら書類を届けた。

やっぱり格好とかにギョツとされたりもしたけど、若い人たちはみんな親切みたいだ。年老いた力のある人に逆らえないだけなのかもしれないけど、私みたいなものにも親切にしてくれるのは正直言って嬉しい。

それに、そう言う人たちはあまりクーンさんに反発を持っていないみたいだった。

こういふ場所でも、やっぱり女のこの情報力はすごい。昨日のうちにミリアにいろんな事を聞いておいてよかったと安堵した。

ここにはルイス派とシェパード派という二つの派閥が合って、二分される。ルイスは過激、シェパードは温厚。温厚派の筆頭はその名の通り、宰相さまが筆頭だったりする。

王もどちらかと言えば温厚派寄りで、過激派の議会を追放したり、一斉排除に掛かったりと、結構手を妬いているみたい。そんな過激の一派は、こここの神様を強く崇拜しておられるんだそう。

その厄介者に私は見つかったら大変なんだろうな、とか、頭の片隅に思いつつ、注意されたように、赤い羽根の小さな飾りを胸に付けている人たちを避けて通っていた。

それが過激派のマークらしい。こっちで赤い羽根と言えば、いい事の特徴だったりするのにな。こっちではルイス派の象徴で、一致団結している様を誇示する象徴なんだって。

道が分からなければ、その赤い羽根の人じゃない人に聞くのが得策だって言われてたから、その通りにするとみんな親切に教えてくれたし、書類も笑顔で受け取ってくれた。

でも、これから向かうところはそうもいかない。

『失礼いたします。書類を届けに参りました。』

ノックをしてからドアを開ける。でも、開けなきゃよかった、ってすぐに後悔する羽目になった。

ここはかの有名な議会部署だったから。

視線が一気に私に注がれる。それは、何か汚いものを見るような目で。

私はこんな視線を知ってる。向こうでも、毎日のように特定の二人から向けられていたから。

議会部署は融通が利かない。しかし、宗教上の敬虔な信者だから、神の御子の血縁だとされる王家には逆らわれないらしい。

それなら、なんでクーンさんを目の敵にするんだって話だけど、御子は御子でも卑しい血との混血だから許されないとされてるんだって。

王は純血。クーンさんは混血。そこには雲泥の差があるらしい。だから、いくら王位継承権を放棄した元王族であるクーンさんが、いつか反旗を翻して王になろうとするんじゃないかって疑ってるらしい。(ミリア情報)

あれだけお兄さんの事慕ってるって語ってくれたもん。そんなはずなのに、勝手な憶測だけで流言するの、やめてほしいよね。

で、だ。ここからが問題。

ノックして声までかけた。なのに、誰も受け取りに来ない。

無視ですかー？いい大人がガキみたいな真似を。いい加減イライラするんですけど。何度声をかけても無視っていい度胸ね。

カルシウムが足りてないのか、イライラが最高潮に達した。

ふふふ、そろそろキレルぞー。

『すみませんが、どなたか書類を受け取っていただけませんか？』

これが最終警告。これで無視なら、自分の身分も何も関係ない。てゆーか、こっちは元々身分なんてもん関係ないんだから。クーンさんや宰相さまに迷惑をかけると思っ着我慢してるだけだもん。

「……………」

ってな訳で、堪忍袋の緒がブチ切れた。ネイ、行っきまーす。

『いい加減にして下さい。そこに付いている耳は飾りですか？いい大人が言葉も理解できないとは、残念なことですね。』

もちろん挑発的に言った訳で。もちろん反応する人が出てくるわけよ。

「女中のくせにそんな口を聞いて、平気だと思っているのか。」

わざとやったことにこうも思い通りに乗ってくれるとは、アホ過ぎて怒る気も失せる。でも、言わせてもらう。言っても無駄だし、私を城から追い出そうとするとは思っけど、そんなの関係ない。



『私は当たり前前の事を言っているまでです。仕事は仕事。書類を受け取ることにすらできないとは、議会在が聞いて呆れます。』

おじさんたちの困惑の表情は、面白い。こんな若い女に言われるようなことじゃないと思っただらうけど、こうなったらとことん言わせてもらいますよ。

「これが卑しい混血の専属か。主人が主人だからか、教育が成っていないな。」

そう言っつて、近くに居る人が近づいてきた。書類を受け取つてもらえるのか、と思いきや、伸ばされた手は、私の頬を思い切り弾いていた。

私の身体は揺れたけど、そこから一步も動かない。口の中か端が切れたのか血の味がしたけど、私は泣く事もなくニヤツと笑つてやった。

『頭に血が上れば、女などお構い無しに手を出すんですね。』

悪いけど、こちららこういう状況には慣れてる。殴られたくらいで取り乱したりなんかしてやらない。そして、そんな姿を何とも言えない視線で見てるその表情も、もう何年来にも渡つて見てきたものだ。

『大人はそうやって、子供に正しい事を注意されると怒りだす。』

自嘲気味にそう言っつてやると、目の前の男は顔をもっと真っ赤にさせた。

この人は、クーンさんを侮辱した。これで私が怒らない訳がない。軽く言いくるめてやるうと思っただのに、そうはいかないほど冷静さを失っていた。

『身分など関係ありません。皆生活するために働いているのです。その頑張りに上も下もありません。同じように必死なのですから。』

動揺することなく、さつきと同じように手を前で小さく組んで、女中のそれらしく言っただけ。懇切丁寧に言っただけのは、屈辱感を煽るため。そうでなければ、こんな丁寧な言い回しなんてしない。

『働かざる者食うべからず。ただ書類を受け取ると言う仕事にも満たない動作をすることすらできないのなら、夕飯を食べているのと同じこと。給料をもらう資格すらないと言うことになります。』

目の前の男はぐつと唇を噛んでいる。それが自分の非を認めている事をよく表していた。

『書類を受け取っていただけますね？』

笑顔で再びそう言うと、今度こそ受け取ってもらえた。その時の議会の執務室は驚くほど静かで、私の姿に視線を、声に耳を傾けていることが一目瞭然だ。

丁寧に礼をして。

『失礼いたしました。どうか無礼な言動をお許しくださいます。』

なんて、ちゃっかり自分の言動についてまで謝ってから、そこを

後にした。

廊下を進みながら頬に手をやる。

あーあ、思いっきり殴ってくれちゃって。一応つら若き乙女だぞ！顔に傷でも残ってくれたらどうしてくれよう。

そう考えたら、またイライラしてきた。

これ、腫れちゃうかなあ。とりあえず、冷やした方がいいよねえ。

だから、クーンさんの執務室じゃなく、女中部屋に戻ることにした。のは、いいんだけど。

「ネイさま！そのお顔はどうしたんです！」

悲鳴にも近いミリアの声はその部屋に響き渡ったのも無理はなかった。

「こりゃ腫れてるねえ。ミリア、落ち着いて、冷やすものを持ってきな。」

あたふたするミリアに、その場にたまたま居たマーサさんが指示を出す。それくらいにミリアは驚いていたらしい。

「ここじゃ目立つ。食堂にでも行くのが。今の時間ならあそこには誰もいないからね。」

手を引かれて連れて行かれる。私は怒られる子供のように、黙っ

て着いて行った。

一番入口に近い端の席に座り、ミリアが濡らしてきてくれた布を、頬に当てる。ひんやりして気持ち良かったけど、ちょっとだけ沁み

た。  
心配そうな視線を向けて、違う布で唇の血を拭ってくれる。切れ

ていたのか、それから消毒もしてくれた。  
「何があつたんだ、と聞いてもいいかい？」

私は怒られる覚悟で頷き、一言一句漏らさないように、丁寧にさ

つきの議会の執務室での出来事を話した。  
けど、私が思っていた反応とは違って、マーサさんは大声で笑い

出してしまった。  
「マーサさん！笑いごとでは済まないわ！」

一方のミリアは顔が真っ青。やっぱり、普通ならあり得ないよう

な事、しでかしちゃったみたいだね。  
「いや、あんた変わってるよ！」

私の一連の出来事を笑い飛ばしてるマーサさんには言われたくない

けど、ここの価値観と私が持っている価値観の違いを大きく知る

きっかけになつたには違いない。  
『正論を言つたつもりだったんですけど、何か変なところありました？』

「無いから面白いんだよ。」

とは言え、乙女のやわ肌に傷を作るなんざ、男の風上にも置けないねえ。ネイの白い肌に傷が付くなんて、可哀相じゃないか。」

マーサさんが突いてきたそこは、時間が経ってさつきよりも赤く腫れていた。こりゃ、目立つな。ミアアが持ってきてくれた小さな鏡に映る頬を眺めて、諦めたようにため息を溢した。

『いえ、私もちょっと挑発してやろうって思ってたのに、イライラが最高潮に達してしまっただけ。』

もう少し考えれば顔に傷を付けないように言いくるめることができたのに、これは私のミスですね。』

淡々とそう語って、自分の中で反省した。

いつまでも相手がぐだぐだと言ってたからって、私が先にキレたのには変わらない。今度からは気をつけよう。

## 口撃、再び その2

「そう言っで見せるところが驚きだよ。普通なら畏まって言えないし、叩かれた時点で泣くだろうからね。」

『私はちょっと変わってるらしいですから。叩かれた時には一步も動かずに、叩かれた後には笑ってやりましたよ。』

それより、私、城から追い出されますかね?』

またマーサさんは笑いだした。自分の頬が腫れている事を、そんなこと呼ばわりしたのが面白かったらしい。

マーサさんは、笑い上戸なのかもしれない。さっきから笑いすぎだよ。

でも、私にとってはそんなことだった。クーンさんの下で働けなくなる方が、よっぽど心配だったから。

「うーん、五分五分だね。あいつらにも矜持つてもんがある。正論に対して力でねじ伏せようとした事すら、正論で黙らせたんだ。」

また力でねじ伏せようとしたら、自分たちの非を認めているようにも思えるからね。そう考えたら、大丈夫かもしれない。」

その言葉に安堵した。

きつと、このことはいろんな人の耳には入らない。それも矜持。

クーンさんの下に居る若い女中に言いくるめられたなんて、絶対に言えない事だろう。それも言わずにただ気にくわないという理由で辞めさせるなら、不当解雇に違いない。

「ネイさま、あと一刻ほどでお茶のお時間ですけど、その顔でクーン魔道師さまのところへ行ったら、心配されるのではないですか？」

それを聞いた瞬間に固まってしまった。

「どうしようっ…」

『怒られるっ?!』

いきなり興奮した私を、二人はどうどうと落ち着かせようとしてくれたけど、そう上手くいく訳もなかった。

だって、クーンさんの下に居るのに、クーンさんにとって分が悪いことしちゃったんだもん。とんでもないことしかしたな、って見捨てられても仕方ないことしちゃったよ！

私、この世界に知り合いなんていないのに、追い出されたらどうしようー！

「議会に対して物怖じもしないのに、やっぱり変わった子だねえ。」

落ち着いてる場合じゃないって!どうしようー!

混乱している私の許にエルさんがやってきて、またひと騒動あった事は当たり前だろう。

それでも何とか落ち着いた私は女中のキッチンへと行き、ミリアとマーサさんにプリンをご馳走した。

二人とも美味しいと言って食べてくれ、エルさんも食べさせたかった人から好評だったらしく褒めてくれたけど、私の心は落ち着かない。

料理を試してみればいいんじゃないかと言われ、それが単なるエルさんの好奇心だと分かったのは、調理も半ばになったころだった。

「ネイ、オーブンはもうよさそうだ。入れるか？」

それに頷き、生地を並べた天板をいれ、私は小鍋の方を掻き混ぜていた。

「いい香りがしてきたな。」

私が料理をしている最中、エルさんはひたすらちよるまかとしていた。最初の方は注意してくれていた二人も、いつの間には仕事に戻っててここにはいない。

それくらい、私の心は乱れていた。

そして、どうやって説明して、どう謝ろうかも考えていた。

「ジャムはいい頃合いだ。もうそろそろ火から下ろしてもいいんじゃないのか？」



そう言われて、掻き混ぜていた手を止める。よく見れば、煮詰り過ぎてるくらいだった。

料理中に考え事なんて。失敗します、って言ってるようなもんだよ。

なんて、また小さく落ち込んだ。

刻一刻と私の胸には重しが押し掛かっているように感じられる。それも、どんどん重たくなっていた。

火から鍋を下ろしていると、タイマーの音が鳴り響く、それに反応したのもエルさんの方が早かった。

「こんな風に焼き上がったのか。パン…のようだが、それとは違うのか？」

『あ、はい、違いますよ。パンはイースト菌を使っていますが、これはベーキングパウダーで膨らませています。』

私が無意識のうちに作り始めていたのは、スコーンだ。…初めて私がつったお菓子。そして、おばあちゃんが好きだと言って食べてくれたお菓子。

「同じように寝かせてたじゃないか。」

『いえ、こっちの生地は、混ぜ合わせた材料が馴染むように寝かせてただけです。パンのようにイースト菌の作用で膨らんだりはしてい

なかつたでしょう?』

さくさくと第二弾を天板に並べて、オーブンに入れる。それを気にする事もなく、エルさんは焼き上がったスコーンを不思議そうに見ていた。

『温かくても美味しいですが、冷めている方が私は好きですね。それにさつき作ったジャムを付けて食べるんですよ。』

興味津々な様子のエルさんに、実践して見せる。スコーンを二つに割って、ジャムを付けて食べる様子を見て、真似をしている姿は見ていて面白かった。

何事も初めてのものって警戒するものだけど、エルさんは見事に恐る恐る口に運んでいる。期待を裏切らない反応って、人が違うだけでこちらも微笑ましく思えるのはなんでだろう。

さっきのおじさんたちに関しては、呆れてしまったけど、エルさんはその反応をしてくれること自体が嬉しく感じた。

「う、美味いっ!」

毎度毎度、美味しいと言ってくれる姿に、笑顔が全開になるのは無理もない。私は満足げに頷きながら、残りのスコーンも口に放り込むと、お茶のセットを用意し始めた。

小さな器に三種類のジャムを入れ、大きいお皿に並べる。そのお皿の空いているスペースには、バター、チーズ、そして焼きたてのスコーンを並べた。

「おお、見た目にも綺麗だな。」

また感心してくれている様子は、大きな子供みたいだ。

『またたくさん作りましたから、お好きなだけ召し上がってください。』

エルさんが料理に関わっている事で、最初から多めに作ることを決めていた。初めてのものを食べたがる癖がある事を、たった二日だけ十分に承知している。

「有り難いな。それで、もう一つお願いして悪いんだが、さっきのと同じように皿に盛り付けてくれないか？」

その申し出に了承をすると少し待つように言われ、しばらくすると何かを抱えて戻って来た。

エルさんが持ってきたものは、さっきのシンプルな白いお皿とは違い、バラが描かれている何ともお高そうなもの。

こう言うのを割ったら洒落になんないよね。とか何とか思いつつ、割ってみたらどうなるかを想像したくなって、止めておいた。

こんなことを考えるなんて、私ってやっぱり天邪鬼って言うか、性格ねじ曲がってるよね。

こう、立ち入り禁止の場所に入ってみたくなったり、触るなっ表示してあるものに触ってみたくなったりしない？

考えに耽りながらも手は動かし、お皿に盛り付けるとエルさんは

嬉しそうに運んで行った。

どうやらプリンの人に持っていくらしい。

私もクーンさんの所へ持っていきますか、と思っただけから、自分の仕出かした事を思い出した。

どどど、どうしよう！結局なんて言ったらいいのか、考えるの忘れてたー！

一人で頭を抱えていると、調度いい所にミリアがやって来た。

もちろん他の女中さんもいたけど、みんな変なものを見るような目で見るだけで、私に触れてこようとはしていない。

自分でも、それは最良の判断だと思う。それくらいに、今の私は余裕がなかった。

「あら、やっぱり腫れてしまわれましたね。」

痛そうと言わんばかりの心配する視線を向けてくれる。ここにミリアの優しさが垣間見えた気がした。

『そんなことはどーでもいいの！』

女の子が顔に傷を作っちゃいけないとか、気にすべき事だけど、今はそれ以上に気にすべき事がある。

『クーンさんに分が悪いことしちゃったから、謝らなきゃいけない

の！』

お茶のセットの用意も、お茶菓子も用意できてる。でも、肝心の謝罪の言葉の用意はできていない。

きつとまだクーンさんの耳には届いてない事だとは思っけど、バシるまで知らんぷりなんて、できないもん。

そう呟くと、ミリアの呟きに胸を抉られた。

「そのお顔で何かがあつたことなど、知られてしまつたのでは…?」

一応気を使つて、小さく言ってくれたみたいだけど、それが逆に自分の失態を知る大きな原因にもなつてしまつた。

「女は度胸、ですよ。ネイさま、ここは早めに暴露してしまつた方が、気が楽になるのではないでしょうか?」

イタイ…ミリアの言葉が痛い…

尤もな正論は、さつき正論という名の御託をおじさんたちに並べた私には、威力が半端ない。

つまり、自分の美意識的にも、逃げられないってことだ。でも、きつと一人じゃ成し遂げられない。

『お願い！ミリアも付いてきて！』

半分泣きそうなたしの懇願に、やれやれと言つた様子で了承し

てくれた。

二人きりになる事は、何とか回避された。後はどうやって謝るか  
を考えるだけだ。

でも、考えても考えても、言葉は見つからなくて。さっきのミリ  
アの言葉を借りて、ぶっつけ本番でその時に出てきた言葉に任せよ  
うと決めた。

## 謝罪

度胸、度胸：

ワゴンを押しながら、ブツブツと呟く。ミアアが心配そうな視線を向けてくる事にさえ気づけなかったのは無理もない。

執務室の前に着いてしまい、深呼吸を繰り返す。どうも間が悪く、クーンさんの部屋に書類を届けにやってくる人はいない状態だった。

いつまでも動けない私に、ミアアが声も出さず目線だけで促してくる。

分かってるけど、動けません！

目ではそう主張したつもりだったのに、お構い無しにミアアはその重々しく思える扉をノックしてしまった。

そして言うことには。

「度胸、ですよ。」

とのことだ。

私のタイミングなんてお構いなしに、返事も聞こえてこない扉を開けて、私を中に押し込むような形で突っ込んだ。

書類に目を向けているクーンさんは真剣な顔、そのもので邪魔し  
ちゃいけない気がする。

だから、逃げようとした訳じゃないけど、空気を読んで回れ右を  
しようとしたのに。後ろに張り付いていたミアは、そこをどいて  
くれようとはしない。

目で訴えても、何をしても笑顔を張りつけている。

「逃げてはダメです。」

もう一度言おう。断じて、逃げようとした訳ではないっ！

女二人がこそこそしているのは、どうも目につくらしい。

「何をしている？」

その声をかけられた時には、終わったと思った。そして、もう逃  
げられない、とも。

やっぱり逃げようとしていたんじゃないかって言う、批判の声は  
一切受け付けないのでよろしく。

ちょうど後ろに居るミアと視線を合わせている状態の私は、ク  
ーンさんに背を向けている。きっと、顔はまだ見えていない。

振り返るの、怖い。

「ネイ？」



『ごめんなさいっ!』

振り返った瞬間に頭を下げ、そのまま議会の人たちに何を仕出かしてしまったのか、洗い浚い吐いていた。

『クーンさんの足かせになってしまったかもしれません

…本当にごめんなさい!』

最後にそう言うと、私の勢いは殺がれた。その後には沈黙が残り、誰もが動こうとはしない。

私はもちろん、まだ頭を下げたままだった。

「…何があったのかは、よく分かった。」

静かな声。でも、低くて少し怖い。

私は許して貰えるかどうか怖くて。必死に頭を下げたままだった。

「ネイ、話がしたい。向き合って話し合おう。顔を上げてくれ。」

そう言われてしまえば、そうするしかない。

私はゆっくりと顔を上げた。

「ネイ…その顔はどうした?」

さつきよりも低い声。もっと怖く感じたけど、それでもさつきより優しく感じた。

勢いよく立ちあがってこっちまでやってくる。その手が私の頬に触れようとした瞬間に、扉が開かれた。

「ネイ！とんでもない事を仕出かしてくれたな！」

ずかずかと迷いなく入ってきたその人は、紛れもなく、この王宮でも力を持っている人物。私の知っている数少ない人の一人である、宰相さまだった。

てゆうか、今“とんでもないことしかした”って言ったよね？！

…バレてる？

口ぶりからは何をしたかを知ってるご様子。でも、目の前の人物によって、私の視線は動かすことができない。

てゆうか、マーサさん、あの人たちにも矜持があるって言ってませんでしたか？

皆無じゃん！早速ふれ回ってるみたいなんですけど。

「宰相殿。少し席を外していただけますか？ミリアもだ。」

有無を言わせぬ雰囲気。

私としては、二人がいてくれた方が助かるんだけど、そうもいか

ないらしい。

足音、ドアの開閉音。それがした後は、二つの気配すらもいなくなっていて、静かなこの執務室の中には私とクーンさんしかいない事がありありと分かった。

空気を讀んじやったのね…

レークさんとかだったらこの状況を引っ掻き回してくれそう。

けど、さっきから目を逸らすことも許さないと言わんばかりの眼差しを向けてくるクーンさんなら、言いくるめてしまいそうだとも思った。

「その傷は、誰によるものだ？」

…誰って、聞いちゃいますか、そこ。

早速な質問に、私は答えることができない。むろん、その人を庇っている訳じゃない。だから、素直に言ってしまうば。

『わかりません。』

覚えていないんですよ。

「…庇っている、という訳じゃなさそうだな。」

当たり前ですよ！正論言われてキレて…それで女の顔を引っぱたくやつのことなんて、何で庇わなくちゃいけないんだって話ですよ。

なににせよ、クーンさんのさっきの言葉が、私のことを理解してくれているようで嬉しかった。

叱られムードだったのに、不謹慎？

ま、私みたいな人間のことを構ってくれてるっただけで、前に居た家族よりもずっと近い存在に思える。だからこそ喜びだ。

「ネイ？」

『あ、すみません。スパークしてました。』

“スパーク”の意味を問われ、答えに納得されてしまったのは無理もない。カタカナが伝わらないのは、少々厄介だ。

『私の顔つき、ここの人たちと少し違うでしょう？』

「ああ、すこし。」

肌の色なんかは、私は元から白からそう変わらない。だけど、彫の深さや髪や目の色なんかは、はっきりと違った。

見事にヨーロッパ系の顔立ちだ。

『元の世界でも、私のいた国の付近はアジアと呼ばれていまして、黄色人種でクーンさんたちの肌や髪の色、顔の特徴なんか違って、いるんですよ。』

ここには黒髪の人には確かに一人もいなかった。でも、可笑しな色

はたくさん見かけた。強いて言えばそこで見分けなんかは付くけど、一度会っただけじゃインパクトがないと覚えられないもん。

「では、ネイの国ではみんな肌が黄色く、髪と目が黒いと？」

みんな、じゃないんだよねえ。でも、上手く説明できるか分からないから、なるべく理解してもらえるように丁寧に話した。

『黄色、と言ってもそう変わりませんよ。髪も染めてしまえば黒ではないし、目もカラーコンタクトっていうレンズを入れちゃえば、外国人と同じにはなりますね、一応。』

でも、決定的なのは顔の造りの違いでしょう？

同じ人種の人との顔の区別は付くけど、どうもほかの人種の方の顔は区別が付き難いんですよ。』

「それでは、分からないというよりも、覚えていないということか。

腑に落ちたように納得されると、ちょっと傷つくよね。でも、一瞬だもん。頬を殴られたのは。

その後はあの場に居た人たちに、引かれるように努力するのだから、っばいだったし。

見渡せる限りの顔が引きつった印象はあるけど、一人ひとりを詳しくなんて覚えていない。

『それよりも、怒ってないんですか？』

「それよりも、じゃない。一番重要な事だ。」

何が、と問うと、私が殴られた事だという答えが返ってくる。それに少しだけドキリとしてしまった。

「内容自体は、然して問題じゃない。正論だろう。この身に何が降りかかるうと、ネイの身の安全は保障するさ。」

…私はその、あなたの身に降りかかることを心配しているんですが。

「怒っているのかと聞いたな。怒っているさ。ネイに手を上げたそいつにな。」

纏っている空気がどす黒く見えたのは私だけだろうか？

「ネイに対しては怒っているんじゃない、心配してるんだよ。」

赤く腫れてしまっているな…」

その大きくてしっかりとした手に、頬を撫でられる。私は恥ずかしくなって、視線を下に降ろした。

ちちち、違う意味で顔が赤くなりそーですっ！

優しい手つきで私の頬を撫でている。その手は暖かく、少しかさついていて…

男の人のてだって、そう思った。

だからこそ、余計に近くに居ることを自覚させられている。

どうも、クーンさんとは距離の測り方が難しい。

私は昔から、両親に虐げられてきた。一時はおじいちゃんとおばあちゃんのお陰でなんとかなった私の性格だけど、お父さんに引き取られてからは昔の自分に戻ってしまっていた。

自覚はしていたけど、毎日両親にとられる態度のおかげか、他人に本心は見せられなかった。…人を、信じられなかった。

人とは上辺で付き合うだけで、話も上手く合わせてるだけ。本当の自分の気持ちなんて話さないし、話そうとも思わずに心に仕舞ってしまふような、サイテーな人間だ。

ただし、口撃して撃沈させることに関しては、攻防は考えるけど本心を言っている。だからこそ、もっとサイテーだと言われても当たり前なことだと思う。

人を観察して、その時の身の振り方を考える。無鉄砲なふりして、逃げることなんて得意中の得意。

いい人だ、と言われる度に、心のどこかが痛むのは、よくない事をしているからでしょ？

そう言われる毎に負い目を感じてるから、そう言われた時に笑顔が引きつらないように気をつけなきゃいけなかった。

だけど。

そんな私の壁を、この人たちは簡単に崩してしまう。

ここに来てから、元気で空気が読めない明るい性格で振る舞っている。でも、今はそれが自分自身の根底の中身なんじゃないかって思える。

中でも一番近づいてくるのは、クーンさんだ。

自分のことなんか喋っちゃって、泣き顔見せちゃって。髪を撫でられている時なんか、その胸に抱え込まれるように自分を預けてる。

それを…心地よく思っている。

人を信じられなかったはずの私が、信用している。それが事実だった。



## 謝罪 その2

「ネイ？」

呼びかけに、現実を引き戻される。上げた視線は、目の前の人に よって囚われてしまった。

「痛かったか？」

いつの間にか、考え事の所為で、表情が引きつってたらしい。それを、クーンさんは自分が触れた所為だって勘違いしたみたい。

「いえ、大丈夫です。少し嫌な事を思い出してしまっただけなので。」

そう言つと、今度はクーンさんが顔をしかめた。

「それを、俺が聞くことはできるか？」

クーンさんに聞かせる…？

私は戸惑った。

今まででもそうだけど、クーンさんにはいろんなことを話し過ぎちゃってたから。私の祖父母のこと、両親のこと、新しい家族のこと。

普通なら引かれるか憐れまれるような話なのに、クーンさんはそ

れを聞いた今でも前と変わらない態度でいてくれる。

それを、今度こそ失ってしまう気がして、怖い。

だから、笑ってごまかした。

『今話してしまうと、長くなります。』

宰相さまが外でお待ちでしょう？それに、クーンさんだって今日は神殿へ行くために仕事を早く終わらせなければいけません。また今度にしましょう。』

精一杯だった。

どうか、忘れて。お願いだから、聞かないで。

そうしないと、今度こそ見限られちゃうから。

「…そうだったな。」

そう言うと、私の背のすぐ傍にある扉を開いた。

「どつぞ。」

待ってました、言わんばかりにドカドカと入って来たその人に心癒されながら、少し空気が軽くなった気がした。

そんな風にあからさまにほっとした私を、クーンさんが見ていたことになってこの時は気付かなかった。

「今日一日でネイは有名人だ。…と、これはどうした？クーンにやられたのか？」

まさか！クーンさんは優しくしてくれこそ、殴ったりなんてしないって。

多分それは宰相さまも分かってること。

きつと、わざとだ。私とクーンさんの間にある空気が重苦しかったから、きつと変えようとしてくれたんだと思う。

「私はそんな事いたしませんよ。」

いつの間にか定位置に戻って書類に目を向けている。さっきまでの一連の出来事が嘘だったみたい。

「しかし、聞いた話にはネイが怪我をしていることは入っていないかったが…」

どうやら、複雑そうだ。そして、話は歪曲しているに違いない。

これは詳しく聞いて、私にとって悪い物だったら、報復してやらねば。

一瞬ニヤツとしてから、私はいつものように笑顔を張りつけた。

『宰相さま、詳しくお聞かせ下さい。私も事実のみをお話しますか』

お茶の用意もありますから、と言つと、宰相さまは喜んで運び込まれたばかりの机の方へと進んでくれた。

「これは？」

お茶、そしてお菓子を並べる。

今までにないものだったからか、宰相さまは不思議そうに楽しんでる。その顔はレークさんと重なって見えた。

『スコーンと言つお菓子です。アフタヌーンティーの習慣があるイギリス、という国が発祥のお菓子です。ジャムを付けてお召し上がりください。』

カップに紅茶を注いで、一つは宰相さまへ。もう一つは黙々と仕事をしているクーンさんの元へと置いた。

『クーンさんも、よかつたら召し上がってください。乗せるものとしてバターとチーズも用意しました。あまり甘くありませんよ。』

そう言つた私はいつものことながら顔を上げてもらえないと思つただけで、今日は少し違つていた。

顔を私の方へ向け、じーっと見つめるような視線を送ってくる。

きつと、さっきのことがあつたからだ。私は笑顔が引き攣らないようにするので精一杯だった。

「ネイもこちらに座りなさい。詳しい話を聞かせてもらいたい。」

そう言われ、私は席に着く。そして、何があつたのか四度目になる話を語った。

「…随分と、やらかしたようだが、正論だな。無能な奴ほどよく吠える。おまけに<最後の乙女>に手を上げるなんて…」

そいつの首をどう切つてやるうか。」

ステイ、ステイっ！宰相さま、何か黒いものが出てます！

その重苦しい空気の中、私は笑顔を張り付けながら紅茶に口を付けて何とか視線を逸らした。

血の繋がりなんか無くたって、間違いなくクーンさんと宰相さまが親子だつてことが確認できたよ…

『宰相さま、私が<最後の乙女>と決まった訳ではないですし、そうであっても表に出る気はありません。』

その事を知らない議会の人たちにとっては、単なる小娘に違いありませんから。』

どうかそのどす黒い靄を引き取ってください…

そう言う気持ちを含めてそう言った。

そして、最も気になること。

『で、宰相さまがお聞きになった噂って、どんなものなんです？』

これを聞かなきゃ始まんない。内容によっては、どう報復するか考えてやらなきゃなんないからね！

私こそ黒いつてことは、重々承知してるし… やられたら三倍返しが必須でしょ。

「いや、噂も聞いたが、実際はクーン付きの専属を辞めさせると直接言われたな。」

なっ！

私は驚いて言葉も出ない。マーサさんが言ってた矜持の話が頭の中を過ぎ去り、そんな事を考えるような人間でないことがよく分かった。

「今ネイから聞いた内容は、一切違っていたがな。そして、監督不行届きでクーンに対しての処罰も望まれた。」

…やっぱり。迷惑、かけちゃったんだ。

「まあ、一蹴してやったがな。」

頼りになります。

ほんと、権力って大切だね。

『あの、その…噂、ってどんなものなんでしょう？』

おずおずと聞いたけど、これが私の一番聞きたかった事だ。

絶対最悪だと思う。あの人たちのことだもん。無いことだらけで話したりしてるはず。

「言葉遣いが成っておらず、態度の悪い女がクーンに付いた、と。」

ほっほー。言ってくれますねえ。

「その女にクーンが絆されている、と。」

今まで女に興味がない様に振る舞っていた愚息だからこそ、この噂はおそらく貴族のお嬢様たちにもふれ回るだろう。」

…更なる敵を作ったか……

ここは異界の地。人間の上下関係やら、制度やら、時代背景さえも違う。

現代の日本社会とは違い、女や庶民に対して差別があるのが現実だ。

階級制度の所為でここにいる貴族は増長しているように思える、ってことは、つまりその娘さんたちも、そう言う事だ。

たった一回の出来事で有名になるってのは、随分と大変なことをやらかしちゃったみたい。

「…なんだ、その噂は。俺がいつネイに絆されたというのだ。」

それに、ネイの態度や言葉遣いも、きちんとしている。根も葉もないことだらけだ。」

ホント、私もそう思うよ。尾ひれに胸鱗、おまけに背びれまで付いちちゃってる。どれだけ話を大きくすれば気が済むのよ。

『私、悪女決定ですかね？』

「そのようだな。」

呑気にお茶を啜りながら、肯定しないでください！こっちは死活問題ですよ。

殴られ解いて、お役御免とあっちゃあ、生活していけないって。

城から追い出されても良いけど、とりあえずここに留まって鏡盆に触れなきゃいけない。それが終わったら、どうしようかな…

どこかお給金が出るところで働いて、生活していかなきゃ。私、城から出たって言っても、クーンさんの家まで馬車で移動してたから、城下のことなんて知らないんだよね。

生活水準って、どんなものなんだろう。

「おお、これは美味しい。ネイは料理屋が開けそうだ。」

！

『それだ！』

思いついたと言わんばかりに声を上げれば、急に出た大声に二人は何事かと目を見開いていた。



「どれだ？」

こちらに近づいてきて、椅子に掛けるクーンさん。その手には、さっき私が運んで渡した紅茶のカップがあった。

どうやら休憩するらしい。

調度いい頃合いだと思い、お代わりを注ぎ入れる。その時に、さっきのことを話した。

『鏡盆に触れてしまえば、私が城に来ることは無いですよ。そうしたら、お給金が貰えるところで働いて、そのうち小料理屋でも開こうと思つて。』

私が作る料理はどれも珍しいみたいだし、流行るかもしれないでしょう。』

「ここの料理水準は高くないし、高級料理とまでは行かなくても、きつとそれなりの値段で提供できる。」

そしたら、がっぽりだ。

「…それもいいかもな。だったら、軍資金が集まるまでは、うちで働けば良い。住み込みで働けば部屋代や食事代が浮くし、早く貯まるだろう？」

あ、食べてくれてる！

クーンさんの提案にびっくりして目を向けると、スクーンを口に

運んでくれている姿が目に入って嬉しくなった。

「おい、私には裏が読めるぞ。それではお前が嬉しいだけではないか。」

『?』

「どうやら、親子で意思疎通しているらしい。私には二人の会話の意味がさっぱりだ。」

「でも、それもいいだろう。ネイが表舞台に出たくないのであれば、仕方があるまい。譬えネイが最後の乙女であるうと、私はお前自身が気に入っている。」

「お前がしたいようにすればいいさ。」

「にっこり笑ってくれる姿には、今度こそ黒い物は見えなかった。」

「心からの笑みはなんとも安心できますよね。」

「ただ、その白い肌に傷を付けるとは。」

「本当に許せんな。」

「息、ぴったりですよね。」

「でも、一番驚くべきことは、二人が私のために怒っているというじや。」

「おじいちゃんとおばあちゃん以外には、未だ嘗ていなかったような存在。私は俯きながら紅茶を飲み、涙が出るのを堪えていた。」

「こんなことしてたら、またクーンさんが心配してくれちゃうんだろっつな。そう思って少しだけ、また嬉しくなった。」

## 再会

『お疲れ様でした。』

おそらく夜7時ごろ。いつもよりも早くクーンさんの仕事は終了した。

書類を届けて戻って来たところに、お茶を用意して待っていた。

うん、女中<sup>メイド</sup>としての働きはなかなか悪くないはずだ。

今日はもう何回か書類の配達を試みてたんだけど、かなり多くの好奇の目にさらされて大変だった。

元々格好や黒髪黒目のおかげで目立ってたからそう苦にはならなかったけど、私の悪女説は完全に浸透しているらしい。変な視線を感じるからね。

まだそれならいい。クーンさんに迷惑にならないもん。

哀れまれてる分だけ、私が悪目立ちするから。クーンさんはただ悪女に操作されてる男<sup>男</sup>ってことでしょ？

「ああ、今日は助かった。」

私の横で、椅子に力無く体を預けている。本当に疲れている姿が見て取れた。

多分だけど、私のこととか聞かれたりして大変だったよね。

何か言葉を返さなくちゃ。そう思ってみても。

『ごめんなさい。』

謝ることしかできなかった。…他の言葉が思いつけなかった。

また私の所為で負担をかけた。負担を減らそうとしたのに。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言ってくれたんだ。嬉しいよ。」

優しい微笑み。この人は、全てが優し過ぎる。

私は、そんなに良い人間じゃないから。その優しさに触れる度に、心が痛くなった。

「ネイ？どうしたんだ？」

手を差し伸べてくる。纏っている空気さえもが柔らかくて、今の私には刺のように刺さった。

「そんな顔するな。」

次の瞬間、私の視界は黒く埋まっていた。

温かい感触、頭をなでる手。仄かに香る優しい香り。私はクーンさんの全てに包まれていた。

「ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

腕を引かれ、いつの間にかその胸に顔を埋めていた。

座っていたクーンさんには、膝立ちしている状態になっているであろう私の全体重が掛かっている。

重いだろっからと身動きしてみても、がっちり固定されていてできなかつた。

「泣きそうまで悔しそうで、辛そうなの、そんな顔見たくないんだ。」

上から声が降ってきて、その心音が聞こえてきて。少し心地よくなってくる。…ずっと、ここに居たくなる。

でも、駄目だ。

私が関わったら、駄目だ。私になんて関わっちゃったら、ろくな事無い。

気持ちや表情をごまかすなんて簡単なこと。昔から慣れてる。

人と深く関わっちゃいけない。表面上は大丈夫でも、私は人を信じるのが上手くできないから。裏切られた時に落胆する辛さは誰よりも知っている。

人に深く関わっちゃいけない。私と接点を持つことで後悔させる羽目になるから。自分の嘘に気付かれたら、良心が痛む。

「大丈夫、私笑えます。」

胸の辺りを押して、私はクーンさんから離れて立ちあがった。

明るくなった視界には、クーンさんが入ってくる。やっぱり心配そうな顔をして、私を見上げていた。

「悪いが、俺には大丈夫そうには見えないな。」

意志の強い瞳は、深い紫の奥がキラついて見えた。

『大丈夫。』

これはクーンさんに言ってるようで、自分に言い聞かせていた。

大丈夫、ひとりでも大丈夫。

一人になったときの孤独さや、信頼していた人がいなくなることは、辛いことだ。だったら、始めからそうならないようにすればいい。

『あ、私、夕飯も用意したんですよ。レークさんも来るみたいだから、用意してきますね!』

そう言って、部屋を飛び出した。

とぼとぼと廊下を進む。

この時間は人もそう多くはないから、視線も気にならない。厨房へ行くと、夕飯の時間帯で忙しそうに見んな働いているようだった。

温かい料理を出す為に、急いで仕上げて盛り付ける。

私は用意していた夕食用のワゴンをこっそりと引いて、部屋に向かった。

「ネイさん！」

執務室へ着く少し前。ちゃんと顔が作れるか心配で、どうも歩調はゆっくりになっていた。

そんな私に後ろから声をかけてきたのは、レークさんだった。

「今日は大変だったようですね。」

あらら。そこまで噂が広まっちゃってるんですか。

思わず脱力。そんな私の行動から思考が分かったのか、面白そうに笑う声が隣から聞こえた。

笑いごとじゃないんですけどー。

すみません、って言いながら、目元をぬぐっている。そんなに笑わなくてもいいと思うんだけど。

「きっと私が聞いた噂は増長したものなんでしょうね。」

分かってるんなら、私の顔を見ただけで笑わないで下さいよ。

そう言う意味を込めて、半眼でじとーっと睨みつけてやった。

だって、私やクーンさんに取ったら笑いごとじゃないもん。って、



そんだけのことでかしちゃった私が言うことじゃないけど。

「夕食をとりながら、面白い武勇伝でも聞かせて下さい。」

楽しんでるよ、この人。

矜持なんか持ち合わせてない議会の人も厄介だし、話を聞かない騎士団の人も厄介だ。

でも。

誰が一番厄介かって、このお方！レークさんに違いない。

この人は空気が読めないんじゃない。読めないふりをして引つ掻き回してるだけだ。

これは、性格ねじ曲がって、人一倍状況が読める私だから言えること。状況をごちゃまぜにして楽しんでる気がある。

最初は誰よりも優しい人だと思ったけど、笑顔だけだ。誰よりも心根が優しいのはクーンさんに違いない。

そう思ったことでさっきのことを思い出して、何となく戻り難しい思いがぶり返してきた。

それでも、歩を進めていれば勝手に目的地に付いちゃうわけで。二人揃ってクーンさんの執務室に入ると、あからさまに脱力しているその部屋の主の姿が目に入り込んだ。

「なんですか、その態度。あからさまに失礼ですねえ。」

思ってもない事を。

なんて、一連の出来事の所為で思わざるを得ない。私はいつものがらの半眼で睨めつけるだけにとどまった。

『今すぐ用意をしてしまいますね。』

二人には積もる話もあるだろう。今日は大切な事をしなくちゃいけないし。

用意が終わると、二人は挨拶をしてから食べ始めた。

「これは、美味しいですね。」

『すみません。いろいろとあったもので簡単にできるものしか作れなかつたんです。』

今日の夕食はスープとサラダとパスタ。カルボナーラだ。

「これが、簡単なのか？」

少々驚きながら味わっている様は、さっきのことを思わせないほど自然な会話だった。

『簡単ですよー。いつものお料理の半分の時間もかかってないですもん。』

自分も出来に満足しながら口に料理を運ぶ。簡単だけど美味しい一品ってとこだねえ。

「ネイさんは本当に非の打ちどころがない女性ですね。引く手数多でしょう?」

またまたこの人は。思ってもない事を。

『そんなことある訳ないじゃないですか。』

笑ってそう言い放った。そんな私の笑顔に笑顔を返してきたレークさんは、やっぱり強者だと思う。

だんだんレークさんって人が分かってきた気がする。

「これを食べ終わったら神殿へ行くことになる。それによって、今後の状況が変わってくるだろう。」

真剣な声に、思わず背筋が伸びる。これからどうなるか、と分からないけど、とりあえず流れに身を任せてみることにした。

## 再会 その2

食事が終わって、食器も片付けると、私はレークさんが用意してくれた神官服に着替える。白いワンピースみたい。

そんな感想を持つ服の上に、また白いマントを重ねる。

髪は下ろして耳の下で一つにまとめた。マントについてるフードを深くかぶって、って完全に危ない団体の人じゃん！

でも、顔を見られない方がいいんだって。髪もわざわざ下ろすのは、性別が女だってばれないようにって言う配慮らしい。

私の変装らしきものが完成すると、とうとう執務室を出て、神殿へ向かうことになった。

なるべく俯き加減で歩くように言われてその通りにしてるから、今どこら辺を歩いているのかは分からない。

そうでなくても、城の中をきちんと見て回ったことなんかない。逸れたら大変そうだな、と思いながら、前に居るクーンさんを追い、レークさんの横に並んで歩いた。

小さく呟くような声で会話を交わすことには、どうやら神殿はこの城の中心にあるらしい。

この城は真ん中を囲うように高い建物があり、その中心にはジァ教の神殿があるのだという。

「神殿は神聖な場所ですから、この神官たちはこの衣装でいるのです。これには無垢という意味が込められているのです。」

王は神の神子であり、私たちはその御子であります。そんな子供である私たちは純粹無垢でなければなりませんよ。」

どうやら戒律やら何やらと色々とあるらしい。その話は長くなりそうだったから、また今度と言ってごまかした。

レークさんって、自分の興味があることを話す時は長くなるから。別に、面倒とか思っていないけどね。

『神様を祀ってるんですよね？鏡盆って何のためにあるんですか？』

戒律はともかく、どう言う様式なのかは知りたい。

日本では鏡が御神体だったりもするけど、鏡盆もそういうものなのかな？

「鏡盆とは神と御子を繋ぐもの。神の心を映すものと言われています。」

神が気に掛けているのはこの国のことであり、国内の情勢を隈なく見せてくれるのです。」

へえ。そんな力があるんだ。

レークさんに見えてるものがどんなものかは分からないけど、そんな力があるんなら、私なんていらんじゃないのって思う。

ちゃんと確立してる訳だし、イチイチ<最後の乙女>とか引つ張り出さなくてもいいんじゃないの？

考えているうちに、どんとんと近づいて行く。

たどり着いた時。

神聖、という言葉が、初めて理解できた気がした。

そこは白でいっぱい。むしろ、それしかなかった。

顔はまだ隠したまま。何人かとすれ違ったから、フードもまだとっていない。だけど、一歩踏み入れた時、空気の違いに呼吸を思わず止めていた。

「もう顔を上げて大丈夫ですよ。」

そう言われてフードを取ると、広い空間が広がっている。今まで言ったことがある場所の中では一番無機質で、最も澄んでいた。

白い石造りで、浅く一段下がった円く広いところには、透き通った水が入っている。その真ん中には同じような白い石の腰辺りまである台があり、上に銀色のものが乗っていた。

あれがきつと鏡盆だ。

「どうした？」

優しい声が掛かる。それに応えようとしたのかは分からないけど、無意識に言葉が口から零れていた。

『…綺麗。』

でも、怖い。

それさえも零れ落ちたらしい。さっきと同じように問われ、私は目の前に広がる景色に囚われたまま答えた。

『ここで感じるのは神聖さ。それ故の畏怖。』

でも、今までで一番心地良い場所。』

口走ったことに戦いて、私は視点を横に居る二人に合わせた。

『ごめんなさい、変な事言っちゃって。』

私の言葉に対して、特に何を思った訳でもなかったのか平然としている。うるたえているのは私だけだった。

「いえ、変な事ではありません。むしろ、ネイさんが最後の乙女である、再確認できた気がします。」

そう言われてしまえば、困ってしまう。だって、そうなりたくないから。

困って周りを見渡し、水辺が気になって近づぐ。溜まっている水に手をつけてみた。

「あ…」

何か言いたげな呟きに、振り返る。二人は吃驚して固まっていた。どうしたのかを訊ねると。

「その水は、人によっては毒にも清水にもなり得るものなんです。」  
毒…？

思わず目を丸くして手を持ち上げる。どこも痛くないけど、ちょっと怖い。私、根っ子が真っ黒ですからね。

どれだけ人を言い負かしてきたか…  
恨まれてたって、当たり前だと思っ。

「ネイさんは、大丈夫ですよね。」  
納得しているレークさんをじっと見つめてしまった。彼の中でそれはもう決定事項らしい。

「もちろん神官である私は平気です。でも、面白いことに、クーン殿も平気なのですよ。」

ニヤツと笑ったように一瞬見えたのは、私だけだろうか。てゆーか、私の中のレークさんは、もう腹黒い人に格上げされていた。

「クーン殿の身の上はご存知でしょうか？」



身の上って、あれだよね…？陛下が腹違いの兄にあたるってヤツ。

昔は王族で、継承権を放棄したって言った。元王様に認知してもらえなかったって話しが、私の中では一番印象に残っている。

私がゆっくりと頷くのを見ると、面白そうに語りだす。クーンさんが止めようとしたのは、無意味らしい。

「王に認知されなかったのに、王族となり王位継承権が与えられたことを不思議に思いませんか？」

そう言われてみれば。認知されないってことは、王家には成れないはず。でも、継承権を持ってたってことは、何かしら原因があるってことだよな。

「クーン殿が確か4歳のころ、ここにいらしたことがあります。やんちゃ盛りだったために、城中を駆け回り、ここに入り込んでしまったのです。」

クーンさんにも、そんな時期があったんだね。きつと可愛かったんだろうな。

思わず想像してクスツと笑う。目を向けたその人は、少し不機嫌そうな顔をしていた。

『その頃のクーンさんに合ってみたかったです。』

私の発言に、ちよつと不満そうだ。その表情を見られただけで満足。

二人の顔を見合わせて、一番面白そうにしているのはもちろんのことレークさんだった。

「私はもうここで修業をしていたんですが、あまりにも印象的だったのではつきり覚えてますよ。」

入り込んで走り回って、床に滑ってこの清水の中に落っこちたんです。」

ああっ、やっぱり見てみたかった！身もだえするほど可愛かろう…

とか、勝手に想像してみちゃったり。女の子ですから、妄想は大得意です。

「普通なら、この水は毒となります。清水になることはそう滅多にありません。」

王家は平気ですが、興し入れしてくる方たちでさえも、毒となるのです。お年を召した貴族さまたちは彼を卑しい血として卑下しています、この清水が認めました。

駆けまわっていたクーン殿はこの水に落ちましたが、何ともありませんでした。そのために、継承権が認められることとなったのです。」

なるほど。そういう経緯があったってわけか。いちいち此処の人って面倒なことするんだね。簡単に認めちゃえばいいものを。

「別に、認められた訳ではないだろう。」

不満げに言っているクーンさんが、少しだけ可愛く見えて笑ってしまったのは内緒だ。

「さて、長話はここまでとしまして、最速当初の目的を果たすといたしましょうか。」

さっきと表情は変わらないのに、緊張感が走った。私は急に背筋が伸びた気がして、その場に佇む。

促され、一歩、また一歩と近づく。そうするにつれ、何かが変わってしまふ心地がして、足が重くなった。

振り返ってみると、レークさんは相変わらずの笑顔を張り付けて、先へと促している。もう一人の人物は、射抜くような強さの視線で私を捉え、それでもどこか見守ってくれているような温かな雰囲気を感じていた。

進まなきゃ。

思いのままに、歩を進めた。

手を伸ばす。鼓動が速くなった。

触れる瞬間に戸惑い、それでも手を伸ばす。

ひんやりとした感触がした瞬間に、それは眩いほどの感色に発光した。

目を開けていられない。だけど、自分の視界にはしっかりと鏡盆

が見えている。触れているものは冷たいのに、包まれる光は温かい。

…不思議な感覚だった。

“名を…我が名を呼べ…”

囁くような声があった。美しく、この世のものとは思えない。

何とも言い難い感覚に囚われた私は、いつの間にか気付かずに涙を流していた。

名前？貴方の名前なんて知らない。

“知っているはず。この世界に来た時に教えたものがあるはずだ。呼べ、ならば我は応えん。”

この世界に来た時…？アホ神には会ったけど…

…あ！

私は、思い出していた。

『ジュノワール』

次には光はさらに眩くなり、完全に目を開けていられなくなる。しかし光が瞼の裏まで伝わって来た。

徐々に弱まる光。余りの強い刺激にしばらくそのままでもいたけど、声を掛けられてゆっくりと開くことになった。

「やあ、元気にしていたかい？」

嫌な予感はしてたんだよ。期待：はしてなかった。だけど、そう言う類のものを裏切らないってのが、このアホ神だ。

本当に神様だったとは…世も末だよ。私、この神に殺されそうになっただけなのに。

「君ってば、全然呼び出さないんだもん。僕、焦っちゃったよ。」

うわー。緊張感の欠片もない。どうにかしてよ、この人。いや、この神。

本当なら敬うべき存在なんだろうけど、そんな気がしないのは何故だろう。

それはきつと、今度は木馬に乗っている所為だからだ。

## 守人

『あなた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃって！これからの生活、どうしてくれるの?!』

緊張感の欠片もないこの御方は神様であるらしい。

…確かに見た目綺麗だし、そんな感じはしないでもないけど、認めたくないって思っちゃうのも仕方ないと思う。

さつき、なんで泣いちゃったんだろう。私の涙を返せ！

「なんだい、あの時みたいに熱烈な視線を向けてくるなんて。

あ！この馬はあげないよ！」

『いらん!』

デジャヴ…

また誰かからぱくって来たんだろうなあ。

ホントに神様かよ！と言うツツコミを、誰かに委ねます…

「ネイさん、そこに神様がおられるのですか…?」

いつにも無く真面目な表情。レークさんにはそこに光があるよう

に見えるらしい。一方のクーンさんは何の変哲もない景色にしか見え  
ないんだって。

って、そんな事言ったら、私って何も無いところに話しかける変  
な人じゃない？

この神に付き合っただけで会話なんてしてたら、私の人間性疑われちゃ  
うよ。

「あ、君今失礼なこと思っただろう。」

何でわかるのよ。変なところ敏いって言うか、自分の悪口に敏感っ  
て言うか。

「一応神様だからね。分かるさ。」

うわー。自分で神様言っちゃったよ！

私には頭の変なお兄さんと思えないね。

「君、もう少し包み隠すってことを覚えた方がいいよ。」

私の考えていることがことごとく分かるのか、少し嫌なものを見  
るような目を向けてくる。だけど、私は気にしない。

言いたいことははっきり言わないと！特に、こつこつテンポや空  
気が読めない人にはね。

『じゃあ神様は、もう少し人を思いやることを覚えた方がいいよ。』

失礼だろうけど、本当にそうだ。

だって、私初対面なのに思いやりがないと罵られた上に、砂漠で脱水症状と熱射病起こして倒れたんだもん。

神様がもう少し考えてくれてたらそんな事にはならなかったし、現代の日本社会では夏に熱射病で倒れる人が少なくはない。そのまま命を落とす人だっているんだから、本当に危ない。

「まあ、それに関しては考えない事もないが…」

あ、ないんだ。いい傾向だね。

「で、詳しい話を進める前に、＜最後の乙女＞の証明のため、守人二人を選び抜こう。」

『守人？』

ってゆーか、私が＜最後の乙女＞なのは決定事項な訳？

アホ神に背を向けてくると思考をめぐらせていると、何やら難しそうな顔をする二人が目に入った。

何て言うか…物申したいって顔してる。

『…何か？』

「ネイさん、いくら貴女が神を信じておられなくても、そこに神が在るとわかったのなら、敬う心を忘れてはいけません。」



はい、早速お説教をいただきましたー。

でも、この人の、いやこの神のどこを敬えと?!

まさかの子供の遊び道具、木馬に乗ってるんだよ?てゆうか、木馬なんて私も初めて見たし。

そんなナリの神をどう敬えって言うんだ。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイはく最後の乙女>で間違いないんだな?」

「あ、こいつあの時のガキ!水に落っこちた時は面白かったなあ。」

「やっぱりく最後の乙女>でしたか!神がそこにおられるのですね  
!」

．．．大騒音。

私が答えるよりもまず。

『全員黙れ!一度に喋るなー!』

私は聖徳太子じゃない。10人どころか、3人の話だって同時になんて聞けやしないから。

って訳で、キレた。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

静けさが広がり、私は満足して三人の顔を交互に見る。それぞれがなんとも表現し難い表情を浮かべていた。

『まずは確認します。存在はともかく、二人はジユノの声が聞こえますか？』

「なんで省りゃ・・・」黙ってって言ったでしょう？」

笑顔を張り付けて言うと、押し黙る。

最初からそうしててよね。何度も注意するの、面倒だから。

ジユノから二人へと視線を移すと、横に首を振っている。ってことは、ジユノが言ったことを通訳する必要があるってことだな。

『ジユノ、さっきの守人の説明をお願い。』

「それが神様に対する態度かい？えーと…まあ、いいとするか。

ネイがく最後の乙女であることを証明するための者が二名必要になるんだ。その人には、君を介して僕を見えるようにしてあげらんだよ。」

私一人がアホ神が見えてるって言うても、証明するものがないか

ら守人を作る必要があるってこと？

ややこしいなあ。

『それで、その人たちを決めるのはジユノなの？』

「ああ。調度良いだろう、その二人が。頭数も揃ってるし。」

……

そんなテキストでいいんかい！

ジユノの指した先には、クーンさんとレークさん。確かに二人が揃ってるけど……いささか安易すぎませんか？

私が急に視線を向けると、二人は私をずっと見ていたのか目があった。

「さあ、説明は一度で終えた方がいい。その二人を君の横に呼んで。」

こいつ、ちょっとだけ私に似てるのかも。とか、思ってたげんなりしちゃうけど、思いついたら即行動に移るところなんかそっくり。

本当はもう少し詳しく話をしてもらってから、状況を把握してから、行動に移したい。だけど、このアホな神様は早くと催促してくる。

仕方なしに嘆息を溢し、二人を手招きした。

『二人とも、こちらに来ていただけですか？』

何事か、と言う顔で近づいてくる。てゆうか、さっきからずっと混乱したような表情を二人は浮かべていた。

でも、それは私も一緒。

私だけ神様と話しているからと言って、きちんと状況が出来ていくかと言ったらそうじゃない。むしろ、状況は悪化している一方だ。

「君を挟んで左右に立ってもらって。」

ジユノの指示通りにする。でも、ここでちょっと待ったをかけて、二人に問いかける。

『貴方たちを私の運命に巻き込むことになります。』

…正直に言っ、私はお二人にこれ以上迷惑をかけたくはありません。もし嫌なら、これから私も何が起こるのかはよく分からないし、理解も出来ていないけど、断っていただけで構いません。』

どうかを訊ねると、レークさんは一秒と間を置かず了承をしてきた。

神官なのだから、神の関わることに自分の身を置くのは当たり前だし、当然の務めなんだって。

嬉々として言って見せたから、本心なんだと思う。

「ネイに関わることにについては大丈夫だ。むしろ歓迎する。」

しかし…俺のような卑しい血と呼ばれるものが、神に関わっていないのだろうか？」

自分のことを“卑しい血”と呼ぶなんて。思わず眉を顰めてしまった。

クーンさん、いい人なのに、周りの評価はどうしてこう、伴っていないんだろう。誰よりも努力して、誰よりも高みを目指せるような人なのに。

って、真剣に考えてしまったのは私だけだったみたいだ。

「オツケー、おっけー、オールおっけー！」

ほかのヤツらになんか任せてられないでしょ。この清水が認めた人間なんて、少ないからねえ。」

本当に、緊張感と言うものを持って欲しいと願ってしまわずにはいられない。なんでこんなに間が抜けたような発言しかできないかなあ、と思いつながら、表情が変わらないクーンさんを見て、ジユノの言葉が聞こえていない事を思い出した。

「大丈夫だって言ってます。清水が認めた人間は数少ないから…って、清水が認めた人間しか守人にはなれないの？」

途中から、話しかける人変わっちゃった。

視線をジュノに向けると、うんうんとうなずいている。てゆーか、木馬をギコギコ動かすの、やめなさいよ。

「守人？私も初めて聞きましたが、清水が認めた人間が選択される何らかのものなんですか？」

『うん、＜最後の乙女＞の証人らしいです。』

二人にこんな事言っちゃあなんですが、このアホ神、残念過ぎるんで、会話を交わした時に、がっかりしないで下さいね。』

私の言葉にジュノは少々不貞腐れてるけど、事実だもん。先に言っとかないと、神様に期待してる分だけ、会ったときに残念な思いをするに違いない。

一通りの確認が終わって、私たちはいま、鏡盆の前に立たされている。右手をクーンさんの手に、左をレークさんの手に添えていた。

「じゃ、さっき教えた通りに。さあ、はじめようか。」

映画監督ばりにしているジュノは放っておいて、さっさと事を進めることにした。

## 守人 その2

“ よーい、アクション！”とか、そんなの映画がないこの世界のどこで覚えて来たんですか。

一度手を離し、鏡盆の中の水に触れる。それは、下に広がる水よりも温かく、柔らかさを帯びていた。

清水で濡れた手を、二人に預ける。

『 レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を授け、最後の乙女への証人として守人の役を授けます。』

受け取っていただけますか？』

気恥ずかしい。上から目線で言ってる感じが、何とも気分が悪い。

けど、ジユノ曰くおごそかな空気の下に行われなくちゃいけないからって、お得意の猫かぶりでそんな空気を醸し出すように言われた。

「はい、貴女に忠誠を。」

膝間づいて、手の甲にキスを落とされる。

あーっ、恥ずかしいったらないよ！

顔が赤くならないように、つてのはムリだけど、そうであっても表情は変えないように心がけた。

『クーン・リッキンデル・デューク、これより貴方に神の加護を授け、最後の乙女への証人として守人の役を授けます。』

受け取っていただけますか？』

「…貴女に忠誠を。」

そう言って落とされるキスは、先のものよりも恥ずかしくてドキドキする。少しかさついた冷たい唇が触れたところが、少しだけ熱くなった気がした。

と、クーンさんの唇が離れた瞬間、私が鏡盆に触れた時のように光が放たれ、神殿を埋め尽くす。

建物の中にいるのに、風が吹いて神や衣服を揺らした。

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そう”

あ、またこの感覚。涙が目の奥から自然と湧いてきて、流れ落ちていく。

風と光が止んだ。目を開ける前に、私の頬に手の感触がする。

ゆっくりと目を開くと、クーンさんの手が私の頬を伝う涙を拭ってくれていた。



「やっだー、僕の前で僕の乙女とイチャイチャしないでよーう。」

…やっちゃまったよ、この神様。

最も敬われるべき存在のはずなのに、一発目に関抜けな姿を吐露していた。

「神、さま…このお方が…」

レークサーン。この人、そんなに熱い視線を送れるような人じゃありませんよー。

聞いてますかー？

って、無理だよな。この国の神官様なんだもん。ずっと、恋焦がれていた存在に違いない。

それよりもまず。

『私がいつあなたの乙女になったって言うの。』

僕の乙女、とかイチャイチャ、とか聞き捨てならないぞ。

「この方が、神…」

例によって、クーンさんも固まっております。

敬う存在なのは知っている。でもその前に。

何故この神の格好を突っ込まない。木馬を前後に揺らしている、この見るも見事に残念なイケメン神様ジユノワールにもっと言うべきことあるでしょ！

『ジユノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もつとほら、神様っぽい感じで光を背負ってみるとかした方が、見栄えがいいよ？』

何ともフランクに話しかけた私を、レークさんは驚愕の表情で見えた。てゆうか、さっきから私この口調だったし、今さら驚くことでもないと思う。

「やあやあ、守人に選ばれたお二人さん。僕は神様。名をジユノワールと言う。」

偉そーに。

私は半分睨みつけるような顔で、ジユノの話を聞いていた。

「守人に選ばれた二人は、僕と乙女の証人で在り、乙女を守るべき存在だ。制約を交わした限り、裏切りは許されない。」

先に口ずけた際の清水が、裏切ったときには毒となりその身体を侵す。

いいね？」

ちよつと、ちよつと、ちよつと。そんな物騒な話聞いてないんですけど？！

そう言ったら、だって言っていないもん、とか抜かしやがった。いつかいつペンシメテやる！

「二人は今、僕の声が聞こえ、姿が見えているはずだ。」

そうだね、と訊ねられ頷いてる二人は、神の存在に戦っているみたいだ。最初の言葉を最後に、さつきから口を開こうとしない。

何て言うんだろう。恐れ多い、って感じ？の態度をしていた。

「彼女から手を離すと二人は僕の声を聞く事も存在を見る事も出来ない。もっとも、神官の方は僕の存在を光で感じ取ることができるだろうが。」

やっぱり、レークさんってすごいんだ。神官も家系だって言うてたし、なんか特別な力があるのかな、なんて思った。

「僕がネイをく最後の乙女として送り込んだのは、地球の現代における知識を使って、この国の乱れた政治を正して貰おうとしているからだ。」

その意味失礼だろうけど、よくわかる。

「ここのお偉いお貴族さまは何と言っても働かないし、その地位を振りかざしてるだけだ。ミアアが税金ドロボウって呼んでたけど、全く持つてその通りの行動や生活をしている。」

『私、そんなに知識ないけど、大丈夫？てゆうか、なんで私が最後の乙女？だなんて仰々しいもの選ばれたわけ？』

そこがよく分かんないんだよね。私じゃない方がいいじゃん。

「もともと二ホン人を選んだのは、髪色や目が神秘的だからだよ。それに…」

それに？そう小首を傾げてみると。

「可愛いっ！」

な、何事？！ジユノがご乱心じゃーい！

『ちよ、ジユノ！離れてよー。』

「つれないなあ。そんなところも可愛いんだけどね。照れなくても良いんだよ、乙女。」

話を聞け！私がいっつ照れた？キレたのには間違いないけど、なんでこのアホに対して照れなくちゃいけないって言うの。

てゆうか、ほっぺたつつんつんするのやめて！

「二人も思っただろう？髪や目はさることながら、肌の色や華奢さ。」

まさに乙女と言う感じだろうか？」

そんなテキトーに私も決めたいわけ？訳の分からん基準で人を許可なく異世界に飛ばすなよ。

こっちに来れたことは結果的に良かったけど、ジユノに対しての評価はガタ落ちだ。

「そうですね。儂げなところも、乙女には合っていると思います。」  
クーンさんは未だに口を開いていない。レークさんはやっとこさ、  
って感じた。

そんなにジユノに緊張すること無いと思うんだけどなあ。

「だろう？って言うのもあるんだけど、実は僕が異世界旅行をした  
ことがきっかけで、歪みが出てしまってるね。」

君の運命を変えてしまったんだよ。」

なんだそのカミングアウト！

「…思い出してらん。」

次の瞬間、頭の中を映像が過った。振り返ったときに目に入ったのは…

『きゃあああああああ！』

勝手に悲鳴が喉から飛び出していた。頭を抱え、立っていられなくなり、その場に崩れ落ちる。

「ネイ！」

急に温もりに包まれた。クーンさんの腕が、私を包み込んでいる。レークさんは私の肩に手を置いて、心配そうに覗き込んでいた。

二人の優しさが、私を正気に戻してくれたみたいだ。だけど。

『私…死のうとしたの？』

涙が溢れて止まらない。

私はビルの屋上に立っていた。表情なんて何もなくて。何の変哲もないままに足を放している姿が、脳裏をよぎった。

「…ああ。世界線が変わってしまったんだよ。ここに来た君は、Aという世界に居た。」

だけど、僕が移動したことで歪みを作り、死ぬ予定でもなかった君が自殺を凶った。これはBと言う世界にいる君がした事だけど、

予定外の出来事。

だから、君の存在自体をこの世界に引っ張り込んだんだ。」

うそ…そんな…

私、確かに引き取られたところで両親に蔑ろにされてた。だけど、死のうなんてするはずない。だって、おじいちゃんとおばあちゃんの思い出があるもの。

二人が先に逝くことは、当たり前のことだから仕方がない。けど、それは事故のせいだった。父さんはそれが私の所為だと罵った。私が関わるとロクなことがないと言った。私が関わったから、二人が死んだと言った。

…私は、運命を憎んで飛び降りた。

…ちょっと待って。今の私の思考はおかしい。

「君が混乱するのも無理はない。乙女、今君の中には、二人の自分の記憶が混ざり合っているんだ。AとBの両方の記憶が混ざり合って混乱しているんだよ。」

残りは明日話そう。今日は一度帰って落ち着くといい。」

私は涙を溢し続けながら、一度だけ頷いた。



## 混乱と救い

ジユノは眩い光と共に消えた。

何か言っただけど、全然頭に入って来なくて覚えていない。

「ネイ、帰ろう。立てるか？」

時間をかけ、何とか思考をいったん止める。私はずっと、クーンさんに縋りついて泣いていたらしい。

迷惑をかけまいと自分の足で立ち上がるつもりとしたけど、上手く力が入ってくれなかった。

「レーク、明日の会議はお前が受け持つてくれないか？ちょうど鏡神祭のことがあつたらう？」

「わかりました。その様子だと、ネイさんを一人にしておくことはできないでしょうし。出勤は午後からと言つこと取り計らいましょう。」

私一人の力では、もたないですから、宰相さまにもお伝えください。」

レークさんがそのまま急いで神殿を後にする。私は、ちゃんと挨拶すらできなかった。

「…帰ろう。」

そう言って、私を横抱きに抱えてくれた。

『ごめん、なさい…私、重たい…』

「重くなどない。ただ、安定感をとるために、首に手を回しておいてくれ。」

いつもなら恥ずかしいと思う事なのに、さっきから私、少しおかしい。

迷いなく言われた通りに腕を回し、クーンさんに顔を埋めながらまた泣いた。縫りつくようにして、その温もりに安心感を求めようとしてしまう。

結局そのまま馬車まで連れて行かれ、乗っている間もずっとクーンさんの膝の上に居た。

お屋敷に着くと、そのまま抱きかかえられていく。中に入ると、女中さんたちがオロオロしているのが分かった。

だけど、いつもみたいにはできないの。辛くても、頭にきていても笑顔を浮かべることなんて簡単だったのに。

「湯あみは明日に回せ。何か温かい飲み物を用意した後、今日は誰もネイの部屋に近づくな。」

クーンさんはそう言うと、私を抱えたまま部屋へと連れて行って

くれた。

ベッドに降ろされる。だけど、なかなかクーンさんから腕を離すことが出来なかった。…温もりが離れて行ってしまうのが、怖かった。

「悪い、着替えを済ませたら急いで戻る。」

頭を撫でられ、背中を撫でられ、宥められる。私は何とか腕を離した。

足音が去って、ドアがしまる音がする。急に寂しくなっていて、また涙が零れ落ちた。

ベッドの上で体育座りをして、自分の膝に顔を埋める。自分で自分の身体を守るように、足を抱える。混乱はまだ治まってくれそうになかった。

不意にノック音がして、顔を上げる。クーンさんが戻って来たと思っただからそうしたけど、それはメイドさんだった。

「温かいお飲物をお持ちいたしました。それと、お召し変えをいたしましょう。」

私はそれに応えようとはしなかった。メイドさんはそれでも優しく接してくれ、帰って来た状況が状況だったろうに、それを聞くことなく私を着替えさせる。

まるで子供のように成すがままにされ、メイドさんは着替えさせ

ることができると出ていこうとした。

咄嗟に声をかけ、クーンさんのことを聞くと。

「シユリキスさまと話しておられます。すぐにお戻りになられると思いますわ。」

そう教えてくれると、今度こそ部屋を後にした。だけど、今一番会いたくなかった人かもしれない。

あのメイドさんは、おばあちゃんを彷彿とさせるから。

私はさつきよりも小さく蹲った。

…早く、クーンさんに会いたい。

なんでそう思ったかは分からないけど、ただ会いたかった。その温もりに縋りつきたかった。

そう願えば願うほど、時間が経つのが長くて。祈りを募らせるほど、静かな部屋が辛かった。

「ネイ。」

ドアが開かれ、ベッドまでやって来たその人に、自分から抱きついた。

『…じつ、ん…』

嗚咽が零れる。噛み殺しているはずなのに、理性が崩壊しつつある私は、もうそろそろそれが出来ないことが分かっていた。

優しい手が頭を撫でる。次の瞬間には、大声をあげて泣いてしまった。

「…落ち着いたか？」

『はい。』

鼻を吸いながら、涙を手で拭う。クーンさんの胸元は私の涙でびしょ濡れだった。

「ゆっくり整理しよう。」

ホットミルクを受け取り、小さく頷く。

クーンさんは、泣きやむまですっと頭を撫でてくれて、胸を貸してくれていた。

途中からなんで泣いてるのかさえ分からなくなっていたの。頭の中を整理することが、今一番大切な事なのかも知れない。

「頭の中を整理しよう。何があったのか、聞きたい。」

真摯な態度に、向き合った。泣きじゃくってる私をずっと温めてくれて、なおも優しく接してくれてる。本当に優しい人だと思った。

『クーンさんに、話した私は、どんな私でしたか？』

言葉が詰まる。上手く話せなかった。

困ったように微笑むと、話した通りに昔の私のことを話してくれる。

それを私は知っていた。 فقط。

『そのことは覚えているのに、もう一人の私の記憶もあるんです。』

記憶は途中まで一緒だけど、ある時期を境に全くの別物だった。

両親が離婚した時、私は父方に引き取られ、祖父母と共に暮らしていた。父はたまにしか帰って来なくて、外に恋人がいることは祖父母と共に私も分かっていただけ。

それでも、もし父が再婚した時にはついて行くことと考えられるくらいには、仲の良さは戻っていた。

それなのに。

祖父母と私で旅行に出かけたあの日、事故に遭ってしまった。駆けつけた父は私に向かって。

お前が関わった所為で

と、冷たい視線を向けられた。

全部ぜんぶ、私が悪い。今までの不幸なできごとは、全部私の所為。

父の言葉に胸を突かれた。

…その日から私は多くの感情を失った。頭の中をただ私に関わると人が不幸になると、考えるようになった。だから、他人と関わらなくなつた。

きっと私が死んでも誰も涙を流さないし、誰も心動かされたりしない。…生きる意味を失った。

そして、早く祖父母に会いたいと最期に思つてビルの屋上から飛び降りた

「自ら、命を断とうとしたのか…」

私は、小さく頷く。自分のことなのに、そうじゃないような感覚。だって、これはもう一人の私の人生だったから。

『私は、今の私は、クーンさんに自ら話した私です。でも、もう一

人の、人生が狂ってしまった私も私なんです。』

だから、混乱している。どっちが本当の自分なのか分からない。

思考を持っているの。二人分の。

大学生になる前までの私の記憶と考え方、自殺をした高校2年生の私の記憶と考え方が、ごちゃ混ぜになってる。

私が私一人じゃないみたいで、少し気持ち悪い。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

クーンさんの言葉が、私の今の状況をはっきりと表していた。

「…泣き疲れているんじゃないのか？」

空になったコップを私から預かり、近くのテーブルに置いてくれる。

動作が少し不自然に見えた。ベッドに腰掛けているクーンさんの胸に私しがみついていたから、上手く身動きが取れないようだ。

迷惑だと分かっている。それでも、私はそれを止めようとはしなかった。

『少し、疲れました…』

声は鼻声だし、大声で泣いたから掠れている。目は腫れぼったく



て重く、身体はだるい。

「今日は考え疲れただろう？もう寝る。」

私を枕元へと運び、布団をかけてくれる。でも、一人じゃ寝られそうになかった。

『独りに、しないで…』

いつもの私なら、強がって一人で寝てただろう。でも、今日も  
う一人分の私がいるから。考え方が、一つに定まらない。一人で  
大丈夫だと思ってるのに、一人になりたくないと思う。

違う人間の記憶を引き継いだみたいだったのに、脳裏に浮かぶ身  
に覚えのないような映像の主観は私だった。

「一人に、なりたくないのか？」

目も合わせないまま、頷く。

しばらく無言が続き、クーンさんがどうしたらいいのか迷ってる  
ことが手に取るように分かった。なのに、自分の言葉を覆す気には  
なれない。

「…わかった。」

その返事に顔を上げると、少し難しそうな顔をしている。

やっぱり、迷惑だったよね。

「常識を考えると、少し憚られるが。」

小さく唸るように言うと、隣へと滑り込んでくる。そして、私を抱きしめるようにして、布団へと納まった。

ドキドキする。でも…安心する。

私は少しだけ戸惑って、それからクーンさんの胸に縋りついた。頭を撫でてくれる手は優しい。安寧を私に届けてくれる。

「…ネイ。少しだけ、お前の考えに意見したい。いいか？」

囁く声が、二人の近さを物語っていた。泣き疲れていた私は、眠たさのために頭が上手く働いていなかったけど、小さく頷く。それが分かったのか、なおも囁きながら言葉を続けた。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かないと、誰も心を動かされることはないと言ったな。だけど、違う。」

驚いて、顔を上げる。私を見ているクーンさんのその目が、とても優しくかった。

「今は、俺やレーク、城に居る人だつて、ネイと関わった人間はみんな明るくなった。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。」

みんな、お前のことを想っているよ。」

…救われた気がした。

みんなの笑顔が浮かぶ。それはどれも優しく、温かった。

睡眠と言っまどろみの中に身を投じる前に見た最後の映像は、ク  
インさんの笑顔。それから

「 ……よい夢を。」

温かい言葉だった。

閑話？（前書き）

クーンさんsideです。

閑話？

『お疲れ様でした。』

書類を届けて戻って来ると、ネイがお茶を用意して待っていた。

「ああ、今日は助かった。」

今日はいろいろと視線が刺さる。廊下を歩くたびに好奇の視線が自分に降り注がれていることが分かった。

普段から、その存在故に見られる事も多かったが、こつもあからさまだと疲れる。

俺は椅子に身体を放り出した。

『…ごめんなさい。』

小さく謝る声。その表情は、自分を責めているものだ。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言ってくれたんだ。嬉しいよ。」

それが俺の正直な気持ちだった。

この国の役人は働かない。しかし、力だけはある。だからこそ、俺も宰相殿も黙って、従っているフリをしていた。

面倒なことから目を背け、状況を悪化させたのは己の身から出た鏡。ネイが言ったことは当に正論だった。

正直なところを述べた俺だったが、ネイの表情は浮かない。かなり自分のしたことを省みているようだ。

「ネイ？どうしたんだ？」

辛そうな表情を見ていることなど、出来なかった。手をさしのばし、少し腫れてしまっている頬に触れる。触れた瞬間にピクツと動いたが、後はされるがままになっていた。

この白く、綺麗な肌に傷をつけたヤツが恨めしい。

そのまま何度か手を往復させると、ネイの表情はますます燻っていた。

「そんな顔するな。ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

…一瞬、泣くかと思った。

そう思ったら、自分を律していることなどできない。細いその腕を引き、自分の腕にすっぽりと収める。体温を感じて、漸くネイがそこに在ることが確認でき、一安心した。

「泣きそうで悔しそうで、辛そうな、そんな顔見たくないんだ。」

何を言っているんだ、とすぐに思い返す。俺らしくもない、と。だが、俺に包まれている少女は何も言わない。

しばらくして、口を開くと。

大丈夫、私笑えます。そう言った。

笑えます、ということとは、無理に笑うということだろうか？

本当は笑いたくもないのだろうか？

今、彼女がどんな思いでどんな表情をしているのかが気になって、再度抵抗を見せた時には、簡単に腕を解いてやる。でも、そこに居た少女は今にも消えてしまいそんな笑顔を浮かべていた。

「悪いが、俺には大丈夫そうには見えないな。」

『大丈夫。』

そう言われた時には、突き放されたような気がした。食事を用意しに行くと言って飛び出したネイが、一生手の届かない所へ行ってしまう気がして手を伸ばしてみたが、当然のことながら届きはしなかった。

食事を済ませ、神官服を身に纏ったネイを神殿へと誘う。その姿は非常に儂げで、神聖だと思った。

おそらくネイこそが最後の乙女だ。

でも、それを確信させたのは。

『…綺麗。でも、怖い。』

その言葉だった。自然と零れ落ちた言葉は、本心を反映させている。

『ここで感じるのは神聖さ。それ故の畏怖。』

でも、今までで一番心地良い場所。』

雷に打たれた様な思いがした。

ネイはく最後の乙女に違いない。こんなにもこの場所が似合い、俺の目には少しばかり眩しく映る。

それは俺だけの思考に留まらず、レークが口にした言葉がまさに同じだった。

そう長話もしてられない。行動に移させたのは、レークだった。

戸惑うように一歩ずつ、鏡盆へと近づいて行く。振り返ったときのネイの不安そうな顔を、俺はただまっすぐに見つめる。それしかできなかった。



ネイが触れた瞬間、鏡盆が光を放つ。後ろから見ていると、ネイがこの世界に突然湧いて現れたように、どこかへ行ってしまつのではないかと言う不安に駆られた。

しかし、これは神聖な儀式に他ならない。私情によって邪魔立てをすることは許されなかった。

『“ジュノワール”』

小さく呟かれた言葉は、名を呼ぶことが許されていない、誰もが知っている神の名だった。

光が一層強くなり、ああ、彼女が<最後の乙女>だったかと、腑に落ちた。

しかし驚いたことには。

『あなた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃって！これからの生活、どうしてくれんの?!』

黙っていたかと思えば、急に声を荒げる。誰かと、対話しているようだった。

『いらん!』

怒気を含んだ声は、誰かを糾弾している。俺が見える景色には、全く変化などなかった。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイは＜最後の乙女＞で間違いないんだな？」

「やっぱり＜最後の乙女＞でしたか！神がそこにおられるのですね！」

俺とレークの質問は、ほぼ同時だった。今まではネイが独り言を言っていたようなもの。だからこそ、口を挟んだのだが、どうやらイライラしていたらしい。

『全員黙れ！一度に喋るなー！』

怒りだしてしまった。俺には自分の言葉ともう一人の男の言葉しか聞こえなかったが、ネイに見えているらしい人物も同じ時に口を開いたらしい。

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

静けさが広がり、ネイは満足して三人の顔を交互に見る。

『まずは確認します。存在はともかく、二人はジュノの声が聞こえますか？』

ジュノ…？ジァ教の神、ジュノワールのことだろうか？確か、先程名を呼んでいたようだが。

『黙ってって言ったでしょう？』

笑顔で起こるその様は威圧的で、そこに在られる者に怒りを向けていることがよく分かった。しばらくそうやって話していると、嘆

息を溢してから我々に手招きをしてくる。

『二人とも、こちらに来ていただけませんか？』

一通り守人の説明を受け、俺は自らの意志でそれを受けようと決めた。ネイの傍に居られる。だからこそその選択だ。

『レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を受け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。

受け取っていただけますか？』

鏡盆の前で行われるそれは、厳かな空気を纏っていた。しかし、ネイは自分の言動が恥ずかしいのか、顔を真っ赤にさせている。

「はい、貴女に忠誠を。」

レークが膝間づいて、ネイの手の甲にキスを落とす。それに少々いらっとしたのは、気のせいではないだろう。

『クーン・リッキンデル・デューク、これより貴方に神の加護を授け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。

受け取っていただけますか？』

「…貴女に忠誠を。」

自分よりも先に、レークが同じことをしたのかと思うと頭に来る。だから、少し長く唇を落とした。



閑話？ その2

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そう”

またもや光が視界を覆い、声が響いた。

その美しさ。聞き惚れてしまうほどだった。だが、見上げると少女が涙を流している。すぐさま立ち上がり、その涙を拭っていた。

「やったー、僕の前で僕の乙女とイチャイチャしないでよう。」

間の抜けた喋り声。微かにさっきの声だと判断できたが、どうも気が抜けてしまう。

「神、さま…このお方が…」

レークは熱い視線を送っているが、俺はどうも気が抜けてしまった。

『私がいつあなたの乙女になったって言うの。』

神に向かつての堂々とした物言い。流石ネイだ。

「この方が、神…」

見目麗しいその御人は、木で作られた馬のようなものに乗っていた。

『ジユノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もつとほら、神様っぽい感じで光を背負ってみるとかした方が、見栄えがいいよ?』

相変わらずの口調。二人の会話と、レークの態度に温度差を感じ、自分はと言う態度を取るべきか計ろうとしていた。

「やあやあ、守人に選ばれたお二人さん。僕は神様。名をジユノワールと言う。」

そこから俺たち二人が乙女の証人である守人であること、ネイはその知識を使ってこの世界を変えるために来たことが告げられた。

その際、神にはいつさいの緊張感の欠片さえも見受けられなかった。

経緯が語られる毎にネイの顔は難しくなっている。しかし、神は変わらず呑気なものだった。

…ある一言が語られるまでは。

「思い出してごらん。」

神にそう言われた次の瞬間、ネイは切り裂いたような悲鳴を上げた。

『きゃあああああ！』

頭を抱え、その場に崩れ落ちる。咄嗟に手を差し伸べ、抱きしめる。その小さな身体は小刻みに震え、涙がとめどなく溢れ出していた。

ネイにはもう一人の自分の記憶があるというのが神の話だ。しかし、それが俺にはよく理解できなかった。

ネイはネイに変わりないだろう？

あまりの混乱に、話は明日に回すと言い、明日になれば落ち着くので早々に眠らせるように言われた。

ネイを抱えて家まで連れていく。その間ずっと、俺に縋りつくようにしていたネイは、俺が部屋を出ていこうとするのを止めるほど一人になるのを怖がっていた。

それでも、やらねばならないことがある。一人残して行くのは気が引けたが、自室へと戻る。早くに着替えると、伯父の部屋へと急いだ。

「珍しいな、お前が来るとは。」

少し面白そうに、目を弧の形に細めていた。どうも腹が立つ。

しかし、だからと言って文句を言うつもりはない。早く、ネイの元へ行かなければならないのだから。

いつも意志の強い瞳を持ち、真っ直ぐに俺を見つめる。その瞳が、涙を溢れさせるその様は俺の心を乱す。

早く、傍へ、と。

「明日のことを頼みに来ました。」

「明日…?」

何事かと不思議そうな表情。そうか、と思い、事情を説明した。

「ネイはやはり最後の乙女>であったか。それで、ネイの様子はどうなんだ?」

これは内面を話すことになってしまつ。それは、ネイが嫌がるはずだ。

「何やら混乱しているようで、今は傍に居てやることしか出来そうにありません。ですから、明日の朝から昼までの半休をいただきますい。」

一人にすることなど出来かねますから、どうかお許し願えますか?」

これが俺の我儘だということは分かっている。仕事を投げてまでやることではないと、理解できている。

それでも、俺が傍に居てやりたいと思うんだ。



「…いい顔をしているな。お前にしちゃ、いい傾向だよ。」

何やらニヤニヤとした顔で見られている。こういう空気あまり好きではない。

何がいい傾向なんだ…？

理解に苦しむが、一応了承を得た。俺は急いでネイの部屋へと向かう。普段なら何て事の無い距離だが、少し遠く感じた。

いつの間にか駆けだしていたが、廊下で女中のダルシアに呼び止められる。

「ネイさまが、クーンさまをお持ちしております。何かあったかは分かりませんが、片時も離れずにお傍に居てあげて下さいませ。」

それを聞いて、分かったと一言だけ残し、また駆けだす。

扉を開いてすぐ傍まで行くと、夜着に着替えたネイが足を抱えて小さくなって泣いていた。

声をかけると。

『…じっ、ん………』

我慢するように嗚咽を漏らし、俺に縋りつくように抱きついてきた。

それから、どれくらいの時間が経っただろうか。

大声を上げて泣きはじめたネイは、次第に声が掠れていき、今は鼻を嚙るくらいになって落ち着き始めていた。

「頭の中を整理しよう。何があつたのか、聞きたい。」

そう切り出すと、素直に話し出す。その内容は、俺よりも、そして以前ネイが話してくれたものよりも、遥かに悲惨だった。

両親の離婚、育児放棄、祖父母の死、父の暴言、そして自らの死。

ネイはそれを他人事のようではあつたが、真実味を帯びて話した。神が言っていたことが如実に表されている。

今のネイは、前のネイにもう一人のネイが重なっているようだった。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

小さく頷いて、また一筋涙を流した。それを、不謹慎にも綺麗だと思つた。

ネイはかなりの時間、泣いていた。夜ももう更けていて大分遅い時間だろう。

「泣き疲れているんじゃないのか？」

そう言つて、俺の胸に体重を預けてしがみついている手を何とか解き、持ち上げてベッドの正しい位置までネイを運ぶ。

慣れたように持ちあげられている間、ネイは俺の首へと腕を回した。

『独りに、しないで…』

小さな呟きは、ネイの本心なのだろうか。今までとまるで違うネイは、小さな子供のようだった。…俺から離れようとしな。

これは、常識的に考えても、よくない事だ。夫婦でも、婚約をしている訳でもない。なのに一つのベッドに入って共に寝るなど…

確かに、女を抱いた時も過去を振り返れば何度かありはするが…

自らどうであれ好意を持っている女と共になど、今まであり得たことがなかった。しかし、目を合わせてくれない少女は、小さく震えている。

…この状態で放っておけるわけがあるか。

一瞬戸惑いはしたが、ネイの隣へと滑り込み、それから震える小さな身体を抱きしめ、いつもと同じように頭を撫でた。

「…ネイ。少しだけ、お前の考えに意見したい。いいか？」

先の語りに、どうしても言いたいことがあった。ネイは自己評価が低過ぎる。己の存在の大きさなど、きつと気付いていないのだから。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かないと、誰も心を動かされることはないと言ったな。だけど、違う。」

跳ねあげるかのように顔を上げ、漸く目を合わせてくれた。その目は大きく見開かれていたが、少し腫れており、赤くなっている。それが小動物を連想させた上に、己の腕の中に収まっているという事実を、その近さ故に気付かされた。

「今は、俺やレーク、城に居る人だって、ネイと関わった人間はみんな明るくなった。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。」

みんな、お前のことを想っているよ。」

思った事を伝えた後のネイは、少し安堵したように微笑んだ。そして、泣き疲れたのか、瞼が重たくなっているようだ。

目を完全に閉じ切る前。

「…よい夢を。」

目を合わせてそう言つと、もう一度微笑んで、眠りへと向かった。

それから一刻ほど俺はこれからの出方を考えながら、ネイの頭を撫でていた。

なぜなら。

「…この状況で寝られる訳がないだろう。」

この時、己の気持ちと欲望に気付いた。

俺は、ネイを…好き、ではなく、愛している。

そう自覚すると、ますますこの状況が厄介になる。しかし、どこか心地よさを感じていた。

己の腕の中で胸に縋りついているこの少女が、自分に気を許していると思えるからだ。

ああ、そうか。俺は随分と前からネイを想っていたのだな。

自覚してしまえば、後はもう募るばかりの情。今までにない感情を思い知った。

自分の生活に、昔から常に追われている。城に住んでいる時には、毎日大人から嫌がらせや暴言を今よりも遥かに多く受けていた。誰が助けてくれる訳でもない。ひたすらに耐えた。

それから、身体の弱い兄よりも健康な俺が王に向いていると進言するものが出て、俺の意志など関係なく、派閥が真つ二つに割れた。そして、暗殺未遂に何度も遭った。

兄を慕い、力になることを元々望んでいた俺は、身の危険を感じて早々に王位継承権を放棄して、遠縁の叔父に当たる宰相殿に引き取られ、騎士団に入団。何とか今の地位に就いた。

毎日の攻防の中、異世界から来たという少女の笑顔に惹かれ、癒

されていた。他のもの、特に他の男に笑顔が向けられると、少し、いやかなり面白くないという事もあった。

それが今ならすべて分かる。腑に落ちた。

俺が神から授かった守人と言う役目は、もしかしたらちよつと良かったのかもしれないな。

俺はネイを全ての柵から救い出し、助けたい。そして、ただ傍に居たいんだ。

小さく微笑み、自分の胸にくっついて離れない少女を一度ギュッと強く抱きしめた。少し苦しそうな声を上げる。

それに今度は苦笑を溢して力を弱めると、寝ている事をいいことに額に唇を落とした。

「俺は何に換えても、ネイを守って見せる。」

熱

朝起きると、クーンさんが私の頭を撫でていた。

ぼーっとする頭で考える。私、寝坊しちゃった？

てゆうか、頭が変。熱が出た時みたいにくらくらして、思考が上手く働いてくれない。

「目が、覚めたか？」

囁くような声。なのに、はっきりと耳に届く。

あれ？前にもこんなことがあった気がするんだけど…？

そう自覚した途端、顔に熱が集まってきた。

ななな、何で隣にクーンさんが寝てるのっ？！てゆうか、添い寝、  
って！

どうしていいかわからない私は、狼狽えることしかできない。ク  
ーンさんはなおも私の頭を撫でていた。

朝から刺激が強過ぎるほどいいお顔ですよね、まったく。女の子  
の私にその麗しさ、少し分けて下さいな。なんて、文句を言ってみ  
ても仕方ないだろうね。

「顔が赤いな。熱があるかもしれない。」

おでこに触れ、そして勢いよく起き上がる。私は吃驚して見上げた。

「・・・熱がある。人を呼んでこよう。」

そう言ったのに、クーンさんは動こうとしない。見つめていると。

「その・・・手を、離してもらえると有り難いのだが・・・」

珍しく口籠っている。だが、理解ができない。

手を・・・？

不思議に思い、自分の右腕に視線を沿わせていくと、その手がクーンさんの衣服を掴んで、行く手を阻んでいた。

『じ、ごめんなさいっ！』

慌てて手を離す。頭を一撫でして出ていったクーンさんを見送り、ふと気づいた。

昨日、一人にしないで、って言ったような・・・？クーンさんが抱き締めてくれてただけじゃなくて、自分がくっついて離れなかったんじゃ・・・

顔に熱が集まり、布団を頭まで被り、丸くなる。本当に熱があるのかどうかがよくわからなかった。恥かしくなって、顔に熱が集まっていたから。



しばらくしてバタバタと人が集まってきた、汗をかいた服を着替えさせられたり、ご飯を食べさせられて薬を与えられたりと、甲斐甲斐しく世話をされた。

何故かすぐにお医者さんも来たし。

でも、一言。そんなに大病患つたみたいには扱わないで下さい。

単なる熱に違いない。それなのに、未だ心配して私の傍に立ち、おでこに乗せたタオルが少し温かくなるだけで取り替える。

あんまりにも過剰な反応だった。

『あの、もう大丈夫ですから。』

何度もそう言って、メイドさんたちによやく出て行ってもらうことができた。そして、嘆息を漏らす。一人の方が、落ち着くから。

昔から、熱を出した時は一人だった。病院へ行くのも、薬を用意したり、お粥を用意するのも自分だった。

人に心配されるのって、あんまり得意じゃないんだよなあ。

心配されるのに得意、不得意は関係ないかもしれないけど、やっぱり慣れていないものだからどうも意識的に気後れしてしまう。

一人で静かにして耐えている方が、断然迷惑もかけないし楽だ。

そもそも、病気の時に心配されたのっていつ振りだろう。最近までは単に迷惑がられてた。

日常なら迷惑をかけたリ掛けられたりと、お互い様だけど、病気の時は一方的に迷惑をかけるだけ。だから、心苦しいの。

「ネイ、大丈夫か？」

ノックをして、すぐに扉が開いた。やって来たのはもちろんクーンさんだ。表情は心配、そのもの。

…やっぱり、慣れないな。

『大丈夫です。薬も飲みましたし、すぐに下がりますよ。』

それに、大した高さの熱でもない。別に少しふらふらするくらいだし、普通に生活してても何ら支障はないと思う。

「でも、かなり熱が高いと医者が言っていた。今日は神殿へ出向けなさそうだな。」

あ、そっか。詳しいことは明日、とかジュノが言ってたっけ。

『大丈夫。行きますよ。』

あのアホのことだ。行かなかつたら罵られるに違いない。病気とか、カンケー無かったもんなあ、前に砂漠で倒れた時は。それに、早く多くを知りたいっていう気持ち強い。

何で言語が伝わっているのか、とか。私が伝えるべき知識は何か、とか。

こつちへ来て一月半程経ってたくさんの人にお世話になったから、その人たちに何か新しい知識を教えることで役に立つのなら、喜んでそうしたかった。だから、私の出方を早く指示して欲しいの。

「その身体で…？」

少し苦い表情をしている。それでもイケメンはイケメンだ。

その表情も絵になるなあ。とか、思わず感心しちゃった。窓から差す光の当たり具合とかもちょうどいいし、これをプロマイドにしたら、高額で売れそう。

って、そんなこと考えてる場合じゃないよ。

自分のアホな思考を早々に断ち切った。金儲け万歳だけど、今はカンケーないからね！

『この熱、単なる知恵熱ですよ。』

クーンさんは不思議そうに首を傾げ、射抜くような目で私を見ていた。瞳の奥には心配が滲みでている。安心を与えるために小さく微笑んで、自分の中で分かっている事を話すことにした。

『もう一人の私の記憶が整理している最中なんです。それに、何となくだけど、今までの私と違うような気がします。』

自分の中に小さな光が見える。それが段々大きくなっていくイメージがさつきから脳裏を過っていた。

「俺にはいつものネイに見えるのだが。」

うん、見た目的にはそうだね。でも、精神的には違うの。なんかこう、自分にもう一人の自分が上書きされたみたい。

それでも自分は自分だから、根本的な事は変わりそうもない。だけど、ちょっと、前よりも暗い考え方が頭を過るようになった。

それがきつと、もう一人の私が存在している証。

『昨日話したもう一人の私が、私の中に居るんです。』

もう一人の私が、自分の中に入って来た。自分に重なっているようにも、別のもののようにも感じる。少し違和感があるけど、嫌悪するほどじゃなかった。

『昨日みたいに、私混乱してないでしょう？』

頷くクーンさんに、昨日は自分のことのように感じてたことが、今は別物に思える事を言うと、腑に落ちた様な顔をしていた。

「昨日はネイらしくないとは思っていたが、今朝は元通りだったな。今は、精神的には落ち着いているのか？」

『はい。両方私だもの。』

これは言い切れること。確かに高2の私は、人生が辛いと感じて自殺しようとした。だけど、やっぱりこの世界に来れたから。ここに居る人たちと交流して、優しさを知って。人を信じてても良いって思えるようになって…

そうやって、私たちは成長できるんだと思う。

「それは分かった。しかし、やっぱりその体調で出向くのは難しいと思うのだが。」

クーンさんって過保護？これくらいの熱、大したことじゃないのに。

『なるべく早く、ジユノと話しておきたいんです。』

この国のこと、成り立ち。それを神様から聞けるなんて、すごくラッキーな事だと思うんだよね。貴重な体験だから、いくら相手があのアホ神でも利用してやらなくちゃ。

あれ、と疑問に思うことが一つ。なんで、クーンさんが今ここに居るんだ？

だって、もうとっくにお仕事の時間でしょ。普段ならもう城で書類と睨めっこしている時間だ。

それを聞くと。

「有休を取った。」

と、まっとうな答えが返ってきた。でも、あれだけ時間を惜しんで仕事してる人が、なんでこんなタイミンで休むの？そう考えたら、答えは一つ。

私の、所為。

『…ごめんなさい。』

昨日、泣きじゃくったり、一人にしないでとか言うから。それに、熱なんか出すから。迷惑、かけちゃった。

「迷惑、とか考えてないよな？」

そう考えて当たり前じゃない。だって、迷惑でしょ？

不安になって、クーンさんを見上げる。表情はいつにもまして仏頂面に拍車がかかっていた。

な、なんか怖い…

見下ろされている所為か、醸し出している空気の所為か。意識的にそうしてるのかは定かじゃないけど、今までにないくらいの無表情さだった。

『ごめんなさい…』

さつきから、謝ってばかり。だけど、それしか言えないんだもん。それに加えて、クーンさんの表情が怖い所為でもある。

「ネイ。迷惑なんてかけて当たり前のものだ。」

一人では生きていけない、クーンさんはそう言った。

確かにその通り。でも、私は一人で生きようと今までずっと心がけてきていたから。その考えを急に正すことなんてできない。思いを素直に口にする、少しずつでいいと言ってくれた。

「半休だから、午後からは城に行かなければならない。ネイは夕方まで寝ている。夜に迎えに来るから。」

それって、二度手間じゃない？私が一緒に行けばいいものを、そんなことでまた迷惑…って、また迷惑って思っちゃった。

それを読み取ったのか、クーンさんは苦笑している。そんなに顔に出てたかなあ。

「ネイはこの国の重要人物になるだろう。たとえそれが公にならなくても、俺の中では乙女に変わりはない。神に怒られるなど、勘弁だからな。」

そうだね。一応は神様と話すことができるのは私だけだし。あんなのでも、一応は神な訳だし、敵牢に扱うことなんてできないんだよね。

面倒な立場だ。

「俺が戻るまで、いい子に寝ている？」

いいな、と念押しされてしまえば、頷くことしかできない。私の頭を撫でたその時のクーンさんは、極上の表情で私を見ていた。

やっぱりイケメンは目に入れ過ぎちゃいけない！

動悸が激しくなった私は、ギョツと目を瞑る。しばらくするとドアの開閉音が聞こえ、部屋の中は妙に静けさが際立っていた。

言われた通り、私はクーンさんが戻るまで寝ることにする。目を瞑ったままいろいろな事を考えてるうちに、眠っていたみたい。何かに触れられる感覚で意識が浮上した。

目を開けると、そこには。

『クーン、さん？』

ベッドに腰掛けて頭を撫でてくれているその人がいた。その微笑みは優しい。

もう迎えに来てくれたのかな。寝てると時間って妙に早く経ったように感じるよね。

窓の外を眺めてみれば、日はもう傾いていて空は茜色に染まっていた。薬が随分と効いてみたい。ぐっすりと眠れた。

「そろそろ神殿へ向かおう。体調はどうだ？」

『少しだけ身体がだるくて、ぼーっとします。だけど、朝よりは全然マシ。』

身体の状態が少し良くなったことで、朝の体調の悪さが分かった。随分とキテみたい。今思うと相当辛かったんだなあ。

「ならいいが、どうする？今日は止めておくか？」



また心配してくれているみたいだったけど早く自分がここに来た意味を知りたい私は、大丈夫の一言で何とか了解を得ることができた。ただ、あまりに女中さんが心配して、神官服の下にも上にもたくさんの防寒をされたのには少し驚いた。

そんなに酷くないのになあ。

そう思っても、あんな顔して世話されたら、されるがままになるのは仕方ない事だと思う。

着替えの手伝いを断ろうとした時、泣きそうな顔、されましたよ。こっちの方が悪い事を言ってる気分になってokをしたけど、こんなに着せられるんなら断ればよかった。

嘆息を一つ零し、クーンさんが待つ馬車へと向かう。それに乗り込むと、すぐさま神殿へと向かった。

## アホ神の言うことには。

いつもと違う場所から入ったのか、降りた時の景色はいつもの所とは違うものだった。しかし、同じものも一つ。いや、一人。

「大丈夫ですか？」

いささか心配そうにしているレークさんがそこに居た。どうやら待っていたらしい。その顔も心配そうだった。でも、そろそろその表情飽きてきたぞ！

『みなさんが過保護過ぎるだけで、それほど大したことではありませんよ。』

ポロつと口にしていた。それを聞いたクーンさんは渋い顔をし、レークさんは笑う。ホント、二人って対照的だね。

話をしながら、神殿へと向かう。てゆうか、このお城広すぎ。こちから入ると、道筋なんか全然分かんない。遅れないように二人について行かないととんでもないことになりそうだ。

迷路のような廊下を進む二人は、きつと記憶力が半端ないに違いない。

すれ違つ人に見られたりしたけど、極力戸惑つような表情は出さないようにして進んだ。挙動不審だと逆に怪しまれるからね。何事も無い様に澄ました顔してるのがイチバン。

さっきの場所からの方が中央の神殿に出やすいのか、早くに着いたけど、やっぱり道筋は覚えられなかった。

一步神殿に足を踏み入れると、その空気は澄んでいて、昨日と同じように神聖だと思った、のに。

「やあ、待ってたよー。」

気が抜けたのは仕方がない。このアホ神がまたふざけた格好抜かしてるから！

今日はどうして浮き輪をしてるんですか！この寒いのに時期外れだって話ですよ。てゆーか、いちいち使い方が分かってないよね。

分かんないんだったら着けなきゃいいのに。

脱力した私を見て、二人は私の肩に触れてきた。どうやら神の姿を見ようとしたらしい。

どうかこんなのを見て、呆れないであげて。って、なんで私がフオローしなくちゃならないんだって思っつて、口に出すのは止めておいた。

「あれ？具合が悪いのかい？だったら休んでいなきゃダメじゃないか。」

『来なかったら文句言つくせに、そんな心配そつな顔するの止めて。』

至極真面目に言ったのに、分かっているじゃないか、と言ってジユノはへにやっとした笑顔を浮かべた。

そう言うところが頭に来るんじゃない！

文句を言ってやろうと思ったけど、頭に血が上った所為かクラッとしてしまった。そこを支えてくれたのは、毎度お世話になっているクーンさんだ。

「やったー。また僕の乙女とイチャイチャして！

…ところで、君、名前なんだっけ？」

死ぬほど失礼！大体人に名前を呼ぶことを許そうとか言っというて、人の名前覚えられないなんて横暴過ぎる。そのうち信頼失くすね。…って、信頼とか神様にカンケー無いのかな？

ま、そこは置いといて、早く話を進めよう。なんとなく、背筋に寒気が走った気がした。今日は冷えるし、早く帰った方がいいのかもしれない。

『ジユノ、話の続き聞かせてよ。』

で、その前に私の名前はネイ。こっちの神官服着てる人がレークさんで、私を支えてくれる人がクーンさん。お世話になってるんだから、ちゃんと覚えてよ。『

文句タラタラですみませんね。でも、折角名前があるのに呼ばれないなんて悲し過ぎる。その空しさを、私は知ってるから注意した

の。

向こうに居る時はずっと、“お前”とか“おい”とか“ちょっと”って言われてた。

私に名前をくれた人ですらそう呼んでたの。それって、悲しい事でしょう？

…って、また暗い思考に……

もう一人の私に引っ張られてるなあ。

頭の中ではそう分かっていても、もう一人の私に思考が引っ張られるのは止められなかった。

「分かったよ、ネイ。それに、レークは元より知っているし、王族の血を引いているクーンを知らない訳ないだろう。」

あ、それもそうだね。

納得して頷いていると、満足そうにジユノも頷いていた。

てゆうか、分かってるんだったら最初からそういう態度とって欲しいもんだよ。

呆れながら見ていると、レークさんから注意を受ける。神さまなんだからもっと敬えって。

「確かにねー。僕も曲がりなりにも神様だから、やっぱり敬ってもられないと。信用問題って、大切だよねえ。」

その口がそれを言うか。本当に、いつかシメてやる！こんなジユノのどこを敬えと？！

何よりそのへにやっとした笑顔がむかつく。これほどまでにぴったりの表現の仕方は思いつかない。

「まあ、そう怒らないでよ。それより、君の体調が悪くなるのはわかりきってたことなんだよ？」

…ちよつと待て！今聞こえたのは空耳？

確認してみたけど、空耳じゃなかった。ここまできると喧嘩を売ってると思えない。

『聞いてないんだけど？』

「だって言ってるじゃないもん。」

クロス！なにが“言ってるじゃないもん”だ。大人の男が使っても可愛くも何ともないからね！

怒りでいっぱいそのまま飛びかかろうとしたけど、二人に止められてしまった。

女一人対男二人では力の差は歴然。糸も簡単に止められちゃって少し残念だった。

「ネイ、少し我慢しろ。体調はまだ優れないんだろう？」

優れてたら殴りかかってもいいかって聞いたら、やっぱりダメ、  
だって。残念。

「話が進まないなあ。もう口開いてもいいかい？」

だ・れ・の、せいだっつーの！

いや、ここで怒ったらまた進まない。一つ大人になって、私はぐ  
っと我慢した。

「悪いけど、今日の話の後で君はまた体調不良に襲われることにな  
る。心して聞いてくれ。」

前提にそれって、ちよつと構えちゃうよね。それでも、嫌という  
雰囲気を出せない私は、黙ったまま一度だけ縦に頷いた。

「君はこの世界に新しい技術を伝えるためにやって来た。そして、  
神（僕）との対話を人に伝えるという意味もまた持っている。」

ここまではいいね、と言われ、また一度頷く。口を挟むとどうも  
ケンカ腰になっちゃうからってという理由を込めて私は頷くだけに留  
まっていた。最善の策でしょ？

「そして、君は不安に思っているかもしれないが、どれ程の技術を  
伝えることができるか、という問題がある。それに関しては問題は  
全くないという事を伝えておこう。」

ジユノの言うことはさっぱり分からない。だって、単なる学生だ  
った私がそれほど多くの知識を持っている訳ないでしょ。そう思っ

ていたら、ジユノはどんどん説明を続けていた。

「君には向こうの世界の知識をあまりなく授けた。そうだろうか？」

昨日のように問いかけの後、私はめまいを感じた。そして、また金切り声を上げて叫ぶ。昨日は記憶のせいだったけど、今日は頭が割れそうなほどの頭痛に襲われたからだった。

昨日と同じくクーンさんに支えられはしていたが、床にへたり込む。頭を抱えたまま動けそうになかった。

「あー…やっぱり知識が暴走したか。」

頭痛がようやく治まってきた頃、ジユノは呟くようにそう零した。

「知識の、暴走？」

怪訝そうな声。表情は見えないけど、心配そうにしているクーンさんの声は固かった。

「ああ。彼女はまだ若いだろう？学生は基本的な事しか学んでいない。だからこそ、様々な専門知識を詰め込んだのだよ。それに、力も。」

「どうだい、ネイ。具合は最悪だけど、状況ははっきりと分かるだろうっ？」

まったく持ってその通りだった。私の脳内にはいろんな知識が溢れている。これならどんなことにも立ち向かっていけそうなほどの情報量だ。



だけど、弊害が最悪。

気持ち悪いし、頭痛いし、ふらふらするし。この分だと、熱が上  
がったに違いない。

「ね、体調が悪くなるって言ったろう？」

ね、じゃないから！

昨日の比じゃないほどの体調の悪さは、もう立ち上がれないほど  
のもので、意識を保つのに必死になるほどだった。

クーンさんに支えられていないと、倒れちゃいそう。座っている  
のに、身体は楽じゃなかった。

「今なら君にたくさんのが聞けそうだけど、知識の多さで混乱  
しているはずだからここは譲ろう。」

僕に聞きたいことはあるかい？」

もちろん。山ほどありますよ。

『なんで、個々の言語が私には理解できるの？』

文字も、言葉も分かる。それこそが一番の謎だった。私が貰った  
のは、地球でのあらゆる知識。人間の脳には多すぎるほどのもの。

だけど、言葉は違う。こっちのものだもん。

「ああ、それは面倒だったから、言語全般に知識を与えたんだ。」

そう言われてみれば、英語とかフランス語とかも分かるような…？

てゆーか、こんな知識いらさないよね。脳内の容量はこの所為で大きいのもかもしれないし。

「今の君なら、どんな世界を旅しても言語のおかげでだまされることはないだろうね。」

それはどうも。だけど、あんたの所為で私はここから出ることにできてないんだけどね。

厭味つたらしくそう言うと、緩い笑顔でどういたしまして、と返された。褒めてないし…ま、ここでいくら文句を言おうとも、もう無駄だって分かってる。だからこそ、違う話題に変えることにした。

『魔法、なんで使えるの？私、よく分からないんだけど、今なら何でもできる気がする。』

「そりゃあ、もう、これを読んだからだよ！」

ジュノがそう言って指差したのは、ケータイ。ってか、なんでケータイ駆使してんのに、遊び道具全般の知識は疎いの？

それより、何で神様がケータイ持ってんの？ツッコミどころが万歳過ぎる。だけど、面倒だから敢えてしないのは、面倒だと言えるからだ。

「君たちの文明はすごい発達力だね。読んだケータイ小説に、異世

界トリップものがあってね。それを参考にしたんだよー。」

何て適当な神様なんだ。それでいいのか、ジュノよ…

少し心配になった。

「こういうものはトリップした者がチートってのが定番なんだろう？大丈夫、死亡フラグは立たないようにサポートするから！」

それ、言いたかっただけですよね？！異世界の神様が、チートとかフラグとか。それでいいんですかね。

物を言う気も失せた。つてのは、ジュノのヘラツとした笑顔に脱力したのと、体調の悪さが最高潮に達した所為だとも言える。

「とりあえず、言いたかったことは伝えられたし、また鏡盆祭の時に会おう。」

その時にネイにはレークのサポートしてもらわなければならぬ。いいね？」

そう言っつて、勝手に消えやがった。やっぱり言いたかったただけかよ…

私は意識を手放した。

神様曰く、私はチートになったらしい…

何て厄介な事をしてくれたのさ。私は平凡がいいのに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0585x/>

---

異なる世界で

2011年10月24日00時58分発行